幽霊は同居人？

石鍋 盥回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊は同居人？

【Ｎコード】

Ｎ５２７４Ｂ

【作者名】

石鍋　盥回し

【あらすじ】

幽霊を天へと送る、浄霊。その家系に生まれた高柳恵助は格安アパートで女の子の幽霊、レイコとであった。彼女を浄霊するために、恵助は行動を共にすることになったのだが……学園ドタバタ恋愛？バトル？ほにゃららモノです。

序章

プロローグ

「頼む、頼むからついて来ないでくれー」

真っ黒な髪の毛をした、少し頼り無さそうな少し垂れ目のおそらく文化部系の青年は、心の中でそう繰り返し、早足で歩きながら右手で皮製の黒い学生鞄を、左手には皮張りの黒い筒を握り締めた。

そう、今日は感動的な中学校生活を締めくくる卒業式……のハズだったのに。

この青年の名は高柳恵助。

誰に対してもいつもやさしくあり、困った人を助ける子になるようにと、両親が漢字を1文字ずつ持ち寄った『恵む』と『助ける』をあわせた名前だそうだ。

その両親はというと、父親は仕事でずっと海外にいて、母親はずいぶん前に他界した。だから今は少し変な、鬼のような姉と二人でアパート暮らしをしている。

だから今日の卒業式にきたのは歳が離れたその鬼姉だった。

背は低くはないが高くもない一七二センチ。

少し頼り無さそうな見た目通り、バスケやサッカーや野球のような

王道系のスポーツは苦手な、そして学校の成績の方も中の下、という特に取り柄が無さそうな、今年から高校生になるという平凡な学生だ。

しかし、どんな人間にも多少の秘密があるように、恵助にも人にはとても言えないような秘密があった……と、言うよりも、恵助の家系にはあった。

そしてそれをまったく知らないまま今日を迎え、そして今日、突然恵助はその秘密を嫌になるほど体感している。

［なんで、あなたは感動的な卒業式を迎えられたのに、私にはそれが出来なかったの？］

キィイイイイイという、軽い痛みを伴うほどの耳鳴りがすると同時にかすれた声が背後から聞こえ、背中に何百という虫が這うような寒気が走る。

必死に前に動かしていた足が思わず動かなくなって、脳から発せられる電気信号を体のどこかで薄いゴムが完全に遮断したみたいに体が硬直した。

手の平には汗をびっしょりとかいて、皮製の鞄がそれを吸いこまないためにぬるりとした感触がなんとも気持ち悪い。

［私はいつも成績トップだったし、運動でも女子バスケをひっぱっていたわ。ヴァレンタインデイには義理でもいいからチョコレートをもらおうと大行列もできた。そんな私が卒業式を迎えられなかったのに…］

うっ　と、声をもらしたと思ったが、周囲を歩いている人達は道のど真ん中に立ち止まる、見るからに卒業式後の一人の学生を怪訝な目で流し見るだけで、恵助に声をかけるものはいなかった。

どうやら声は出ていないようだ。助けを呼ぶことも出来ないらしい。

多分、今俺は卒業式の内容を思い返して感慨に浸る少し面白おかしい一人の男の子ってトコロだったりするのだろう。

首のあたりで青白い指がゆっくりと顎から喉仏の下あたりに向けて這うように動いている。

［なんで、見るからにトロそうなあなたは卒業できたのかしら！？］

首に巻き付いた手の指がゆっくり、ゆっくりと曲げられていき徐々に喉を圧迫して来る。

こめかみのあたりから一筋の汗が顎まで一気につたい、それと同時に卒業証書が入った皮の筒を手の平から流れた汗が伝い、一番下の縁から一滴地面に垂れた。

何でこんな事になったんだろ――――ああ、あの時に目をあわせたからだったっけ。

恵助は目の前が白くなっていくにしたがって、ゆっくりと自分の身に降りかかっている状況の顛末を思い出してきた。

恵助が卒業した中学は、卒業生一人ずつに校長が卒業証書を授与する形式を取っている学校だった。

恵助は最後の七組で、長い待ち時間の間でぼんやり、少しウトウトしたまま自分の番が回ってきて、少し頭を振って壇上に上った。

そして軽く礼をして一歩校長へ踏み出したとき、壇上の袖の所で体の左半分をカーテンに隠すようにして寂しそうにこっちをみているその子に気付いた。

練習通り証書を授与されて舞台から降りるとき、不思議に思ってその子としっかりと目をあわせてしまってからその子の体が普通ではないことに気付いた。

その子はおそらく自分と同い年くらい。しかし、首が座っていない、というか首の骨がおかしいようで、頭が正常の位置から転がり落ちそうになっているのを、ゆらゆらと体を揺らして何とか維持しているようで、近づいてからやっと見えた左半身は全体的に薄紫色をしてあざになっており、肩、肘、手首が脱臼ないし、骨折しているようで、直立しているのに左手の指が地面につきそうなほど伸びてしまっていた。

足を止めて思わず大声をあげそうになったのを口に手を当てて目をつぶった。

どうやら周囲は少し感動したため足を止めたくらいに思ってくれたらしく、さして異常を感じ取った人はいないようだった。

ぐるぐると回る頭の中を、今、自分は寝惚けていたんだ。

だからありえないような物を見た気がしただけだ、と言い聞かせて思考をねじ伏せた。

ゆっくり、おそるおそる目を開けるとそこにその恐ろしい女の子の姿はなかった。

ほ〜、と大きなため息をついて舞台に一礼し、自分の席へと進んでいく。

そして練習通り舞台下で黒い皮製の筒とちょっとした書類を受け取り、座る前にも一礼して列の真ん中の辺りにある自分のパイプ椅子に座った。

寝惚けて夢を見ただけなのに、額にはぐっしょりと酷く冷たい汗をかいていた。

ひどく頭をぼんやりとさせたまま残りの予定をこなし、最後にすすり泣きが混じった蛍の光が体育館内を満たした後、順番にカーネーションをもって体育館外へと向かっていった。

頭がやけにハッキリしないまま、残りわずかな中学生としての時間は終わっていた。

寂しいことに、とくに第二ボタンを取りに来てくれるような人はいないので、同じ高校に通う予定の坂本伸行をふくむ、友人達とのとたわいのない会話をして家へと向かった。

そう、そこまでは何の事はない、少しだけ味気ないただの普通の卒業式。

そして異常は一歩校門を出たところからはじまった。

意思に反して帰宅一歩目が向かったのは家と正反対の方向だった。

そして背後から冷たい纏わりつくような空気が吹いてきて、それに乗ってすすり泣きのような声が聞こえてきた。

恵助は振り向かなくてもさっきの舞台袖の女の子だと頭が確信して、家と正反対だとわかりながら無理に早歩きで街中へと歩いていった。

ああ、苦しいなぁ。

走馬灯って子供の頃からのことを思い出すんだって誰かが言っていたけれどそんな事無かったみたいだ。

ついさっきのことしか思い出せなかった。

……あ、なんか気持ちよくなってきた。

そう言えば、鬼姉の目をかいくぐって部屋に持ち込んだ、ノブに借りたあのアイテム、通称『プルート』が部屋の引き出しに入れっぱなしだ。

こんなところで変死したら警察とかが部屋の中を調べたりするかもしれない。

それは勘弁して欲しい。っていうかマズイ。やっぱりまだ十八歳未満だし。

なにより半分しか見てないし。

頭がホントにボーッとしてきた。

理不尽に迫る死に、猛然と湧き上がった強烈な怒りを通り越して、なんか、もう冷静になっている。

力が入らない…

鬼姉、多分死んじゃったら怒るだろうな。

普段から、おまえにもそろそろ幽霊が見えているだろうなんて俺に迫ってきたような変人だけど、いざ幽霊を見て、死んじゃったなんていったら生き返らされてから散々叱り倒されて改めて殺されるかもしれない。

ほんとに、見えるようになって、こんなことに、なるなんて…

そこまで考えたとき、不意に恵助の手に握られていた卒業証書が入った筒を後ろにひったくられた。

「バカタレ――！！！！」

耳元でおっそろしく大きな怒鳴り声が聞こえて、今取り上げられた筒で思いっきり後頭部をひっぱたかれた。

パカーンなんて音と一緒に、大切な卒業証書と、その入れ物が折れた。

「痛ああ――って…あああああああ証書おおおおお」

「ウルサイ！！街中で騒ぐな！！」

恵助が叫んだ声よりもよっぽど大きな声で、道路に転がった証書の残骸を拾う恵助の事を鬼姉こと、高柳撫子は怒鳴り付けた。

常日頃から思っていたけれど、この強暴な姉貴には撫子なんておしとやかな名前は似合っていない。

口に出したら殺されてしまうかもしれないから言わないけれど。

おかしなものだが、それから確かに鬼姉は『憑いてきた幽霊』と恵助を引っ張り、あまり人通りが無い細い路地へと引っ張り込んだ。

「あんたねぇ、何いきなり霊に引っ張られているのよ！！そのまま死ぬつもりだったの？だいたい運が悪いにも程があるわ。卒業証書授与直後に様子がおかしいと思ったらまんまと憑かれているし、それにすぐに見つかる位置にいれば良いのに一人でこんな街中まで迷い込んで！！それに私並の『目』をいきなり使えるようになっているのだっておかしいし」

憤然と髪をかきあげた後、肩に下げていたバッグに手を入れると、撫子はすっと厚手の白い紙を山折りと谷折りを交互にした、よく昔のＴＶ番組で見かけた例のもの、つまりハリセンを取り出し、再び恵助と憑いてきていた幽霊の女の子の頭を殴り飛ばした。

それがバッグよりも大きかったのでどうやって収納したのだろうと思ったが、想像していたよりもその衝撃が痛くて、その疑問は二秒で吹っ飛んでしまった。

スパン、というキレの良い音が二度して、俯いた女の子の長めの髪が乱れて顔にかかる。

「だいたいあなたもいい加減自分の立場を知りなさい。いつまでもこんなところにしがみついていたって幸せになんてなれないわよ。あなたは……えーと……そうなの。トモミさん、たしかにそれは辛かったでしょうけどもう死んでしまっているの。もう一度言うわ、死んでしまったのよ。だから今生きている人を引っ張って連れて逝ってはいけないの。」

ピクッと頭を揺らし、ゆっくりとトモミは顔を上げる。

少しずつ見えてくるその顔は恐ろしく歪んでいて、一昔前の貞〇がＴＶから出て来るのを彷彿とさせて、この世の終わりを見るようなとても恐ろしいものだった。

「あわわ、姉貴言い過ぎだって。いくらなんでもそこまでいうのは……うっ」

言葉が終わる前にもう一発強烈なハリセンが飛んできた。

「ウルサイ！！いろはもわからないヒヨッコが口出ししない！！あと動揺していたからって、あわわ、なんて恥ずかしいから二度と言うんじゃないわよ。」

そうこうしているうちにどんどん俯いていた顔が上がってきた。

「ちょ、ちょっと言い過ぎの上、叩きすぎだったみたいだから謝りなって」

「ウルサイ！！何回言わせる気？黙ってなさい」

撫子の最後の罵声が終わるころ、ゆっくりと顔が正面を向いた。

先程までの歪んだ表情ではなく、それは凍り付いたような無表情だったが、漫画などにあるような背後に『ゴゴゴゴゴゴゴゴ！』という効果音が乗っかりそうなプレッシャーがある。

全員黙り込んでからの二、三秒が永遠のように長い。

と、沈黙を打ち破って幽霊ことトモミさんが一歩こっちに踏み出した。

「あ、ごめ……」

［ほんとすいませんでした〜］

恵助が後ずさりしながら思わず謝りそうになった瞬間、トモミはやたら爽やかな笑顔を浮かべて、天から差しこむ光に乗って消えていった。

「あ、れ？どういうこと？今メチャクチャ怒ってなかったっけ」

「そんなこと今は良いの。それよりもこれから二週間、高校にはいるまで私の地獄の浄霊強制強化特訓よ。まあ、それをやれば今の事も理解できるようになるでしょ。高校入ったらあんた一人で暮らさなきゃになるんだし。」

タップリ、めいっぱい、これでもかというほど邪悪な笑みを浮かべて撫子は恵助を上から下まで見つめた。

第六感でさっき幽霊に捕まった時よりも強烈な危険信号がビカビカなっているけれど、蛇に睨まれた蛙のように体が動かない。

鬼姉にぐいぐいと腕を引っ張られ家が近づいて来ると同時に勝手に涙腺が緩んできて、短い走馬灯を見た瞬間よりも確信して恵助は認識した。

『この特訓で、自分は死んでしまうんだろう』

と。

『格安アパート』

まったく、ついこの間の中学卒業式以来ろくなことがない。

まして、今回は完璧に自分のミスだった。

恵助は引っ越すことになった格安アパートの前に立ち尽くして、一人うんざりとため息をついた。

比較的田舎といっていいこの埼玉県の小日向高校に進学する関係で、親父の実家にお世話になるのが申し訳ないので親戚便りでとにかく安く、風呂、トイレ、台所完備のアパートを借りるのがいい、などと非現実的なことをのたまってしまった自分にあきれてしまう。

そこは、高校にも近く、町の中心部に位置する物件で、普通に考えたらいくら都心でなくてもそれなりの値を張ってもいいはずだった。

いったい月いくらなのかと、ぶっちゃけてしまうなら上の条件をすべて満たしてなお、二万円である。

二万円で条件を満たしていると聞いた時点で、実際に見ないで電話で即決してしまったのが馬鹿だった。

だから、こうして実際に見て酷く後悔しているんだから。

アパートは一階と二階の二つしかないが、外見自体は悪くはない。

ただしそれは普通の人が見た第一印象ならば、だ。

『目』を持つ人間が見たなら一発でそこに誰かいることはわかってしまう。

それにここに来てご近所さん、町会役員から聞いたことだが、普通の人にも気配を感じ取ることができて、二階に住んだ人はみな二週間もしないうちにみんな出て行ってしまう、とのことである。

鬼姉から受けた地獄の特訓によってある程度霊に耐性その他が出来ているけれど、これから暮らす空間にそんなに強烈なのがいると厳しい。

そして、月々の仕送りを考えると、今から新しいアパートを探し、そこと契約するのはより懐が厳しい。

恵助は大きく息を吸い込むと、ついこの間までの地獄を思い出してそれに比べればこれくらい！と、めいっぱい自分を奮い立たせるとだいぶさび付いている階段を上り、特訓で身につけた、『目』を最高まで鈍らせるスイッチを入れて部屋の中へと踏み込んだ。

『目』というのは、霊を知覚することが出来る能力を総称して使う言葉らしく、普段から霊を見ることが出来てしまうとすべての霊が助けを求めてついてきてしまうため大変危険らしい。

一般に霊能力者の類が力に目覚めるのはこの『目』からで、一般人

が感じ取ることが出来ない小さい霊がいたとき、なんとなく鳥肌が立つ、背中に寒気を覚える、手のひらに汗をかくなどというところから始まるらしい。
そこから、意識的に視界の隅で見ることが出来る、意識的に見ないように出来る、意識的に正面から見ることが出来る、意識的に強制鈍化が出来る。
というのが大体の流れらしいから、いきなり卒業式に目覚めた俺がいきなりしっかりと霊を感じ取れたことは珍しく、かつ危険な状態だったらしい。

だから……

一瞬手足が硬直し、軽い震えが体に走る。
――今はまだ心が癒えていないからそれ以上『無理やりいきなり強制鈍化習得訓練』の内容を思い出すのはやめにした。

改めて部屋を見渡してみると確かに、かなり鈍化しているのに『わかってしまう』。
これじゃあ普通の人には鈍化できる人なんかよりよっぽど危ない。
部屋自体は一人暮らしするのには十分すぎる広さだった。
玄関を開けると一畳に少し足らないかなくらいの玄関、まっすぐに伸びる床の先には台所があり、そこも二人で作業することが出来るくらいのスペースがあった。

その廊下の左側には風呂と、築十年ほどのアパートにしては珍しい洋式のトイレ。

右側にはすりガラス製の引き戸があり、あけると大きな窓がついた四畳半が一部屋。

押入れが二つ。

ふすまを開けると六畳の部屋が一部屋。

ここが居間に当たるのだろう。

台所とこれまたすりガラスの引き戸でつながっている。

「いい部屋じゃん！」

さっき覗いた四畳半の部屋の隅に、おそらく女らしい霊の気配を感じたがこれ以上できないほど鈍化しているので、わざと聞こえよがしに一人ごとを言ってみた。

少し、プレッシャーが飛んでくる。

しかし恵助はすました顔を崩さない。

「少し、埃っぽいかな。」

部屋中の窓という窓すべてを開け放って新鮮な空気を室内に入れる。

当然、霊がたっているすぐそばの窓も開け放つ。

まだ少し冷たい空気が部屋の澱んだ埃っぽい空気を押しのける。

恵助が軽く深呼吸をしようとしたとき、窓がキシ、となってゆっくりと半分閉じてしまった。

再び開け放つが、半分閉まる。また開けても同じことの繰り返し。

……すばらしいアピールっぷりだ。

ちなみに、霊が活発に活動するのは夜ではないのか、という話は一般論でしかなく、夜によく幽霊を見たというのは、闇にまぎれて見間違うのか、幽霊が出そう、暗いの怖い、後ろに誰かいるんじゃないかなどと、精神状態がナイーブになってシンクロしやすくなるためである。

つまり幽霊様は、実のところ朝から晩まで、年がら年中『元気』なのである。

「立て付けが悪いのかな？あ、しばらく人が使ってなかったんだから、あれやらなきゃ。せっかく全部窓開けたのにな」

恵助は窓を閉めて持ってきた掃除用具の袋から、『パラさん』という坊主の、異常に目がギラギラしたハナタレマシュマロマンのようなキャラクターが虫をもしゃもしゃと食べている不気味な絵が描かれた缶を持ち出し、部屋の中心で踏んで、煙が出たのを確認して部屋を出た。

今日明日で部屋の大掃除を終わらせなければ引越し業者が荷物を持ってきてしまうし、何より学校が始まってしまう。

ちょうど今昼時。

少し近所をぶらぶらと歩いて昼飯を食べて帰ればパラさんは終わっている時間だろう。それと。

外から部屋の様子を伺ってみる。今は特に何も感じ取れない。

ひとつだけ気がついたことがある。

あの女の霊、名前がわからないから仮に霊子さんとしよう。

霊子さんには悪霊の類が持つ悪意のプレッシャーがまったくなかった。

一連の怪現象は純粋ないたずらか、何かのメッセージを伝えたいかのような様子なのである。

――もしも何か理由があるなら、話し合いで浄霊出来るかもしれない。もっとも、こっちが完璧に知覚していることがあっちにばれたら事態が急変するかもしれないから、それまではばれないようにしといたほうがましかもな。

そんなことを考えて、恵助は時間つぶしに町へと繰り出していった。

／

［何よ何よ何よ何よ～あの鈍さは～鈍いにもほどがあるわ！あれだけアピールしたら何かしらの異常を感じ取ってもいいはずなのに～！『いい部屋だ』ですってぇ？今までみんな、一歩入ってきて違和感を覚えていたのに！『立て付けが悪いのかな？』ですってぇ？私がやってんのよぉ！何で気づかないのよ～！これじゃあ見込みがないじゃないのぉ！］

恵助が去った後の部屋では霊子（仮）が一人地団駄を踏んでいた。

キシ、パキ、とラップ音が鳴り響く。

その顔は寂しさにより今にも泣き出しそうな様子である。

霊子はその場に座り込み、一人体を揺らしていたが、ふと、部屋の中心で煙を撒き散らす物体に興味を持ってその殺虫スプレーの缶をつまみ上げた。

濃い煙のせいか、めいっぱいまで顔に近づけなければ缶の絵柄が見えない。

ぐっと顔に近づけ、パラさんが見えた瞬間に、踵から一気に頭の先まで小虫が這い上がる感覚。

［ひゃっ］

霊子はパラさんを投げ捨て、すぐさま部屋の隅へと退散した。

［何おいて行ってんのあの男。なんなのあの不気味なキャラクターは！怖いよー。ここから出られないし、こんなに煙だらけだとなんか気持ち悪いし誰か～早く何とかして～！］

霊子の悲痛な叫び声は少しパラさんの煙を揺らめかせ、すぐに消えてしまった。

その他の変化といえば、隣のおばさんが井戸端会議の時の話題を手に入れたくらいのものでしかなかった。

煙が薄くなっていき、そろそろ二時間がたとうとしていた。

あの男が帰ってくるころだろう。

［こうなったら最終手段よ！いっそのこと追い出して次に来る人かけてやるわ！］

霊子は残酷な笑みを浮かべてパチンと指を鳴らした。

この状態を見れば大概の人間は一目散に退散するはず。

霊子の合図に誘われるように部屋の隅、小さな穴から黒い塊がゾロリと出てきた。

／

恵助は再びアパートへとたどり着き、カンカンと錆び付いた階段を上った。
回りが悪いノブに手を置き、状態を鈍化して一度深呼吸をする。
玄関を開く音がやけに響いて聞こえて、さっきまでとは違ったプレッシャーが部屋を支配していることに気がついた。
わずかに警戒し、かつ自然なそぶりでさっき霊子さんがいた部屋へと踏み込んだ。

「ん、なんともない、か。」

わずかに残った煙のニオイを出すためにすべての窓を開け放つ。
なぜか部屋の隅に吹っ飛んでいた殺虫剤の缶を手にとって、片付けようとしたとき背後に異様な気配が急に生まれた。
それは霊のそれではなく、明らかに何かしらの生物によるものである。
ゆっくり、時間が止まった部屋の中で恵助は振り向いた。
そこには、霊子がいるらしき部屋の隅にある穴から、いい感じの照り具合の黒いダイヤモンド、ブラックマトリクス、連〇の黒いやつこと、ゴキブリが畳を半分埋め尽くすほど大量に走り回っていた。

恵助の体が一瞬にして冷たくなり、紙やすりでもこすり付けられたような痛みに近い寒気が背に走り、体の大部分の毛穴が閉じ、そのくせ、嫌な汗が額に浮かぶ。

呆然とそのさまを見ていたら、突如動きまわっていたブラックマトリクスたちが一斉に止まった。

気のせいか、やつらは一斉にこっちを見ている気がする。

［振り向くな！仲間の死に足を止めるな！あの煙によって失った友の死は等量の敵の血によってあがなうのだ！共にあの超絶鈍感男をこのアルカディアから追い出そうじゃないか。全軍、突撃ぃ～！］

霊子の拳を振り上げながらの号令によって最前線にいる足軽たちがパッと羽を開く。

やつら、飛ぶ気だ！

フラッシュバックのように、昔泊まりに行った本家でカーテンを開けたとき、ガラスに張り付いていたブラックマトリクスに襲い掛かられたことを思い出す。

ブチン！

恵助の頭の隅で、何かが切れる音だけが聞こえた。

「い……！」

手に持った缶を強く握る。

［い……ですって。フフフ、言葉も出ないようね。敵は戦意喪失！一気に畳み掛けちゃえ～！］

ゴーゴー、イーハー！なんていいながら、万歳をするように残りの拳も振り上げ霊子は叫んだ。

が、それを打ち消して恵助の大声がガラスを揺らす。

「いい加減にしろぉー！」

全力で手に持った缶を一直線に霊子に向けて投げつけた。

空気を切り裂いて霊子に缶が飛んでいく。

［フン、悪あがきね。そんな缶なんて当たるわけがな…っきゃあ！］

カィ～ンなんて間抜けな音を立てて、何もない空間で缶が撥ねた。

———どういうこと、霊体の私に私が望まないのに物質である缶があたるなんて。おでこ痛いし。それに、今、いい加減にしろって、まるで私の差し金だってわかっていたようなセリフ言っていたし、ビリビリっておでこ痛いし。明らかに私を狙ったように缶を投げていた。なによりおでこ痛いし。少し、涙出てきたし。まさか…この男は。

霊子はそんなことをゆっくりと倒れこみながら考えていた。
総大将を倒されたゴキたちは元の穴へといっせいに戻っていってしまう。

息も荒く、強く拳を握り締めていた恵助だったが、頭に上った血がブラックマトリックスが引いていくのと同時に引いてくると、とんでもないことをしてしまったと後悔した。
今まで散々見えていないフリをしていたのに、思わず強烈なツッコミまで入れてしまったのだ。これはさすがに気付かれてしまっただろう。

「あー、さ、殺虫剤の缶を投げると、ゴキブリって逃げてくれるんだナァ。」

カタコトで言い訳をつぶやいて、転がった缶を拾い上げる。
と。

服を引っ張られる感覚。ちらりと視界の隅で見てみる。
霊子が服をつまんで引っ張りながら、こっちを凝視している。
[あなた、もしかして私のこと見えているんじゃない？]

バレた！

恵助は表情の一瞬の変化がばれないように窓に近づいて脇の霊子と距離をとった。

「……にしても、ご、ゴキブリがあんなに出るなんてナァ。世界一ゴキブリが集まる部屋って申請したらギネスに乗るんじゃないかナァ。畳に直接布団敷くと寝ている間が怖いナァ。」

引っ張られていることに気づかないフリをして、缶に穴を開けて危険物用のゴミ袋に投げ込んだ。

［ねえってば！ホントは聞こえているんじゃないの～？］

「あーあ、部屋がこの広さなら飯おごるから掃除も手伝ってくれってノブに頼んどけばよかったナァ。」

［もしかしてほんとに見えてないの？にしてはいやに独り言が多いみたいだけど……いいわ。聞こえているのかいないのかはっきりとさせてあげようじゃない！］

――――おいおい、いったい何をする気だこいつはぁ～！

恵助がまた視界の端で振り向いたとき。

霊子は腕を振り上げた。

［いでよぉー！ブラァックマトリィィ…］

恵助は反射的に、利き腕の中指を親指で勢いよく弾けるように止めて、人差し指と薬指を霊子の額に当てた。
後悔の多分に混ざったいびつな笑みを浮かべて。

「そこまで。缶があたったところに超絶デコピン食らいたくなかったら呼ばないでね。」

無表情で霊子さんは何度か頷いた。

――――やってしまった。思わず反応してしまった。今、ゴキブリはいないし、当然他の人間はここにいないし、びっしり指が触れているし、もうごまかせない。いくらなんでもこんなバレかたはしたくなかった。もし今敵意の塊を食らったらとり殺されてしまうかもしれないのに。

恵助は平然としているように見せつつ、内心ひやひやしながら霊子さんの反応を待った。

霊子は無表情でじっとこっちを見つめてくる。

［あなた…］

「ん？」

［あなたは…］

「うん。」

［あなたはまさか…］

「だぁー！だから俺はなんだよ？」

硬く冷たい表情は急に崩れ、どこか少しだけ、泣いているようにも見える弛緩した笑顔になった。

［あなた、ほんとに私のこと見えているのね。声も聞こえているのねぇ～！］

がばっと、急に抱きつこうとしてきたが、霊子は恵助の胴をすり抜けて、向こう側に倒れこんだ。

なんともお約束な、人間臭い動きに思わず恵助は苦笑してしまった。

どうやら問題はないようだ。

恵助は鈍化のスイッチをオフにする。

直ぐ隣に建っているアパートとの隙間から差し込む、翳ったおとなしい光の中、起き上がった女の霊、いや、改めて見ると同年代の女の子である霊子は少し癖が強そうな栗色で肩にかかるほどの髪をかき上げ、今倒れこんだ事実を無きものにしようと鼻歌など歌っている。

背は恵助よりも十センチ強ほど低く、すらりとした四肢は霊体だからなのか、それとも身に纏う真っ白な長いワンピースのせいなのか、やけに白く、儚く、今にも折れてしまいそうに見える。

しかしそのしぐさにはその見た目から感じさせるような儚さは微塵も感じ取れず、酷くおかしな話だけれど元気溌溂としている。

その矛盾した光景は、この部屋には本当は幽霊さえもいなくて、忘れていた夢の登場人物が勝手に網膜に焼き付いていて、今動き出してしまっているのではないかと思ってしまうほど、どこか神秘的で現実離れして、でも懐かしさを覚えさせる。

鼻歌を歌いながら照れ隠しに微笑むさまはどこか品があって、このまま直視していたら顔が赤くなってしまいそうなので恵助はわざとらしくない程度に顔を背けていた。

「そういう家系らしくてね。だから気付いていたけどまったく気付かないフリをしていたんだ。まあ、親しみやすそうな人でよかった。ところで何でそこまでして霊感がある人間を…？」

霊子はほんの一瞬だけ酷く驚いたような、不思議なものを見たような表情になった。

「どうかした？」

「別に。私はね、地縛霊ならぬ、事縛霊なの。つまり私は場所、人への怨念ではなく、死んだきっかけを認識していないためにこの世界にとどまってしまったの。死んでしまったことを理解していないけれど、結果的に死を理解だけは出来ている状態ってこと。それで、いろいろなところに飛び回って記憶のかけらを探していたら、偶然

立ち寄ったココでちょっと霊感強いインチキ霊媒師に変な結界張られちゃったもんだから自分じゃ出られなくなっちゃったのよ。だから、しっかりと霊を認識できる力を持つ人の力を借りられればここから出ることが出来るんじゃないかって思ったってわけ。」

———なるほど、だから霊症に敵意がなかったのか。本当に自分の存在をアピールしていたというだけなんだから。

恵助は窓から家の周りを見渡した。
そう言われれば、この嫌な気配は霊だけによるものではなくて、結界のせいでもあるらしい。

「でね、霊感が強い人にあったら私の『原因』を探すのに協力してもらおうかなぁなんておもったわけ。私が気持ちよく成仏するためにね。どう？わかった？」

胸を張って霊子はふわりと浮かび上がった。

敵意はない。

ただ、純粋に成仏するために、協力者が来るまでこんな結界の中に閉じ込められていたのだ。

「なあ、もし、見えるけど協力も出来ないし、俺が結界をどうこうできる力も持っていなかったら？」

「そしたら、追い出すわよ。もう一度ブラックマトリクスを使って

ね…」

彼女は、不安、というよりも寂しそうな笑みを浮べて、髪をいじっている。

「なんて嘘。それなら、話し相手にでもなってくれればいいよ。今までのことを考えたらそれだけでも十分だし。それまでいやならほんとに追い出そうかなぁ」

ふむ、そうしよう。なんて、彼女は一人で頷いている。

もし、ここで俺が協力しないとなったら、次に霊感を持つ人間に出会うのはいったいいつになるというのだろうか。

ただでさえ幽霊が出るといわれ、月二万円でも借り手がつかないっていうのに…。

そんなことを考えたら、とても、断るなんて、出来るわけがないじゃないか。

「え～と、そういうことなら協力しても……いい…かな。」

「そうよね……幽霊なんて面倒なものに協力なんてするわけ……え？今あなた……なんていった…の？」

今までかなり挫折してきたのか、今回も本当にあきらめかけていた

のだろう。
信じられないといった目で俺を凝視する彼女の肩は、少しだけ、震えていた。

「協力するよ。たいしたことは出来ないだろうけど。」
恵助がそういうなり、霊子はまた嬉しそうに飛びついてきて、恵助をすり抜けて転んだ。
———実はかなりおっちょこちょいなのかな。

恵助は霊感を鋭敏化させるスイッチを入れ、すっと手を差し出した。
「俺は高柳恵助。これからよろしく、え〜と…」

[私はレイコ。苗字は思い出せないからレイコって呼んで。よろしくね、恵助]
レイコは勢い良く手を握り返してきた。その手の感触は確かにあったけれど、引き起こすときは当然、酷く軽かった。
「よろしく、霊子さん」
恵助は一瞬浮かんだ不安さをかき消そうと笑ってつぶやいた。
[違うわよ。今、幽霊の霊に子供の子で霊子って呼んだでしょ。私

が幽霊だから！カタカナでレイコだから、そこのところ間違わないでよね」

まったく発音は一緒だって言うのに、何でそっちを意識しているとわかったんだろうと、子供のように怒っている彼女がおかしくて、思わず噴き出してしまった。

「ゴメンゴメン、じゃあ改めて、よろしくレイコさん」

「ちがーう！レイコさんじゃなくて、レイコ。大体私たち同い年くらいじゃないの。」

「そんな感じだけど、レイコさ…あ、レイコはなんだか雰囲気が同年代っぽくない。」

「ム、それでいいのよ。そりゃ二年くらいここに幽閉されていれば多少精神的に成熟するってもんでしょうが。やっと契約完了。形としては二十四時間常に恵助について回る形になるからよろしくね。」

「え？それってつまり…」

「守護は出来ないけれど守護霊に近いのかしら？」

「じゃなくて、学校は？トイレは？風呂は？そして何よりその他もろもろの俺のプライバシーは？」

「無い！！さ～て、自己紹介がすんだことだし掃除の手伝いをしてあげる。力強い助っ人もいるしね。」

異様なほど男らしいレイコの断定の言い回しに、一瞬思考が止まってしまう。

「おい、無いってそんなに力いっぱい……え？助っ人？」

きょとんとする恵助をわきに、レイコは拳を振り上げた。

「あっ、それってまさか……」

ほぼ確信に近い予感に髪の毛が全部二ミリずつ浮かぶような感覚。

そういわれればそうだ。

『普通の女の子』が、ブラックマトリクスを使役するわけがないものな。

なんて、恵助の疑問は頭の片隅ですとんと綺麗に腑に落ちた。

［出でよブラックマトリィィィックス］

「や、やめてくれ～」

黒い塊がゾロリと出てくるのと時を同じくして恵助の絶叫が部屋中にこだました。

後日、荷物もすべて運び込まれた後、隣近所のおば様方に。

「大丈夫だったの？初日の絶叫はすさまじかったわねぇ。いざとなったらこっちに駆け込んできてもかまわないからね。」

「怖いわねぇ。そういえば私はその日女の恐ろしい叫び声を聞いたわよ」

「少し顔色が良くないみたいだけどがんばってね。恵助君」

［がんばってね、けーすけクン］

おばさんに肩を叩かれた時、すぐ後ろでくつくつとそんなことを言って笑っていたレイコに協力することになったことを後悔した。

が、そんな後悔は手遅れで、レイコを交えた普通じゃない新生活は始まろうとしているのだった。

『入学式、そして。』

だいぶ暖かくなってきた風が、学校を取り囲んでいる桜の花の香り運んでくる。

着慣れた学ランもこの日ばかりはなんだか堅苦しい気がしてならない。

ついに高校の入学式が始まろうとしていた。

恵助は小、中学校と受験をしていないのでどうも試験を受けて入学した高校というところは格式高いのだろうか、なんて考えが浮かん

でくる。

［そーんなことあるわけないじゃない。所詮普通科の学校は中学校の延長みたいなものよ。］

「あのさ、レイコ。思考を読むのはやめてくれって。それと式の最中に話しかけてきても全部聞き流すから怒って何かいたずらをするのだけはやめてくれよ」

恵助は振り向きもせず横にふわふわ浮かんでいるレイコに返事を返した。

レイコはそんなことわかってるわよ。やめてくれやめてくれって、そればっかりなんだから。
なんて、小さく顔を背ける。

少し悪い気もしたけれど入学式から問題が起きたらたまらない。ここばかりは心を鬼にしてレイコに冷たく当たらなきゃかな。なんて考えていたとき、後ろから肩を思いっきりひっぱたかれた。

「なにしみったれてんだよ恵助。そんな顔してると高校でもまた彼女ができねぇぞ～」

「うるっさい。お前みたいな変態に朝から絡まれているこっちの身にもなってみろ。いくら華々しい入学式だからって少しだけ落ち込んでみたりしちゃうだろ」

「そんなご無体な。プルートを分かち合った中ではないか。って、あれ全部見たのか～」

「あれか、いろいろあって半分しか見れてない。もう少しだけ貸しといてくれるか」

「借りていることさえ忘れてくれなければいつになったってかまわんとも」

バシッとまた青年は恵助の肩をひっぱたいた。

［ねぇ、この子誰？プルートって何のこと？］

落ち込んだ様子だったレイコはノブの様子を見ると態度をコロッと変えて急に話しかけてきた。
目をキラッキラさせて興味津々である。

先ほどから話しかけてきているのは幼馴染で昔からの親友の坂本信行。

見た目は丸坊主頭に無骨で、そのくせ精悍な顔立ちで、鼻筋が通っている上やや頬が引き締まって、こけているように見えるという、見るからに体育会系バリバリの男である。また、それなりに女子にも人気がある。

――こいつは坂本信行。昔からの腐れ縁なんだ。趣味は体を鍛えることと、話の区切りに人にきつい一発を食らわせること。もちろん男に限り。プルートって言うのは借りているものが入っているかばんのブランドだよ。

恵助はさらりと嘘の混じった返答を返した。

「ホントにぃ？なんか嘘っぽいんだけど。だいたいかばんのブランドの話をして半分しか見ていないって返事おかしいじゃない」

———うっさい！ホントだし、プライバシーだ。

「なんか顔色が悪いぜ？まだ寒いんだから普段はマフラーとか防寒着を身に着けたお前を傍観したい。」

「余計サムイから。そして何より、鳥肌立つくらい今の言葉気持ち悪い。」

「む、それでよし。それほど体調が悪いわけでもないみたいだな。じゃあとっとといこうぜ。見たところ同じクラスになったようだしな。」

そういいながら振り分けられたクラス表を指差すノブはどこか埠頭に立ってポーズをとっている人に似ていた。

「腐れ縁だね。残念だ」

「ああ腐れ縁だな。うんざりだぜ」

ノブと悪意を含まない罵り合いをするのは昔から続いていることだ。

恵助は特に気にすることなく、ノブが指差すクラス表の横の学校の見取り図を覗き込んだ。

小日向高校は一年から三年までで千人ほどの高校で、南側から順に、校庭、体育館および図書館、食堂、特別教室などがある三階建ての特別棟、教室や職員室がある四階建ての一般棟がある。

それぞれが渡り廊下でつながっていて屋上に出るためには鍵が閉まった一般棟四階の扉から出るしかない。

校門は校庭の西側に小さいものが、生徒用、教師用の玄関の真正面に電動の大掛かりなものがあり、校舎の外観は限りなく白に近いクリーム色。

一般棟の東側西側に入り口と階段が、校舎の両端の外側にはそれぞれ屋上までつながった鉄製の非常階段があり、東側に駐車場つきで職員室の正面、教師専用の玄関、西側に生徒用の玄関がそれぞれの階にあり、一階から順に一年二年三年の教室がある。

四階には第一、第二多目的室、視聴覚室、生徒会室、倉庫、開かずの間と書かれていた。

開かずの間ってなんでこんな部屋が用意されているんだろうと思ったけれど校長のジョークか何かだろうと無理に納得しておいた。

そのまま体育館へと移動して、退屈な校長の話を聞いて、いつの間

に役割を決めたのか新入生の中から一人、なにやら話しをして、同じく二年の生徒会長が返事をする番になった。

会長は舞台の両脇に設置された舞台への階段を上り、舞台中央に飾られた国旗と校旗に礼をし、舞台袖近くに座っている来賓と校長にもそれぞれ礼をする。

礼をするたびに長い髪が揺れていた。

舞台の中心に立ち、毅然とした態度でまっすぐに会長が顔を上げたとき、一瞬体育館の新入生にどよめきが生まれた。

体育館のステージに上がった生徒会長は、ほんとうに、きれいだった。

その出で立ち、すらりとした体には天性のものであろう気品が満ちていた。

上等なシルクのような腰の辺りまで伸びている黒髪は今や消え去りつつある日本人の古くから存在している『黒髪の美』というものを理解するための手本のようで、言葉は春のさわやかな風のようにしみこんできたし、その声は泣き止まない赤子を一瞬で落ち着かせる慈愛に満ちた母親のそれのように澄んでいて、静かだった。

そもそも一年のスリッパと女子のスカーフは赤、二年が緑、三年は淡いブルーだが、現時点で緑のスカーフの二年生が『生徒会長』として挨拶していること自体とんでもないことである。

［けーすけクンには関係のなさそうな世界のひと。まさに高嶺の花ね。］

不思議な微笑を浮かべてレイコはひらりと正面に立った。

――なんだよ。そんなことわかってるから。でもあれだけきれいだと男なら誰だってあこがれたりするもんだろ？ほら、見えないからちょっと横にずれてくれ。

［な、なによそれー！目の前の美女を前にそりゃないんじゃないの？］

――はいはい、絶世の美人が正面で、超高速でぐるぐる回っていると恐れ多くて大変で、目がつぶれてしまいそうなので少しどいていただきたく。ははぁ。

なんていったら、レイコはなぜそんなに不機嫌になるのか怒りオーラを丸出しにしだした。

［完璧な人間なんていないんだからどうせ裏じゃ何やっているかわからないわよ。あれで実はオカルトマニアで黒魔術とか詳しかったり、カエルの解剖をしていたり、くっふっふっとか、おーほっほっほっとか高慢に笑ったりする腹黒なんだからー！……たぶん。］

って言ってから顔を背けて、飛んでいってしまった。

心に刻み込まれておそらく一生消えることはないだろう一度きりの入学式を済ませた。

角刈りの見るからに体育会系の逆三角形の体型をした教師が担任になったらしく、順番に誘導に従って教室に向かう。

教室で聞いた話では今週いっぱいまで部活動見学をして、その後仮入部を三日間。

その後本入部という流れで、それが当面のイベントということになるらしい。

担任は今井久雄というらしい。

担当は予想を裏切って数学。恐ろしいことに生徒指導担当らしい。

この教師、ユーモアはあるようだが癖なのか口の片側を吊り上げるように笑うのでもともとの強面も手伝って皮肉笑いにしか見えない。

「久雄ちゃんと呼んでくれてもかまわない」

と言ってのけているが、見たところ腕を組むのも癖らしく、手に持っている眼鏡ケースに先ほどサングラスが入っていたことを確認したので、町でサングラスをかけて腕を組んでいるさまを見かけたら間違いなく『本物』に見えるという、心細さ最大級の一年生の担任にしては酷く遠慮したいというのが担任に抱いた第一印象だ。

おそらくこのショックは今年一年間忘れることはないと思われる。

少なくとも自分は久雄ちゃんなどと絶対に呼ぶことは出来ないだろう。

そして何よりも恐ろしいのはレイコがさっきから

［何よこの教師。こわっ！本物が紛れ込んだんじゃないの？ヒサオちゃーんヒサオちゃーん…むしろ久雄の叔父貴って感じねぇ。］

なんて、俺と同じ感想を抱いてさっきから今井センセイにチョップしたり鼻にデコピンしたりとちょっかいを出し続けている。

今井センセイがさっきからしきりにくしゃみをしているのは間違いなくレイコのせいだ。

見たところ霊感は人並み以下であるのがせめてもの救いだけどレイコには一発文句を言っとかなきゃ磨り減った俺の精神は報われないし、目の前の光景に笑いを必死になってこらえている自分が変人だとクラスメイトに認識されたら大変じゃないか！

そんなこんなでハラハラとしたまま初日のホームルームは終わった。

後は穏便にレイコと話をつけてせめて学校にいるときくらいは心に安静を与えてもらえるようにすることと、さっき盛大にノブが立ち上げた親睦を深めるカラオケ大会に参加することと、レイコに付き合って町を少し散策して終わり。

なんて今日の簡単な予定を頭の中で立ち上げたとき、廊下で変なざわめきが起こった。

廊下側の生徒はいっせいに廊下へと飛び出していく。

恵助が何事か確認しようとして一歩人込みに踏み出したとき、教室の入り口にすし詰めになっていた人だかりが一歩引いて割れた。

モーゼの海割りのごとく分れた人ごみの真ん中にたっていたのはついさっき入学式で挨拶をしていた生徒会長だった。

すべるように自然にこっちに歩いてきて。

「はじめまして。私は松下二十重といいます。ちょっとこの後いいですか？」

と、俗に言う天使の微笑を浮かべて一言。

一瞬『音』なんてもともと無かったかのように、世界が沈黙に支配された。

「……え？」

静寂を打ち消して間抜けな声が出てしまう。

名前は知っている。

パンフレットにも載っていたし、入学式の挨拶のときにその容姿もしっかりと目に焼きついている。

でも、レイコがいっていたとおり高嶺の花、住む世界が違う人という認識だったんだ。

いきなり、しかも会長のほうから自分のところに来るはずがないじゃないか。

頭の中で冷静になれ、冷静になれ。

おそらく俺に言ったんじゃないんだろうと言い聞かせ、深呼吸をして周囲を見渡してみた。

恵助の周りにはほかに話しかけることが出来そうなのは恵助以上に唖然としているレイコのみ。

空モーションじゃないのか？

もう一度正面から生徒会長を見てみるとその視線はまっすぐ飛んできていて正面から見た俺の視線とぶつかってしまった。

「俺、のこと、ですか？」

恐る恐る聞いてみた。
とたん横でトビかけていたレイコが正気に戻ったらしく声を張り上げる。

［そんなわけな……］

ないでしょ。

レイコがたったそれだけのことを言い切る前に、目の前の生徒会長さんは小さく頷いた。

恵助と生徒会長とレイコを中心に、水面に波が起こるようにざわざわと人波がゆれる。
半分はこれからどうなるのか興味津々な。残りの半分は圧倒的な殺意の念がこもっている。

「ここで話すのもなんですから人がいないところへ……どうしました？体調が悪いようでしたら明日また来ますが…」

二十重は改めてトんでしまっている恵助の顔を覗き込んだ。

「いえ、あの、別に体調が悪いとかそんなんじゃ…」

手を振りながら少し顔をそらす。

頭に血が上るのが自分でわかる。
周りにも確実に動揺しているのがばれてしまっているだろう。

「ああ、もしかして新しいクラスメイトと親睦を深めるためにこの後予定が入っていました？」

親睦も何も、もう修復不可能なんじゃないかって言うくらいの殺意が周りからずっとビシビシ伝わってきている。

無論、廊下からもだ。

とんでもない状況だと困るのと同時に、少し嬉しかったりするのは男のサガだろうか。

「それは…」

不意にバチンと肩をひっぱたかれた。

何事かと勢いよく振り向くと、すぐ後ろにノブがいつもの様子で立っていた。

「どうも、会長さん。俺は恵助の幼馴染の坂本信行っす。こいつには何の予定も無いっすから、どんどん連れて行っちゃってください」

「おいノブ何を勝手な…」

「入学早々こんな絶好のチャンスが来たんだ。乗らない手はないだろ？」

「いや、そりゃそうだけど…」

「ならいくしかねぇだろ。」

「あの、どうかしました？やっぱり今日はお暇したほうがよろしいでしょうか。」

二人でごにょごにょと話をしていたらまた松下さんは不安そうにこっちを覗き込んできた。

「いえ、こいつ会長みたいな美人に話しかけられて少し緊張しているだけです。何なら無理やりにでも引っ張って行っちゃってください」

「あら～、お上手ですね」

なんて、嬉しがっている会長さんをよそにノブは無責任なことを言って、小声で

「恵助後でいろいろ聞かせてくれよ。グッドラック！」

なんて親指を立てている。

「では。皆様お騒がせしました。失礼します。」

最初に浮かべた天使の微笑をまた浮かべ、松下さんは恵助の手を引き一階から一気に四階へと上っていった。

「最後の警告だよ恵助、なんかいやな予感がするよ。やめておきなって」

引っ張られているとき、レイコがそんなことを耳打ちしてきたが、その、二十重さんの手は柔らかくて、少し冷たくて、頭の中はとっくに真っ白でとても引き離すことが出来ない。

そんな恵助を見てレイコは、もう知らないから！なんていって黙ってついてきた。

「あ～、ゴホン。その何だ。順番が逆になってしまったが、今日はこれで解散だ。今日から部活の見学が出来るからそれぞれ途中でやめることのないようしっかり決めるように。」

今井教諭が閉めの言葉を言っていたが教室の中ではいったいあれは何なのかの議論が飛び交っていてそれどころではなくなっていた。

仕舞いには女子の間で恵助の男としての採点がはじまり、男子の間では高校時代に最も殺傷力の高い部活をしていたのは誰だの、二十重様にアタックしてみる順番をあみだくじで引いてみて喧嘩が起こるだの、それらにはかかわらないけれど松下二十重タンファンクラブなどというものが持ち上がっていたりするなど騒然としていた。

このクラスには、入学初日にしてすでに三年間過ごしてきたかのような奇妙な一致団結、一枚岩関係が出来上がりつつあったのであった。

／

「で、松下さん、ここはいったい何なのでしょうか。」

「二十重でいいですよ。高柳恵助君。私も恵助君と呼ばせていただきます」

二十重さんはチャラッと髑髏やら十字架のキーホルダーが下がった鍵で扉を開こうとしていた。それは酷く二十重さんに似合っていない。

今いるのは一般棟四階。

一階から一気に階段を上がって四階の西端から東端まで一気に歩いてきたこの教室。

教室名を書いてあるプレートは向こうから第一多目的室、第二多目的室、視聴覚室、生徒会室、倉庫、そしてここのプレートは、すれて読み取ることが出来ない。

たしか、朝見た張り紙に書いてあって、今四階を歩いてきて見つけなかった部屋は『開かずの間』だけ。

「確か地図のとおりなら開かずの間でしょ。ココ、嫌な気配がするし、霊の予感はほんとに当たるからけーすけ少しヤバイかもね～。」

目を細め残酷な微笑を浮かべてレイコは真上から顔を覗き込んできた。

「開かずの間です。とは言ってもこのとおり鍵があれば普通に開くんですけれどね。」

くすっと笑う二十重さんは綺麗だったが、目の前に置かれた状況はそれを楽しむ余裕を完全に奪い去っている。

――やっぱり、開かずの間だったか。

小さく深呼吸をしてみるけれど、じゃじゃ馬になった心臓はそんな静止を受け付けてくれない。

どうやら人よりも危機察知能力が高いらしい第六感もピコンピコンと警鐘を鳴らしている。

――なんだか、今さっきからレイコに初めて会ったときみたいな寒気がする。

［私が言うのもなんだけど、それよりもたちが悪いわよ。きっと］

――そうかもね。

もう一度恵助が深呼吸をしたとき、ギィィィ、キュラキュラ、ガタンガタンと扉が断末魔の叫び声をあげた。

扉が口を開いた先には最も日が差し込むはずの四階にもかかわらず今にも這い出さんと差し込む光に抵抗する暗闇があり、見るからに胡散臭い代物たちが所狭しと壁際に積み上げられていて、ただでさえもとの幅が一メートル半ほどしかないというのに人一人が体を傾けてやっと通れるほどの狭さだ。

「じゃあ、奥のほうへどうぞ。足元に気をつけてぴったりついてきてくださいね。」

なんていって、二十重さんは慣れた様子で暗闇の中に消え去った。言葉のあやじゃなく、暗闇の中に『消え去った』ように見えた。

恵助はアパートに踏み込んだ時と同じく、念のため頭の中の鈍化のスイッチを押して、教室内へと踏み出した。

／

暗く、積まれたもので曲がりくねった迷路のようになっている教室の入り口を抜けるとぼんやりとオレンジ色の光が照らす広い場所へと出た。

「改めて、ようこそいらっしゃいました。恵助君。」

はじめてみたときとまったく変わらない笑顔を浮かべている二十重さんをまっすぐ見ることが出来なくて教室内を見渡してみる。

部屋の窓はすべて重々しい暗幕で閉じられていて、この真っ暗な部屋を照らしているのは電灯でも太陽光でもなく数本のろうそくの光のみだ。

教室の広さ自体は大量のものたちによって占められている部分が多く、十畳ほどのスペースが残るのみで、入り口からどう進んできたのかいまいちわからないが、おそらくそれが東側に位置している。

迷路を抜けて、すぐ正面の西側の真ん中にある机に座っている二十重さんとは向かい合う形になっていた。

「あの、この部屋はいったい…」

「なんなのでしょうかじゃなくて、まず最後まで二十重の話を聞くべきだ」

急に後ろから声が聞こえて驚いて振り向くとそこには下にだけ銀色のフレームがついたメガネをかけて、最近珍しい海老の尻尾のように太く長い三つ編みの知的美人といった百五十センチに少し足らないほどの小さな女子がいた。

スリッパと制服についているスカーフの色が緑であるから二年生であることはわかった。

手には小型のノートパソコンを抱えていて、おそらく抱いた印象は間違いないだろう。

「視線が私の頭から足まで移動した後、スリッパ、スカーフ、ノートパソコンへと移動してまた頭に戻った。それは何だ？なんにしてもじろじろと人を見るのはとても失礼だ。」
切り捨てるように断定的に。何の抑揚もなくこの先輩はそんなことを言った。

「あ、すいません。」

くいっとメガネをあげて、何もなかったかのように先輩は二十重さんの横へと移動した。

「もう。初音ったら初めての人にそんなことを言うから怖がられるのよ。」

「二十重、この同好会は好きません。私は非科学的な幽霊などというものは信じていませんし、なにによりここはあなたの負担にしかなっていない。」

「そんなことないよ。それに、そのための恵助君なんだから。」

「恵助、この初音って奴気に食わないわ。しかもなんだか話がきな臭くなってきたし。」

レイコがふわりと初音さんの後ろに回りこむと初音は怪訝な顔をして振り向いた。

どうやらそれなりに霊感が強いらしい。気をそらさないとこの暗さで同調してレイコに気づいてしまうかもしれない。

「あ、あのすいません。話の続きをお願いします。」

恵助が恐る恐る切り出すと初音は恵助を冷たく一瞥して二十重の横へと移動した。

「ここは私が説明するから初音は黙っていてね。恵助君。君をここへ呼んだのは他でもない、このオカルト研究同好会に入ってもらおうと思ってのことなんです。」

「オカルト研究同好会…ですか。」

「そう。私大のオカルト好きで特別にこの開かずの間を借りて活動をさせてもらっているんですけれど、どうも私には霊感がまったくないみたいなんです。ですから例のアパート二階に今年の一年生が入居したって聞いてぜひともうちの同好会に入っていただきたいと思ったんです。聞いた話だと引越しの準備の段階で恐ろしい女の叫び声がしたり、恵助君の悲鳴が聞こえたりしたって近所の人から聞ききました。だからアパートで起きた怪奇現象の話を聞かせていただきたくて。それに大概の人が二週間ほどで引っ越すアパートに普通に暮らせている恵助君はいったいどう暮らしているのか興味が沸いてしまったんです。」

ガツンと頭にたらいが落ちてきたような気がした。

しかもこの言葉を聞いてレイコはやっぱりそんなことだろうと思ったわ〜なんていって大爆笑しているし。

――うるさいよレイコ。そりゃわかってたけれど期待しちゃったり

したのは事実なわけで。男のサガっていうかなんていうか。

［まあ、高嶺の花が舞い降りてきたんだからねぇ。で、どうするわけ？］

――霊感があることを人に教えると、その人が影響されて霊に『引っ張られやすくなる』って姉貴に教わったし、いつレイコのことがばれて面倒なことになるかわかったもんじゃない。この話はなかったことにしよう

［そうそう。私に協力する時間もなくなっちゃうしね。］

――――まあ、厄介なのはレイコだけで十分だよ

［なによそれ。にしても、『霊の予感は良くあたる』とは我ながらよく言ったものね。本当にオカルトマニアだったとは…］

――――まったくだよ

どこか不愉快そうだったレイコはまたいつもの様子に戻って天井をくるくると飛び回り始めた。

ふと、たまにレイコは子犬のようだな、なんて思った。

「すいません二十重さん。なんだか俺にも霊感がないみたいでそれらしきものを見たことがないんです。近所の人が言っていた悲鳴って言うのは掃除中に…その、恥ずかしいんですけれどゴキブリがた

くさんでたのでびっくりしてしまったんですよ。だから特に役に立てそうにありません」

嘘をつくのは気に入らないけれど仕方がない。
恵助は少しだけ後ろめたくて顔を伏せた。

「そうですか。それなら仕方がないですね。」

二十重が残念そうに肩を落としたとき、静かになっていた初音が殺意とともに急に口を開いた。

「二十重、あれはおそらく嘘。高柳は今の言葉を言ったとき、目をそらして、片手で口元を隠すように触り、その後その手をポケットに入れて微妙に後ずさりをした。これらはいずれも嘘をついた人間が無意識に行う行為で、ここまで顕著に出るのは逆に信じられないくらい愚直なのか、本当に心底曲者なのか。でも、もう一度、今の言葉をそっくりそのまま『普通に』繰り返せるならば嘘ではないはず。そして、嘘なら私が見逃すはずがない。」

メガネの奥の釣り目が光っている。
二十重に嘘をつくような愚か者は今にも視線で射殺さん、というアイコンタクトが一緒に飛んでくる。

［恵助は嘘をつくのが下手で、愚直だって言うのは私も大賛成だけど］

――待て待て待てぇ！何でお前にまでそんなこと言われにゃならんのだ！確かに嘘をつくのは苦手だから俺が愚直だとか言うのは、まあ、何とか飲み下すとしても、これじゃ断れないじゃないか！

［そうね、お手上げかも。今度はこんな辛気臭いところなんかに入る気がないってしっかりといってみるとか］

――辛気臭いは余計だけど、それだとなんだか申し訳ないだろ。

「あらあら、残念。ごめんなさい恵助君。確かに急すぎたし、オカルト研究同好会なんてあまり入りたいと思わないものね。部活動見学は先が長いことだし、おいおい興味がわいたり、霊感に目覚めたようならこの同好会に入ってもらえるかしら。基本的に活動は自由って言うのがうちの売りでもあるからばいととかもできますしね。」

［むぅ？］

二十重さんの言葉に急にレイコは腕を組んで顔をしかめ始めた。

「え、あ、はい。失礼しました」

「また来てくださいね。それと、この同好会のことは口外厳禁でお願いします」

軽く首をかしげて二十重さんは手をふった。

恵助は一度礼をして再び迷路のようなモノの山の間を縫って開かずの間を出た。

薄暗いところから急に出たため窓から差し込んでくる日光が眼球に突き刺さる。

それと同時に、はぁぁぁ、と無意識に長いため息が出た。

どっと疲れた気がする。
たかだか二十分かそこらでこれほど疲れるのは初めての経験かもしれない。

［意外ね。こんなにあっさりと引くなんて。周囲の目も省みずにわざわざ恵助を呼び出したって言うのに。］

恵助が空っぽになった肺に大きく息を吸い込んだとき、さっきから考え込んでいたレイコが口を開いた。

――レイコ、と、言うのはつまり…どういうこと？

［つまり、何か裏があるってことよ。気をつけたほうがいいかもね。］

――ってことは、つまり…ごめんどういうこと？

［バカッたぶん恵助が他の部活に入ることなくここに戻ってくる算段がもうあるのか、これからここに戻ってくるような心代わりを仕込む気満々ってことよ］

――な～んだ。良かったそれなら大丈夫じゃないかな。二十重さんはそういうことをしそうな感じじゃないしさ。

レイコは間の抜けた恵助の言葉を聞いて、髪をかき上げながら残忍な笑みを浮かべ。

そして、階段をテンポ良く駆け下りていく恵助の背中に、小さくつぶやいた。

［ふふん、女は怖いのよ。そんな間抜けな顔をしていたらどうにもならなくなっちゃうんだから。］

――何してんだよ、おいていくぞ～早く教室に戻らなきゃだからな！

恵助は階段の踊り場からきょとんとした顔を覗かせる。

レイコはまったく気づいていない恵助に小さくため息をついて。

［わかった。とにかく気をつけなさいってこと。それと、私はまっすぐ行くから結局恵助のほうが遅いのよ］

ちっちっちっ、甘いな恵助君。

なんていってレイコは垂直に床をすり抜け、一直線に教室に向かっていった。

「二十重、あのまま帰してよかったか？霊感云々は信じられないけれど、彼は何か知っていた風だった。」

初音はメガネをはずし細かく拭きながら目を細めて二十重を見た。

右横、やや椅子の後ろに立っているので、振り向かない二十重の顔は見ることが出来ない。

「私、霊感はないんだけど、それとは違うシックスセンス、言うならば直感は人よりも鋭いみたい。」

そういいながら机の引き出しを勢い良く開けると、そこには恐ろしく度の強い瓶底の様なぐりぐりメガネがぎっしりと詰まっていた。

ふらふらと指先をさまよわせた後、黒縁のレンズが頬骨の頂点ほどまで広がったものを選び出す。

「それで、恵助君を見て確信したの。彼には霊感があるわ。もしかしたら知覚した上であのアパートの霊と暮らしているのかもしれない。」

そう言いながら二十重は美しい黒髪を乱暴に、黒いリボンで瞬時にまとめた。

「そう。二十重が言うならそうなんだろう。」

二十重はその間もふわりと首元に巻いてある緑のスカーフを、不器用に、硬く巻きなおす。

初音は言葉を区切って、小さく微笑んで。

「なんにしても、私は、その二十重のほうが、好きだ。」

そっけないような、それでいて真綿の上からゆっくりと重たくなるような初音の言葉が終わるころ、二十重はぐりぐりメガネをかけた、入学式のときとは似ても似つかない姿になっていた。

「ふふ、ありがと。じゃあ行きましょうか。」

「コースは調べてある。誤差は十パーセント以内のはず。」

アナログの揺らめくろうそくの光の中、ぽっかりとテンゴクへの窓が開いたようにノートパソコンの青白い光が二十重の顔を照らす。

「…うん。十分。さすがは初音ね。」

「すごいのは二十重のもつ情報網のほうだ。」

下がってもいないメガネを上げ直し、初音はかちりとパソコンを閉じた。

「この方法は不本意だけれど。たまにはね。」

二十重は学生かばんから取り出したいまどきの軽量化からすると無骨すぎるトランシーバーのような携帯を取り出し、どこかへゴニョゴニョと電話をかけた。

／

教室の後ろ側のドアを引いたとき、電気がついていない教室の中に一人も欠けずにいたクラスメイトたちはいっせいにこっちに振り向いた。

ヒッと、すぐ後ろにいたレイコが小さく息を呑む。

教室を支配するのは衣擦れの音のみ。

六十八の視線はすべて恵助に向いている。

「恵助、これは早いところかばんを取ってきなさい。ここはまずい。」

———そうみたいだね

目的地は名前の順の並びでほぼ教室の中心の席だ。

一歩踏み込むと、取り囲んでいる視線から、消えていた殺気と興味津々なモノがよみがえっていく。

足が重い。

のどがカラカラになってくる。

死地に向かう人間はこんな気持ちなんだろう。

今日ほど自分の名前を憎らしいと思った日はない。
もし俺の名が輪島洋介だったなら確実に一歩でこの空間から退避できたのに。

しっかりと捕捉されているけれど、いまさら気配を消して。
今日配られたプリントの類を一秒でかばんにねじ込む。

「じゃあ、また明日。」

教室の中心で、気の抜けた油断でしかない恵助の一言が、剣呑とした男たちの殺気に掻き消えたころ。

馬鹿。
とつぶやいて、レイコは頭を抱えた。

そしてそれと同時に、ダムの壁が決壊したように質問の嵐が飛んでくる。

もはやそれは騒音といっていいほどで、たまに聞き取れた質問のほとんどが『二人でどこに行ったのか』『いったい会長とはどういう関係なのか』『いったい会長に何をしてきたのか』一度だけ『弟子入りさせてくれ』ってところだった。

「悪い、今日は忙しいから帰らせてもらうよ」

かなり大きな声でそう叫ぶと、押し寄せる人波を潜り抜け恵助は教室を飛び出し、そのまま一気に靴を履いて校門をくぐりぬけた。

［バカッ！相手はこっちの隙をうかがっていたのに、何であんなところで、あんなタイミングで、あんな間抜けなこと言うのよ。えらいことになるのなんて見え見えなのに！］

家に向かって走る恵助に飛びながら腰に手を当てて怒るレイコの様子は、まさにプンプンという擬音が出そうなほどだ。

「いや、あの沈黙は耐えられなくって。」

［さっきのあなたは草食のくせに自分から肉食獣の射程に入っていって、ひざを折って座り込むみたいに不用意で愚かだったわ。ちょっと気をつけなさいよね。］

「わかったよ。今度から気をつける。けど、話がおかしな方向へ言ってるぞ」

［恵助があまりに間抜けだから怒っているのよ。そんなこともわからないわけ？］

「だからゴメン。もう家に着いたからそんなに怒るなって。かばん置いたら街を散策するんだろ？」

携帯電話を耳に当てて、近所の奥様方の目をごまかしながら恵助はアパート横のさびた階段を見上げた。

［む、まあいいわ。あなたが間抜けなのはココしばらくの生活でわかっているし。じゃちょっと待っていてね。］

レイコはくるくると旋回飛行しながら階段を飛び越え、扉を突き抜け鍵を開けた。

鍵は持っているけれど、いつの間にか、これが日課になっていた。

［おいっす。おかえり～］

頼りない音を立てて玄関の扉を開くと、居間の引き戸を開けて顔だけ出して、中途半端に演技しながらレイコは手をひらひらさせていた。

「うん、ただいま。」

恵助も答えるように手を振ってから、荷物をたたんだ布団の上に放り投げた。

昔から、姉貴は家を空けがちだったし、親父は正月だってめったに顔を見せないしで、家に誰もいないことには慣れていたけれど。一日中憑かれて回っていた後でもやっぱり誰かが家で迎えてくれるというのはなんだかいいもんだな、なんて思う。

［なんだかケースケ考えることが親父臭いやねぇ。］

「勝手に人の思考を読み取るなって！だいたいレイコこそだんだんおばさん臭い口調になっていってるじゃないか」

パキ。

本棚が軋む。

［そりゃあ、私は見た目よりも彷徨っていますし、何よりも勝手にケイスケのココロの表層を覗き見たわけだけれど。］

ピシ。

窓ガラスが揺れる。

しまった。

どうやら触れてはならないところに触れてしまったようだ。

キレイに微笑むレイコの額には血管が浮き出ているような気がする。

そして、その笑顔は今まで見たどの様子より恐ろしい。

［言って良いことと悪いことがないかしら］

後ずさりして、さりげなく玄関に近づく。

カタリ。

棚の上の小物が倒れていく。

「いや、売り言葉に買い言葉って言うか、その。」

靴を引っ掛けるように履いた。

［その、なに？］

後ろ手で玄関のドアノブをつかむ。

「悪かった。」

ペキリ。

転がっていた割り箸にひびが入る。

ゆっくりと、第六感の危険信号の赤ランプに光がともっていく。

チリ、とうなじがざわめいた。

レイコは表情も変えずにウフフフフフフフと、不気味に笑うと。

［許してあげない。］

といって、ざわりと、風景が曲がってみえる何かを飛ばしてきた。

「ばっ、殺す気かあああああああああっ」

玄関をぶち開けて階段を駆け下りるとドゴォ〜なんて轟音と一緒に今いたところを衝撃波が駆け抜けた。

［そんなつもりじゃなかったけど……なんだか意味がわからない衝撃波出ちゃった〜］

アパートを下から見上げると、レイコは玄関をくぐって一直線に飛んできた。

向こうの怒りは収まったらしいが、さっきのあれは下手したら死に至る衝撃波だ。

照れ笑いのようなものを浮べてはいるがあんなのを見せられると本当はこいつ狙ってやっていたんじゃないか、とか不安が頭によぎってしまう。

「今回は俺も悪かったから許すけど次にあんなの放ってきたら強制

的に浄霊してやるからな！」

［出ちゃったんだからしょうがないでしょ。わざとじゃないんだし。何本気で怒ってるのよ。］

レイコは今の必殺衝撃波のことを、すねたような態度でごまかそうとしている。

「言うべき言葉が違うだろ」

命の危険が隣にあるのだ。

ここばかりは譲れないと恵助が詰め寄ると、レイコはあきらめたように肩を落とした。

［ごめんなさい。］

「よし。じゃあこの話は終わり。まず街のほうから散策してみるか。」

［え～、それよりも聖地公園のほうがいいよぉ～］

「何でまたいきなり墓地しかない、公園とは名前だけの場所を選び出すんだよ」

［だって私、幽～霊～ですから～］

ひゅ～どろどろなんて効果音を背中に背負うレイコ。

「買い物がてら町の中に行くから諦めてくれ。」

［な、なんでよぉ～］

「だってさ、一体どれくらい霊がいるかわからないだろ。残滓どころじゃなくなるって。」

携帯でカモフラージュしながらそんな話をして街の中を歩き回ってみたが、残念ながらレイコの記憶の残滓は見つからなかった。

そのくせ、まあこんな日もあらぁね。

なんてわけのわからない男らしさを発揮するレイコは、大物だったのかもしれないな、なんて思った。

／

「二十重、口元だけはしっかりととって。後で解析するから。それと、あの延々かけ続けている携帯電話。一応発信状況だけ調べて。後は先ほどの家での動きとＧＰＳ探知した今日のルートを解析して何か意味があるのかどうか。」

「初音、あなたなんだか生き生きしていない？」

「そんなことはないけれど。そう、二十重が楽しそうなのを見るのは悪くないからか」

冷静な、抑揚のない声で初音は振り向きながら答えた。

「そう？ならそういうことにしておいてあげる。」

すべてを見透かしたような微笑を浮べて二十重はずり下げたメガネの上から初音を見やる。

「二十重！な、なにを……」

電柱の影で初音はノートパソコンを覗き込み、うつむいた。

パソコンの画面には、衛星から送られてくるアップにされた恵助の姿が映っていた。

キケンチタイ

［起きろー！遅刻するぞ～］

耳元でレイコの絶叫が聞こえる。

でも、それくらいじゃ目が覚め切らないというのが俺の長所で短所だから。

なんて、寝ぼけながら思ったら、ざわりという強風が駆け抜けたような感覚と一緒に布団がはじけ飛んだ。

［それは短所でしかないでしょ。］

足元に立っているレイコが人差し指をゆっくりと上に折り曲げると、それにならうように本人の意思と関係なく恵助の体が撥ね起きた。

「あれだ。あー…朝一ぐらいやさしく起こしてもらえないかな」

［うん。恵助が優しくても起きてくれるならね。］

「そういうことは、まず優しく起こしてみてから言ってくれないか」

［たぶん、恵助起きてくれないでしょ。］

「いや、本当に優しいなら起きると思うぞ。」

［そう。じゃあ今度気が向いたらそうしてみるわ。］

「ん。たのむ。」

恵助はもそもそとはじけ飛んだ布団を手繰り寄せると、何事もなかったかのように包まってしまった。

［そうそう。外はいい天気だし、風には生命があふれているし、鳥は歌っているし、何よりももう八時だから起きなきゃね……って！何でまた寝てるのよ～！］

しっかりと握り締めていたのに、また布団ははじけ飛んでしまった。

「長い乗りツッコミだな。それに、ここからなら歩いて十分で着くから後二十分は寝ていても平気だって言うのに。」

［そんな気のゆるみが遅刻を生むの！それに私がここを出るには恵助の力を借りなきゃなんだからね！］

「わかってるって。じゃあ着替えるから隣の部屋に行っててくれ」

［は～い］

今日必要なものはすでに昨夜準備してある。
あとは着替えて、その上に制服を着ていくだけだ。

レイコが退屈しないようにテレビをつけた。

この近くの学校などで飼育されている動物が殺された、なんて凄惨なニュースが流れていた。

ハンガーにかかっている制服の細かい埃をブラシで取っていると、後ろからレイコの声が聞こえた。振り向かずに作業を続ける。

［ところで恵助、どの部活に入るつもりなわけ？］

「そうだな、聞いた話だと正式な帰宅部って言うのはないらしいから、それに近い部活になるよ。散歩部は、基本的に部活の縛りがないらしいから部活動と称していろいろなところを歩いて回ればレイコの手伝いが出来るし、同じような意味では写真部でもいい。ただ、これからある程度バイトもしなきゃ暮らしていけないから美術部は却下だな。」

トランクスだけ残して瞬時にすべてを脱ぎ去る。

［ところで恵助、なんかスポーツとかやってるわけ？どっちかって言うとドン臭そうだけど。］

「ああ、よく言われる。でも一応中学じゃ柔道部だったんだ」

［柔道部？］

「そう。なんだかうちの家系は柔道をやっている人が多くてね。子供のころに仕込まれたんだよ。もっとも、姉貴が異常に強いから勝ったことないし、親父なんて神様みたいに強いから俺は落ちこぼれっぽいし、有名どころのスポーツはどうも苦手なんだけどな。」

［なるほど。だからそんなにいい体してるんだ。恵助って着痩せするんだね。］

「まあ、そうらしいな。よくいわれ……」

勢いよく振り向くとそこには襖から頭だけ貫通してこっちを覗いているレイコがいた。

レイコはきょとんとしていたが、間違いなく今の様子は恐ろしい。

「……コワッ！」

［怖いって何よ。しっつれいねー！］

「そんなカッコされていたら誰だって怖いっつーの！じゃなくてお前いつからそうしてた！」

［いつからって、はじめから。］

はあ、と思わずため息が出た。

「そうだよな。お前ってやつはそういうやつだったな。」

［ええ、ええ、そうですとも。じゃあチャッチャと準備しよ～］

「わかったけど出ていけ～」

手近な枕をレイコに向かって投げつけ、すぐに着替え終わるとかばんをつかんだ。

「行くぞ～」

［あれ、恵助朝ごはんは？］

「俺いつも食べないから気にしなくて良いよ。」

［これから大変なんだから少しだけでも食べとくと良いよ。］

「何が大変なんだ？」

［あ、気づいてないなら別に良いよ。］

「どういうこと？」

［別に～。あ、あと出来れば散歩部が良いよ。写真部だと、もしかしたら私が写っちゃって大変なことになるかもしれないし。］

「わかった。じゃ本命は散歩部ってことで。」

玄関でレイコはぴたりと止まる。

［いってらっしゃーい］

「うん。行ってきます」

玄関を開ける。

恵助が一歩踏み出すのと同時に、レイコも玄関の扉を潜り抜けた。

「さすがにこれはやりすぎじゃないか？」

［別に良いでしょ。気分よ、き・ぶ・ん。］

今日のレイコはなんだかやけに機嫌がいい。

「まあいっか。」

頬に当たる風が温かい。

レイコが言った通り雀が電線にとまって楽しそうに会話をしていて、風には胸の空くようなさわやかな薫りが乗っていた。

「レイコ、早起きは三文の得って、ホントなんだな」

「まあ、ぜんぜん早くはないけどね。」

「二十分の早起きはだいぶ早いだろ？深夜零時十分に起きる人が夜十一時五十分に起きてみろ。まだ日付が変わってもいないだろ。」

「それは比較対象がすでにおかしいでしょ。」

「俺の中ではそれくらいの重さがあるんだよ」

そこまで言ったとき、例によって勢いよく背中をひっぱたかれた。

「よっ、恵助」

「ああ、ノブおはよう。朝っぱらから元気すぎて何よりだ。」

「む、お前も顔色は相変わらず悪いが元気そうだな」

「そんなに悪いか？別に体の調子はいつもどおりなんだけどな」

「今すぐに病院に連れて行ったほうがいいんじゃない勝手くらいにな。まあ、新しい生活を始めたばかりで疲れでもたまってんだろ。ところで恵助おまえ部活はやっぱり柔道部にするのか？」

「散歩部の予定。もしくは写真部とかかな」

「な、わが好敵手がそんな部活とは名ばかりのところに行くなど誰が許しても俺は許さん！」

「しょうがないだろ、五月くらいからバイトしないと生活が大変だからな」

「そうか、それなら仕方がない。」

［なにこれ。ノブってさっぱりしてるわね。別れ際とか彼女がかわいそ～］

――まあ、その印象のとおりさっぱりしているんだったら、どれほど楽かって話なんだけどね

「暇なときには道場に来いよな。もう柔道から一切手を引くなんていうのは許さないぜ。おっし、そうと決まれば明日さっそく道場に練習に行くぞ。今月いっぱいまではバイトがないって言うなら出来るんだろ？」

［あ、ほんとだ。］

何がおかしいのか、レイコは俺とノブを交互に見ながらくつくつと笑っている。

「わかってるよ。それとひとつだけ頼みがあるんだけど。」
「どうせ、クラスでのあの状況を何とかするのを手伝ってくれって言うんだろ？」
「頼む。」
「じゃあ、先に俺に教えておかなきゃならないことがあるだろうに。どうだった？うまくやったのか？」
「ああ、二十重さんの話か。別に。なんだか俺が引っ越したアパートって心霊アパートだったらしくて何か不思議なことは起こらなかったかって聞かれただけだよ。なんとなく、人前で住んでいる部屋が心霊アパートでしたって言うのははばかられるから呼び出されただけみたいだった。」
「ホントか～？二十重さんって呼び方がやけに親しげだぞ」
「妙な勘繰りばかりしていると馬鹿になるぞ」
かぁ～、なんてノブはあきれたように空を仰ぐ。
「だからお前はだめだって言うんだよ。きっかけは何でも良いだろうけどせっかくのお近づきのチャンスにそんなだから…まあ、それがお前のいいところでもあるんだろうけど。」
「それは喜んでいいのか悪いのか。」
［どっちかっていうと喜んじゃダメでしょ。］

笑いながらレイコが口を挟んでくる。

――やっぱり？

少し考え込んだ後、ノブは重たい口を開いた。

「なんにしても、いきなりあんな様子だから周りが勘違いしたんだし、とりあえず遠縁の親戚だとか、親父さんか、お姉さんの知り合いだとかいっておけば良いんじゃないか？その後、会長に、あなたが来たのが急だったんで大変なことになって、そうクラスメートに説明したので申し訳ないですがそういうことにして口裏を合わせてくださいって頼んでみるとか。」

「まあ、その辺が妥当じゃないかしら。難をいうなら、期せずしてあの開かずの間にもう一度行かなければならないことくらいだし。」

「そうだな、その線で行くのがいい気がしてきた。手助け頼んだぞ」

「まかせろ。」

ちょうどそこまで話したとき、恵助たちは校門をくぐった。
すると正面の掲示板のところに人だかりが出来ていた。

「なんだあれ？」

「さあ。」

好奇心に駆られて人ごみに混じり、その中心へと移動すると小さな張り紙が一枚張ってあって、そこには、だいたいこう書いてあった。

下記の部、同好会は諸事情により進入部員の募集はありません。

散歩部
写真部
第三美術部
資格取得部
英会話同好会
マージャン部
ペットボトルロケット同好会
ギター同好会
第二演劇同好会

詳細は生徒会会長　松下二十重　もしくは副会長　桜井初音まで。

「おい恵助、さっきお前が入るって言ってたところ全部ダメってことになってるぞ」

「マジで？いったいどういうことだよこれ～」

［恵助。］

レイコがぽんと肩を叩いてきた。

［できすぎよ、これは。］

――なに？

［まだ気づかないの？こんな偶然があってたまるもんですか。］

――ってことはまさか？

［おそらくそうでしょうね。事実上帰宅部に近い活動の部活、同好会がすべて入部禁止、つまりほぼ廃部の方向に進むなんて普通じゃありえないでしょ？これで残すところ半帰宅部は、誰も知らないであろう『オカルト研究同好会』だけ。詳細を聞きにいくにしても、あきらめてオカ研に入るとしても、あの会長のところに行かなきゃならないわけだし。］

――確かに、偶然というには。

［そう考えてみると、昨日人目をはばからずいきなり教室に乱入してきたことも、そしてその事態を収拾するためには、どんな言い訳をして、その結果どうなるのかまで予想してたのかもしれない。どうやらあのカイチョウさんはとんでもない食わせもので、その上策士らしいわね。］

――でもレイコ、そうとしか考えられないかな？

［あ、もしかしてあんなきれいな人がそんなことするわけないとか？］

――違うよ。ここまではまだ偶然であるかもしれないだろ？もともと活動が少ない部活だったんだろうし。誰だって、いきなり疑ってかかるのは嫌だからさ。

［甘いわね。まあ、偶然にしても必然だとしても、オカ研にいくのはやめたほうが良いよ。たぶん行っちゃったらもう逃げられない何かが用意されてる気がするよ。］

ぐるぐると頭の中で取るに足らない推測が渦巻いている。

恵助はゆっくりと、小さく、深呼吸をしてみた。

少しだけ、頭の中の邪魔な考えが口からどっかに飛んで行ってくれたみたいだ。

――違うよレイコ。俺はどっちにしても二十重さんのところに行かなきゃならない。

［へ？］

――どうした？きょとんとして。

［ば、バカッ行ったら詰みよ？チェックメイトよ？ジ・エンドなのよ？］

――行かなきゃわからないだろ？確認もしないで疑ったまま、会わないようにこそこそとしてるなんて、間違ってる。……それにさ。

［なによぉなんだっていうのよぅ］

レイコはじとぉ～っという湿っぽい視線を送ってくる。

――どんな部活だろうとレイコとの約束は守るって。それなら心配することはないだろ？

［なっ］

一瞬だけレイコは硬直してから手を突っ張って、むっと顔を歪ませた。

［ああそう。これだけ言ってもダメだっていうならまんまと埋められていない地雷を踏めば良いんじゃない？ちょっとは後悔するかもしれないしぃ］

なんていって、学校のどこかへと飛んでいってしまった。

――なに怒ってるんだよ……あいつ。

「……おい、聞いてるのか？」

はっとなって横を見ると怪訝な顔をしたノブが目の前で手を振っていた。

「どーしたんだ？ボーっとしてるし顔色悪いぜ。調子悪いんだったらとっとと帰って寝てろ。体調悪いやつが授業中に視界の中でふらふらしてんのは不愉快だ」

「勝手に病人に仕立て上げられるのも不愉快だって」

恵助はノブらしい心配にいつものように返すとかばんを肩に担ぎなおして人ごみを抜けた。

しょうがない。
後で、ちゃんとレイコに謝っておこう。
心配してくれていたわけだしこのままじゃ気分が悪いからな。

レイコが飛んでいった方向の屋上を見上げた後、死地に向かう心構えをして恵助は足を踏み出した。
二十重さんの話の前に、クラスメイトの説得をしないといけないからだ。

／

レイコは一般棟の屋上の隅で、手すりに寄りかかるようにして空を見上げていた。
［あ～あ……あれだけ言ったのに。］
目をつぶり、額に手の甲をあてて、深呼吸した後、ゆっくりと目を開く。
ぼんやりとかすむ手越しに、太陽が見えた。

［最初からわかってる。結局は、そうなんだって。］

するりと手すりをすり抜け、屋上の角にふわりと立ってみる。

見渡す二七〇度の景色が、絶壁だった。

［生きていたころは、五階分の高さって怖くて仕方なかったのにな］

その場で軽やかに一回転して、さらにジャンプしてみた。

見えたのは自分のココロを揺らさない、死が隣り合わせのキレイな風景だけ。

ココロを揺らすのは、そんな自分のココロだけ。

『どんな部活だろうとレイコとの約束は守るって。それなら心配することはないだろ？』

さっきの恵助の言葉がまだ耳に残っている。

［ホントに。大馬鹿なんだから］

レイコはゆっくりと、視界を閉じた。

／

教室の前、恵助は何度も深呼吸を繰り返していた。

「ノブ、ありがとな。すげー助かるよ。」

「まあ、泣いても笑っても一年間一緒に授業受けるわけだし。あんなことでクラスになじみにくくなるのもつまらないだろ。ただし、見返りは定食屋エデンのロースカツ定食だからな。じゃあ、深呼吸しろ。教室のドアを開けるぞ」

「ああ。頼む。」

ガラリ、とノブが勢い良く教室のドアを引くと、昨日の延長戦とばかりにみんな一斉に振り向き、時間が止まった。

しかし、時はすぐに動き出す。

ノブの後ろに俺がいることに気づくなり、クラスメイトたちはこっちへと突貫し始めた。

バンッ…ピシッ

ドアのガラスが軋むほど勢い良くドアを閉めて、全力でノブと一緒に扉を押さえつける。

しかし、今見た光景がリセットされるはずもなくドアはガタンガタンと今にも開かれそうになりゆれている。

なぜ一人も気がつかないのか。

気づいていても尚そうしているのか、教室前側、教壇横のドアから出てこようとするやからは誰もいない。

その分、クラスほぼ全員の力でドアが今にもはじけ飛びそうになってしまっていた。

「恵助、一度体勢を立て直したほうが良いかもな。これは、まずい。」

「あ、ああ。わかった。」

こんなことで説得できるのだろうか。

ましてこの後で、開かずの間にまたお邪魔して、なんだか気まずい話をしなければならないというのは今からすでに気が滅入る。

小さなため息をした後、すっと開かずの間のほうを廊下の窓から見上げたとき、急に恵助の目には、とんでもない光景がうつった。

瞳孔が開き、ざわりと髪が揺れるほど怒りがわいてくる。

目に飛び込んできたのは、屋上の手すりの外、後一歩踏み出したら

落っこちてしまうのではないかという位置に、レイコは目をつぶって、両手を広げて立っている光景だった。

「な、なにやってんだよ…あいつはっ！」

一階の出窓から身を乗り出してもう一度見てみるが、やはりそれは見間違いじゃなかった。

「どうしたんだ！押さえてなきゃ……」

恵助の頭からは、レイコが空を飛ぶことが出来ることも、まして幽霊であることさえも消え去っていた。

ただ、今にも飛び降りてしまいそうな、悲しげな、それでいてどこか安らかな顔をしていたレイコに腹が立って仕方がなかった。

今レイコがいるのは屋上の隅。

まっすぐに屋上に向かっても鍵がかかっていて出ることはできないようになっている。

でも、もしかしたら鍵が開いていることがあるかもしれない。

「悪い、後は任せた」

ノブの声をさえぎりそうとだけいうと、恵助は足元が爆ぜた様に階

段へと駆け出した。

「よくわからんがわかった、全部任せろ～！ただし、エデンでおごってもらうのは上ロース定食にしてもらうからな～」

なんていうノブの声と扉がはじけ飛ぶ音が、階段の手すりの間の隙間から走る恵助の耳に響いてきていた。

「ふう、騒がしいことだ」

階段の影で、一部始終を観察していた初音は窓を見上げ、携帯を取り出した。

「教室で一悶着あったあと、そこか、屋上を見て血相を変えて階段へ駆けて行った。何か見つけたのか、そっちに行くんだろう。ここから見ただけじゃ屋上には何もなさそうだし、鍵の用意だけして開かずのまでそのまま待っているのがよさそうだ。」

通話を終わらせ携帯を閉じると、藍色の地球を模した小さなストラップが小刻みに揺れた。

小さく息を吐き出し、メガネをずり上げて初音はゆっくりと恵助を追い始めた。

一気に屋上の扉まで駆け上がった恵助は体当たりするような勢いで扉のノブを勢いよく回してみた。

が、当然そこにはしっかりと鍵がかかっていて一向に開いてくれる気配がない。

屋上への扉は、強化ガラスによって出来ており、ドアの枠の部分が金属で出来ている以外は屋上の様子がそのまま見えるようになっている。

恵助はもっともレイコに近い位置へと移動して、ガラスを叩きながらレイコを呼んでみたが、さっきの体制のままレイコは気づく様子がない。

「くそっ、なんなんだってんだよ！」

ボウン、なんて間抜けな音をさせて思い切りガラスを殴ってみるが、痺れる様な痛みが走っただけで事態に変化はない。

たしか昨日校内案内図通りなら、開かずの間の向かいにある出窓を開けて、校舎の外縁をわたっていけば非常階段経由で何とか屋上にいけるかもしれない。

階段を駆け下りるとすぐに開かずの間の正面の出窓を開け放って身を乗り出してみた。

落下防止用なのか、しっかりとそこには足場があり、見渡してみると左側、開かずの間から出るための非常階段へとつながっていた。

ここは一階、ここは一階、ここは一階、ここは一階、ここは一階、ここは一階……

恵助はぶつぶつとレベル一の自己暗示の呪文を唱えながら足場に降りた。

朝はあんなに気持ちよかった風が、残酷にここから突き落とそうとして吹いてるんじゃないかと疑いたくなるのはやっぱり誰でもそうなんだろうか。

制服が穴だらけになるのではないかというほど背中を壁に押し付けながらゆっくりと、一歩ずつ移動する。

築五十七年の校舎はところどころひびが入っていて、頼りない足場は一歩歩くたびに崩れて落ちてしまうような想像を頭に叩き込んでくる。

後、一メートル…八十センチ……四十センチ……二十…

最後は勢い良く非常階段に飛び乗った。

「っはぁ〜〜〜〜〜〜〜〜」

足を押さえて思いっきり息を吐き出す。

これ、帰りはどうしようなんて、一抹の不安がよぎって、頭を振ってその不安を押しのけた。

階段の確かな足場を確認して恐怖が薄れてくると、なんだかまた無性に腹が立ってきた。

レイコのやつ。

あんなに勝手に協力を求めてきて、回りにちょっかい出してみたり、あれだけ大騒ぎして見せたりするくせに。

やけに達観したような説教をしてきたりしたくせに。

……あんなに、生き生きした様子で笑いかけてきたくせに。

あんな、今すぐに消えちゃいそうなさびしそうな顔をしてあんなところに立っているなんて。

「くそっ」

恵助は錆び付いた非常階段の手すりを叩いた。

「反則だろ！そんなのは！」

だいぶ古いため、一歩踏み出しただけで階段はグワングワンゆれている。

こんな状態でいざっていうときに大勢が避難できるのか酷く不安なくらいだ。

「思いっきり文句言ってやる！」

恵助は大きく息を吸い込んでから、一気に階段を駆け上がり始めた。

螺旋状の階段を上りきって視界が開けたとき、レイコはいよいよ落ちそうなほど体を乗り出していた。

今でも、本当に自分が幽霊になっているなんて信じられない。

でも、こうして感じる自分の体は、酷くあいまいになってしまっていて。

今の立ち居地が本来死と隣りあわせなのだと思うと、妙に和む気さえする。

体があるわずらわしさを、世の中の取り決めのわずらわしさを恨めしく思ったこともあったのに。

今は、無意識にそれをなくしてしまったことを悔やんでいるのかもしれない。

あのことを――？

不意に、チクリ、と悪意のような気配をぶつけられた気がして、周囲を見渡す。

［気のせい…かな？］

あれ、何を思い出そうとしたんだっけ。

んー、とうなってレイコはネガティブな思考を吹き飛ばして体を伸ばした。

［そういえば恵助どうなったかな。今頃教室で揉まれてシオシオのパァになってたりして。］

どぉ～れどぉれなんて、額に手を当てて身を乗り出して一階の恵助の教室付近を眺めてみる。

［うーん、ここからじゃどうもよく見え……きゃっ］

恵助は一気に駆け寄ると思いっきりレイコの手を引っ張った。

レイコは屋上側に倒れこむようにふわりと浮かぶ。

「良かった……こんのバカレイコッ！何でそんなところに立ってんだよ。危ないだろ！」

レイコはまた、初めて会ったときみたいな不思議な表情をして、黙り込んでいる。

「何だよ、変な顔して。なんか文句でもあるのか？」

［ぷっ、あはははは、恵助あなたおっかしいわよ］

「おっおまえなあっ！」

身を乗り出した恵助の目の前にレイコは手を広げた。

［恵助、私は何を怒っているのか、わ・か・ら・な・い・わ・よ。］

何を考えているのかわからないあいまいな笑みを浮べて、言葉を区切りながらレイコはそんなことをのたまった。

「わからないだと？こんなところで身を乗り出して、危ないだろっていってんだよ！大体……」

――――大体、何なのだろうか。今、なんていおうとしていたんだろうか。

恵助が一瞬考え込んだ隙に、レイコは仰向けに浮いていた体制からゆっくりと起き上がった。

そしてその場で、くつくつと笑い、少し浮いたままくるくると回転してみせる。

［見てのとおり。私は幽霊よ。あんなところから落ちたって死んだりしないし、空が飛べるんだから落ちることもない。だから、あそこにいたって危ないことなんて何にもないし、ただ、見晴らしがいいあそこにたって、記憶が戻る何かがないか見ていただけ。そのことについてあなたが怒る理由も、筋合いもないじゃない。］

そうだった。レイコが幽霊だったことをすっかり失念していた。
確かに、レイコはここに飛んできていたのだから、危ないことなんて何にもない。

でも怒っている理由は、ある。
筋合いだって。

でも何で怒っているのかなんて、言えるわけないじゃないか。
『レイコが消えそうなほどさびしそうだったのに、どうしてやればいいのかわからない自分に腹が立った』なんて。

「だからって目をつぶってそんなところに立っていたら心配するだろうが！」
「わかったわかった。もうこんなところでぼんやりしたりしませんよ。ところで恵助、傍目には今、恵助が一人で屋上に忍び込んで何か叫んでいるようにしか見えないでしょうから、早いところここから戻ったほうがって……手遅れみたい。」
恵助が振り向くと、そこには今井久雄センセイが鬼の形相で立っていた。

「高柳恵助ぇ～、初日から騒ぎを起こしたかと思えば今日は屋上で何をしている！」

眉毛を吊り上げ、眼輪筋を痙攣させ、こめかみには青筋を立ててずしずしと迫ってくる。

「え、いや、あの…廊下を歩いていたらここに猫がいて、落っこちそうだったんで思わず」

「ほぉ～そうか。それなら仕方ないな、だが、その猫とやらはどこにいるんだ？それに屋上の鍵はどうやって手に入れた？」

「鍵？何の話ですか？」

恵助の言葉に、今井センセイの顔の赤みはさらに増していく。

「何を言っている。今私が出てきた屋上のドアの鍵をどうやって開けたのかと聞いているんだ」

どう聞いても、屋上の扉の鍵が開いていたって言う意味の言葉だ。

だけどさっき確認したら確実に鍵は閉まっていたし、俺は窓沿いから来たから鍵なんて持っていないし、当然今でも鍵はかかっているはずなのに。

「だんまりか。ならいい。生徒指導室まで着いて来い」

「う」

今井センセイは勢い良く俺の腕をつかんで思いっきり引っ張った。

「あらあら。今井先生、すいませんでした。いつお話をしようかタイミングを計っていたんですが、タイミングを読み違えていたみたいです。」

不意に声がしたほうへと目をやるとそこには猫を抱えた二十重さんとノートパソコンを抱えた初音さんが立っていた。

「なんだ二人ともこんなところに出てきて。すぐに戻りなさい」

「今井教諭。二十重がどこからか迷い込んだこの猫を見つけて、捕まえようとしている間に屋上に逃げ込んだようで、鍵をお借りして屋上へ出たんです。」

何の抑揚もなく淡々と初音さんが続ける。

初音さんが言っていることは嘘だとわかっているのに、昨日言われたような嘘をついた特有の動きというのがいっさいなく、よどみなく続く説明は高僧が説く説法のようだった。

「ちょうど、ちょっとした知り合いの高柳恵助君にあったので、女でだけで捕まえるのは大変だと協力していただいたというわけです。

」

小脇に抱えるノートパソコンを開いて、ファイルを開くと、動画で鍵の貸し出しは校長の承諾済みだというムービーが流れる。

［なにあれ。只者じゃないと思っていたけれど、あの二人はいったい何者なの？］

――わかんないって。とにかく今はこの話に乗っかっていたほうがいいことは確かだろ

［まあ、そうねぇ］

「……そういうわけで、恵助君は生徒会会長、副会長の名においてお預かりいたします。」

「ぐむ、わかった。高柳恵助、今度厄介ごとを起こしたらただじゃすまないからな」

「はい。わかりました。」

不完全燃焼なのか下から上までなめるように恵助をにらむと、またずしずしと今井教諭は帰っていった。

「二十重さん、ありがとうございました。助かりました。」

「いいんですよ。ちょうど話もありましたし。ここにいるとまた話がややっこしくなりそうですから移動しましょうか。」

「移動ってどこに？」

「開かずの間に。」

「う……」

［あ〜あ。チェックメイト］

「何か問題でもあります？」

「いえ、ないです。」

「じゃあ、いきましょうか。」

「はい。」

恵助はすごすごと二人についていくしかできなかった。

／

「それで、どこから話しましょうか。」

前回来たときよりもろうそくの本数が少ないのか、前回のように自分用の机に座って首を傾けている二十重さんが死刑宣告ばかりするインチキ占い師のように見えてしまう。

「その前に、謝らなきゃならないことがあるんですけど。」

この空気の中黙っているのはキツイし、何より先にクラスメイトに嘘をついて、口裏を合わせてくださいなんて話、引っ張りたくない。

「昨日ここから戻ったらクラスメイトが混乱していて、それを治めるために二十重さんは親父の遠縁の親戚の娘だっていっちゃったんです。」

勝手にすいませんでした、と恵助は頭を下げた。

「あらあら。そういえば入学初日に上級生に呼び出されたらみんな混乱しますからね。恵助君大丈夫ですから頭を上げてください。」

あの見慣れた笑顔を浮かべているんだろうと聞いただけでわかる、穏やかな声のトーンに安心して恵助は顔を上げた。

「え？」

レイコがぽんと恵助の肩を叩く。

［…ほら。霊の予感は、当たるのよ。］

二人が見たものは、こっちに向けられている初音のノートパソコンの画面だった。

「確か恵助君は、霊感に目覚めたらここに入ってくれるといっていましたよね。」

浮べているのはあの笑顔で。

光を放つパソコンの画面には昨日自分たちが街を散策する様子が流れていて。

画面隅には現在位置をＧＰＳ表示されているミニマップと、手に持つ携帯から『どこにも電話をかけていない』という意味のＯＦＦ表示されている何やら良くわからないグラフ。

「初音、お願い。」

急に恵助の顔のドアップが映り、その口の動きに合わせて、初音さんが口を開いた。

「今回は俺も悪かったから許すけど次にあんなの放ってきたら強制的に浄霊してやるからな！」

「言うべき言葉が違うだろ」

「よし。じゃあこの話は終わり。まず街のほうから散策してみるか。」

「何でまたいきなり墓地しかない、公園とは名前だけの場所を選び出すんだよ」

「残念！夕飯の買い物があるから結局街から探しますから。レイコの意見切り～」

一部をそっくりそのままトレースして、初音はメガネをずり上げ黙り込んだ。

一呼吸おいて、二十重が再び口を開いた。

「会話の形をとっていて、独り言ではなさそうです。でも電話はかけていないんですよ。」

［ねえねえ、恵助あれって読唇術ってやつ？］

すごいものを見たと声のトーンを上げるレイコの言葉を受けたように、二十重さんは。

「そう読唇術ってやつですね。レイコさん。」

と、ゆっくり答えた。

びっくりして二十重さんを見ると、その目線は俺の左横に向いていた。

そして、まさにレイコは今俺の左横にいる。

――どういうことだ？

［わっかんないわよ。恵助たしか前二十重には霊感がまったくなさそうだって言ってたのに。］

――そのとおりだって。

「ジョウレイってなにかしら。条例かしら。それとも条令？それとも、霊を浄化する浄霊かしら。もしそうなら除霊なんていう言葉よりもきれいでいいですね。」

「二十重。流れからして、最後だろ。」

優しげな二十重の声と、抑揚がなくて冷たく感じる初音の声が恵助を追い詰める。

もう、なんて返したらいいかわからなくなってきてしまった。

「もしかして、恵助君はあの後霊感に目覚めちゃったりしたんじゃないですか？」

「二十重。目覚めたと考えて差し支えはない証拠がそろっている。」

切先は喉もとに突きつけられている。

「もしかしたら、アパートに住んでいたのはレイコさんという幽霊で、今そこについているのはそのレイコさんだとか」

チラッと横目でレイコを見ると、勢いよく首を振っている。

「あ、ははは。また、二十重さんはホントにオカルト好きなんですね。というよりも、推理モノ好きですか？」

「そうなんです。推理モノも大好きなんです。だから、たまに無茶をやってしまったりするんですが。」

「無茶、ですか。いったいどんなことですか？」

二十重さんは、一瞬だけ考え込んだ後、首をかしげた。

「ところで、話は変わりますが、冥王星。ギリシア神話で言うところのハデス。ローマ神話で言うところのプルトン。これの英語読み

ですか。」

「……な、何の話ですか？」

二十重さんはおほん、と一度だけ咳をして言いにくそうにした後。

「クラスメイトで幼馴染の坂本伸之君から借り受けたものです。鞄に詰めて。面白そうですね。あのプルートって。いくつかありましたけど…表題はたしか…」

ぐさり。

チェックメイト。

「あー！あー、忘れてました。そうです。霊感に目覚めました。ばっちり目覚めちゃいましたぁ～！」

恵助は無駄に大きな声を出して二十重の言葉をかき消した。

「え？何言ってるのよ恵助ったら！そんなこと言ったら…」

———悪い。無理。約束はずぇったい守るからここは引いてくれ！

「じゃあ、オカルト研究同好会に入っていただけるんですか？」

「う…入ります。入らせていただきます。」

満足げに恵助の言葉を聞いた後、二十重さんはかわいい熊のキーホルダーがついた鍵を取り出した。

「あら～助かります。じゃあ、この部屋の鍵を渡しておくので、好きなときに使うようにしてくださいな。特にこれといって取り決めはないですが集まりがあるときはこちらから連絡を入れるので、出来る限り参加してください。それと、今回ほどではないにしても恵助君と行動を共にすることが増えると思いますが、よろしくお願いしますね。」

そこまで話して、ぱちんと二十重さんが指を鳴らすと一気にろうそくの光が増した。

ぼんやりと照らし出されるのは、ここから見ただけでも『本物』だとわかる浄霊道具や、何かしら霊と関係ありそうな本物の呪物。

姉貴が持っていたものと同じ、御神木で作り出した浄霊用ハリセンまでさりげなくおいてある始末。

目の当たりにした光景に驚いた後、いまさらながら二十重さんが言った言葉が頭の中によみがえってきた。

……まて。

今の言葉は聞き間違いだろうか。

「行動を共にするというのは。どういう、ことですか？」

「そのままの意味です。私には霊感がないようなので、レイコさんがついている恵助君と行動をともにすれば心霊現象を目の当たりに出来るのではないかと思ったので。朝や昼食時にはご一緒させていただきますということですよ。」

オカ研に入ると宣言してから、二十重さんの言葉はことごとく聞き捨てならないものばかりだ。

「霊感がないって…二十重さんはレイコのことに気づいていたんじゃないんですか？」

二十重さんは手を口元に持ってきて、小さく笑うと。

「屋上に出たのは、レイコさんがそこにいたからだと考えると話のスジが通ったので、今でもそこにいらっしゃるんだろうと思ったんですよ。」

「じゃあ、何で私の言ったことをぴたりと予測したり、恵助の左横にいる私のことをみてたの？」

二十重さんはレイコの言葉にはまったく反応していない。

「二十重さん、聞こえていないんですか？」

「あら～？何のことですか？」

やっぱり、聞こえていないようだ。このきょとんとした顔まで演技でもない限り、二十重さんに霊感がないことは確かなようだ。

「じゃあ、レイコが言ったことをぴたりと予測したり、俺の左横にレイコが立っていることがわかったのは？」

「それはですね。初音～」

二十重さんの陰に隠れるように立っていた初音さんが、

「読唇術だという言葉は相手がそういっていなくても、そこにレイコさんがいる可能性が高く、かつ高柳君がそういっていなければ矛盾することはないでしょう。それに、左横にいるのは昨日の動向から。携帯で電話しているように装いながらも左を向いて話をしていることが多かったからおそらくレイコさんはあなたの左横に絶つ癖があると踏んだ。」

と、理解力の乏しい生徒に教えるように答えた。

「恵助。まだ七割。なんで、個人単位で知りえない衛星からのドアップ画像やＧＰＳ情報などを知っていたのかわかってないわよ。この際だから腹をくくって全部聞き出しちゃいなさいよ。」

――わかってる。

「大体のことはわかったんですが、最後に、俺の位置をＧＰＳ探知したり個人の携帯発信を調べたり、普通の学生には出来そうにないことはどうやったんですか。」

「松下二十重。この名前に聞き覚えはないか？」

初音が一歩前にでる。

「ないです。」

恵助は気おされて一歩だけ下がる。

「二十重は、二十重お嬢様は世界的に有名な松下コンツェルンの代表取締役会長の一人娘だ。」

「あの、毎日五分テレビを見ていれば一度は目にする松下コンツェルンの…？」

「そうだ。」

「またまた。そんな人がこんな学校にいるわけが…」

「目の前にいるだろう。」

あまり、自分の家のことを人に知られるのが好きではないのか、はじめてみる気まずそうな顔をして二十重さんは小さくうなずいた。

――そりゃ、個人のプライバシーを軽く蹂躙する情報を得られるわ

けだ。

もし神様がいるのなら、天は一人に二物を与えちゃったどころかおよそ完璧な人間を作り上げていてこんちくしょうめってところか。

［まあ、そうだけど恵助意味わからない。］

――俺だってわけがわからないって。

「もう、初音ったらお嬢様って呼ばないでっていつも言っているのに」

「すいません。二十重。」

「もう。そんなにかしこまらないでって言っているのに。」

二十重さんと初音さんはもっぱら二人で話をしだして、なんだか一人取り残された感がすごい。
このまま退散してもいいのだろうか。

［そういうわけにもいかないでしょうね。寂しいなら私が話し相手になってあげようか］

――ぜひとも。なんて。でも、どうやら何とかなりそうだ

「ごめんなさい。今日は解散にしましょう。明日の朝には家の前に行きますので、準備をお願いしますね。それと、出来ればお昼もご

一緒したいので、お弁当などの準備をお願いします。」

「わかりました。先に失礼します。」

軽く礼をして、開かずの間から抜け出る。

［結局オカ研に入ることになっちゃったね。］

――まあ、しょうがないだろ。いまさら文句言ったってしょうがないしな

と。

レイコに返したとき、いまさらながら気がついた。

あの話しぶりだと、授業があるときやバイトの時以外には二十重さんたちと一緒に行動するということだ。

頭を抱えながら階段を転がるように駆け下りる。

そのままの勢いで恵助は教室のドアを開け放ち、すたすたと自分の席に座り込んだ。

［……すけ！恵助ってば！］

――ちょっと待ってくれって。考えがまとまらないんだ。

さっきからレイコが服を引っ張っているが、それどころじゃないかもしれないんだから。

で。

まとめて考えてみるとそれってつまり、周囲から見たところ最初に少し期待した状況になっているのではないかと。

頭を抱えて、机に突っ伏す。

――これはどう考えても、そういうことなんじゃないか？

［……あらそう。よかったわね。その勢いに乗って、次の問題も解決すれば］

レイコからは、さっきまでとは異なるそっけない返事が返ってきた。

――次の問題って何のことだ？

［もう忘れたの？『この』クラスメイトをどうするかよ］

――まて。『このクラスメイト』って、何だ？

頭をしっかりと抱えている指を一本ずつ緩めていって、腕をどかし、恐る恐る顔を上げた。

――忘れて…た。

［ケースケのことだからそうだろうと思った。まあ、ここまでだとは思わなかったけど。］

恵助が顔を上げると、恵助の机を取り囲み、クラスメイトたちが静かにたたずんでいた。

その無機質な目から感情を探ることは出来ないし、申し合わせたようにみんな動こうともしない。

――あああああああああ！何でこんなことに

［私の呼びかけなんて聞いてもいなかったくせに。もう知らない］

レイコは彼らを飛び越し、教壇の上あたりにふわふわと浮かびながら、こっちを楽しそうに見始めた。

――くそ！もうどうにでもなれ

少しだけ目を閉じて、大きく息を吐き出した。

「あのさ…」

大きな声で恵助が切り出そうとしたとき、クラスメイトたちからいっせいに声が上がった。

「悪かったな。」「親戚だったのか。」「はじめからそういってくれればあれほど騒ぎにならなかったのに。」「おかしいと思っていたんだ。」「あらためてよろしく。」

など。

以前とは逆の大合唱が起こった。

肩透かしを食らって、きょとんとしている恵助の肩にいつもの衝撃が走る。

振り向くと親指を立てているノブが会心の笑みを浮べている。

「これはどういうことだ？」

「どういうことって、お前に頼まれたとおり、みんなに説明して和解したんだ。」

「和解って…今朝の状況を見ただろ、あれからどんなことを……」

「まあそんなことより。エデンの上ロース定食特盛りだからな」

ひそかに、さりげなく、俺が階段を駆け上がっていくときの要求よりも奢るものの値段がつりあがっているから、やはりかなり苦労したらしい。

「わかったよ。ありがとな、ノブ」

胸の辺りをドンと小突いて返す。

あの状況から、どんな説明の仕方をしたらこんなにみんなが理性的になるのか。

もしかしたら今まで気付かなかったけれど、ノブは二十重さんたち並みに大物なのかもしれない。

クラスメイトに、こっちからもよろしく。と返して恵助は席に座り込んだ。

これでやっと、普通の学校生活がおくれるようになったんじゃないかと、恵助は小さく安堵のため息をついた。

弁当天国、応用的には地獄。

まただ。

また、この夢を見る。

触れただけで肌が切れてしまうほど細いテグスのようなもので作られた荒縄で体を縛られているような。

それだけじゃなくてその荒縄で人形を操るように手足を無理やり動かされるような夢。

体の節々がギシギシと悲鳴を上げ、一度息を肺に入れるだけで体が内側からはじけそうなほど痛む。

まるで今すぐにでも、体が塩になって崩れてしまいそうな。

まるで灼熱の業火の中で、一人踊っているような。

まるで凍てつく氷の中で、一人たたずんでいるような。

漆黒の影が迫ってくる。

同じく自分から影に迫って行く。

とにかくあれは俺を呼んでいる。

すぐに行かなければならない。
なんとしても。どんなことをしても。
そこに行かなきゃならない。
俺は行かなければ壊れてしまう。
渇く。
渇く。
どんどん渇いていく。
夜が来るたびに。
疼く。
疼く。
どんどん疼いていく。

夜が来るたびに。

あそこに行かなきゃならない。

止まらない。止まりはしない。

俺はこのまま壊れるのも、渇き死んでしまうのもいやなんだから。

行けば渇きは止まりそうな気がするんだから。

あの、瑠璃色の小瓶の中身を飲みさえすれば。

この疼きは、止まりそうな気がするんだから。

／

ギシリと、体がきしむ。

軋んだ勢いで四肢が千切れ飛んでしまいそうだ。

いつからか。たまにこうなるようになった。

息を吸い込めば内側から押しつぶされてしまいそうで。

鑢で出来た鎖が体中に巻き付いて、傀儡人形のように勝手に体を動かされているような感覚。

どこかに逃げ出したいけれど、逃げ出す前から、どこにも逃げられやしないのだと理解している自分がいて。

でも必死に体を揺らしてみれば、その鎖はさらに四肢に残酷に食い込み。

いっそ、このまま体が弾け飛んでしまうならどれだけ楽だろうと思ってみても、けっしてそれはかなわない。

誰に教わったわけでもなくこの苦痛を識っているから。

でも、この夢は体に食い込み、ぎりぎりと体を締め上げる。

精神を食み、肉体を食み、魂さえ食んでいく。

どんどん細く、小さく、薄くなっていく影。

薄くなっていくカゲ。

そして、消えてしまう直前にそっと鎖の上に添えられた手を握る。

ゆっくりと深海から浮かび上がるような、だるさを伴う快感が訪れる。

体が軽く、温かくなっていく。

［……！］

——もう少しだけ。

［……！］

——あと少しだけ。

［っ！起きろー！］

布団が弾け飛ぶ。

勢いよく体が引き起こされて、やっとまぶたを開けるとこそにはいつものようにレイコの顔があった。

「おはようレイコ。今日も綺麗だけどもう少しだけ優しく起こしてくれると、とても俺は嬉しい。」

一瞬だけ目を開いて返事をしたものの、恵助は再び甘い泥土に飛び込もうとしている。

［寝ぼけて、自分で何を言っているのかわかっていないんでしょうけど！いいかげんおきなさいよね！遅刻しそうなんだから！］

レイコがだいぶ慣れた様子で指を鳴らすと、恵助がしっかりと握っていた布団は弾け飛び、押入れの前にたたんだ状態でふわりと落ちた。

［ほら、ぐずぐずしないで準備しよ準備！］

「ああ、毎朝悪いね。助かるよ。」

高校に入学してからはや二週間がたとうとしていた。

［もう慣れたよ。ほら、お弁当の準備もしておいたから早いところ行きましょう］

レイコは毎日のように弁当を作っておいてくれる。

最初のころはどうやっているのか聞いてみたりしたが、そのたびになにやら不思議な笑みを浮べてお茶を濁すばかりなので、突っ込みを入れるのはやめておいた。

「サンキュ。」

ハズレが多い福袋弁当を受け取り、さっと準備を済ます。

その間につけていたテレビからは、どこかの動物園でオカピといわれる馬みたいな珍しい動物が生まれたことが報道されていた。

今日は曇りの金曜日。

明日、明後日と晴れだから行楽にはもってこいの週末だとも。

レイコは、その動物が気に入ったのか一人でひとしきり歓声を上げてから、真顔で。

「恵助。ビビッと来たよ。あそこの動物園に必ず私の記憶の残滓がある。」

なんていっている。

恵助はさっさと手を動かしながらいつものように振り向くと、そこには当然のように、いつものようにレイコはふすまから頭だけすり抜けさせて着替えを覗いていた。

「仮にあっても、たぶん俺たちが行く前にその珍しい動物が残滓を引き連れて中国に行っちゃうだろ。だから、残念だけどあきらめて

くれ。」

［のりが悪いわね。ちょっと動物園に行くくらい良いじゃない］

ムーっとむくれながら、レイコは手を突っ張って顔をしかめた。

「考えてみてくれって。レイコと動物園に行くって事は、俺は『男独りぶらりと動物園へ珍しい動物めぐりの旅』をしなきゃならないんだぞ。そんな道行き悲しすぎるって。」

［そんなことないって。だって私がいるんだから。］

「じゃあ、そのうちな」

［絶対だからね。じゃあ、遅刻しちゃうし早く学校行きましょ～］

「わかったよ。じゃあ、行ってきます。」

［いってらっしゃ～い］

レイコと一緒に玄関をくぐり、はじめは少し不安を覚えたさびた階段を軽快に駆け下り、隣の家とのわずかな隙間を抜けて一階のおばあさんに挨拶を済ませて道路に出ると、そこにはひそかに、毎晩寝る前の御伽噺を楽しみにしている子供のように目を輝かせている二十重さんと、およそ表情を読み取ったりなど出来ない、いつもどおりの平静な初音さんが待ち構えていた。

「おはようございます。二十重さん、初音さん」

「おはようございます、恵助君、それにレイコさん」

二十重さんの視線が恵助の左側に移動するのを確認して、レイコは恵助の右側に回りこむ。

［ふーん、見えてないくせに］

――何をすねてるんだよ。

オカ研に本入部してから毎日二十重さんたちはここに迎えに来るようになった。

というか、何か用事がある休み時間、放課後のバイト、レイコの記憶探しの時間以外は朝も、昼休みも、放課後も実質的には行動をともにしている状態だ。

どうやらそれが気に入らないのか、レイコは毎朝の挨拶のときは機嫌がすこぶる悪い。

「おはよう。しかし、昨日より三分二十三秒、平均より二分四十九秒ほど準備が遅かった。高柳、あまり二十重を待たせるのは許さないぞ。」

言葉は、穏やかで静かなくせに抑揚がつかないというだけでこれほどまでに恐ろしい響きになるのかというほど、朝からナイフのような言葉を投げかけてくる初音さんにも、少しだけ慣れてきた。

「わかりました。明日はもう少し早く出てきます。」

「あらあら。私たちだって来たばかりなんだからそんなに早く出てくることもないんですよ」

そういいきるや否や、二十重さんはぱちんと胸の前で合掌するように手を合わせ、学校への歩を進めながら

「昨日はどうだったんですか？何か特別なことは？ポルターガイストやラップ現象、枕元に霊が立つその他もろもろのことは起こったんですか？」

なんて、カウボーイの投げ縄のように質問を投げかけてくる。

［何それ！私は悪霊じゃありませんから！］

「そう毎日毎日特別なことは起こりませんって。それに、レイコはそういうことするタイプじゃないですし」

［そうそう。どんどん言っちゃって～］

レイコはボクサーのような動きで二十重さんを牽制している。

当然、二十重さんは気付きもしていないけれど。

レイコの奴、実はそれほど不機嫌じゃないみたいだ。見えていなくても自分を意識されているのだから、当然といえば当然かもしれない。

「そうですか。それはレイコさんに悪いことを言いましたね。なにか、変わったことがあったりしたらぜひ教えてくださいね。」

二十重さんは目を輝かせたまま恵助の顔を覗き込んだ。

「そう、ですね。なにかあったら、ですけど。」

なはは、なんて曖昧な笑い方をして、照れ隠しに顔を背ける。

「そういえば昨夜放送されていたあれを見ましたか？」

「あれって、何のことですか」

「高柳。先週も同じことを二十重は言っている。『本当にあった投稿怖い話』を見たのかといっているんだ」

「ああ、すいません。昨日レイコとチャンネル争いをして負けちゃって、同じ枠のバラエティ番組を見ていたんです」

そう答えてから、ああ、昨日チャンネル争いをしていたとき、家の

中にはラップ現象もあったし、レイコの引き起こしたポルターガイスト現象もしっかりあったことを思い出した。

――レイコ、悪霊だったのか？

［そ、そんなわけないでしょ！大体悪霊が弁当なんか作るわけないでしょ。］

そう、弁当を作る悪霊はいないだろうが、レイコの弁当には地雷が埋めてあることが多々あり、その意識が遠のいて、息が苦しくなる味を考えるとレイコは悪霊なんだろうかと真剣に思ったりしてしまうのだ。

――…まあ、そうだな

［何よその間は～！］

――なんでもないって。

また二十重さんのほうへと向き直ると、二人はそれぞれのかばんの中から大量のＤＶＤディスクを取り出し始めた。

「それは……いったい？」

「二十重に、おそらく高柳はその番組を見ていないといったら、わざわざＤＶＤに焼いてもっていくなんていいだした。」

「恵助君、こっちの三枚が『幽霊新書』一枚あたり二時間くらいですからちょっとした映画みたいな感じです。こっちの五枚が昨日までの『本当にあった投稿怖い話』で、これは投稿された内容を再現ＶＴＲにまとめてあって、とても面白いですよ。それとこっちが『こぼれるハラワタ・忍び寄る恐怖』シリーズ全十三巻で、徹底的にリアルさを追求したそのつくりには感動すら覚えました。それに…」

次々とＤＶＤを扇のように広げながら説明を延々としている二十重の横で、初音は説明が済んだＤＶＤを受け取り、それを恵助へと押し付け、その間に次なる心霊番組のＤＶＤを二十重に渡していく。

その様子を唖然と見つめる恵助の腕にはどんどんＤＶＤの山が出来ていく。

いったいどんな仕組みなのか、明らかに恵助の腕の中にあるＤＶＤの体積は二十重さんのかばんのそれを凌駕していて、ついに松下コンツェルンは四次元ポ〇ットならぬ四次元かばんを開発したのではないかという勢いだ。

「ちょ、ちょっと良いですか二十重さん。こんなにたくさんだとしても観きれないですし、それに学校において置けないです、って！初音さん、何気に積み上げるペースを上げないでください！」

「そんなオカルトいんちき番組なんてどうかと思うけど。幽霊なんて眉唾だしね。フフフ、さあ、恵助の腕力、バランス力はどこまで

持つのでしょうか。実況は私、レイコがお送りします。」

ふわりと恵助の両肩に手を置いて、レイコはこの状況を楽しんでいるようだ。

――ちょっとお待ちなさいセニョリータ。じゃああなたは何だというのデスカ。そもそも、少しくらい手伝ってくれても良いじゃないか。

腰の辺りに出した手の上のＤＶＤはもう頭の辺りまで積み上げられている。

［やーよ。がんばってね、ケイスケクン。おおっっとＤＶＤがたわんだぁ！そしてそのまま重力に引かれてぇ～］

「あああああああああああああああああああああ！」

［たぉおおおおれたぁあああああ！］

Ｋ－１のアナウンスのようなレイコの実況と恵助の悲鳴、そしてドガンラガシャ～ンとものすごい音を立ててＤＶＤ山は崩れ去った。下には恵助を埋め立てて。

「あらあら～、恵助君たら無理でしたら言ってくだされば良かったですのに」

口元に人差し指を当てて、困ったように二十重さんは小悪魔ッぷりを発揮し、その横では初音さんが珍しく微笑を浮べ、レイコはおなかを押さえて爆笑していた。

「何でも良いですから、この重しを何とかしてください～」

恵助の弱りきった声が、通学路に響き渡った。

余談だが、ある家の人はこの声で起きて、会社に遅刻せずにすんだとか。

そんなこんなでそんなことをしているうちに、あっという間に恵助たちは学校についてしまった。

／

紺色のつなぎを着た百八十センチを超える巨躯の男は、ふらりと体を揺らした。

知らない家の塀に寄りかかり、手を額に当てて、混乱する思考をまとめようと記憶をたどる。

ええと。

確か、昨日は朝起きて、飯を食わずに現場に行って。

［ちがう］

ああ、その前にコンビニによって、飲み物を一本買って。ついでにクラフトテープをひとつ買って。

現場でいつものように作業して。

それで。

ああ、あんまりにもこびりついて。錆び付いて砥石が必要だから、店に寄ったんだ。

あのいけ好かないやつが、着いてきていて砥石を買っているのをみて

「お前がこの近所の動物殺して回ってるんじゃねえのか」

なんてぬかしやがったから、すれ違いざまに思いっきり殴り飛ばしてやった。

うずくまった奴に一発蹴りを入れて。

そんなの俺のせいじゃないに決まってんだろうが。

［違う］

頭の中がぐるぐる回って、なんだか熱があるみたいだ。

軽い吐き気を押さえつけて、なんとなく足が進むまま歩いたら、見えたのが小日向高校とその隣の小日向小学校だった。

自分が卒業した学校だ。

小学校を取り囲むフェンスに重い体をもたれさせて、空を見上げてみた。

空は、重く、薄暗い雲に覆われていて、気持ちの悪い今の気分を象徴し、さらに悪化させてくるように感じる。

［チガウ］

最近、記憶の混乱と欠落がひどい。

気がついたときには、とんでもなく苦しい悪夢にうなされて朝目が

覚めて。

昨日の記憶がごっそりと抜け落ちているなんてことがざらだ。

［あはははははははははは！『抜け落ちてる』とは笑わせてくれるぜ］

病院に行ったほうがいいんだろうが、借金返すために名義を二束三文で売っちまったから、いったいいくら請求されるかわかったもんじゃない。

それに、今医者なんて信じられるわけがない。

ゆっくりと息を吐き出して目を泳がせると、今背を預けているフェンスのすぐ横にウサギとウコッケイを飼っている飼育小屋を見つけた。

［都合が良いじゃないか。ついに見つけたんだから。］

都合がいい？

［もう準備は出来たんだからよぉ、さくっと済ませて、その勢いでもってだなぁ］

す、済ませる？

［そーそー。昨日までのようにさくっと］

そんなこと俺はもう…

［そんなことって何だ？そうさ、おめーは覚えてんだよ。自分でやろうと思ってやったことなんだから、ほんとに忘れてるわけがねぇ。］

やろうと思った。俺が？動物を…殺してる？

［最初はむしゃくしゃして。今じゃ渇くからだろ］

渇…く。渇いてる。俺は、渇いて、いる。

［残り……片割れは小日向高校の開かずの間だ。わかるだろ？］

あ、ああ。ああ。わかった。わかってる。わかってるさ。

こんや、やっと。

この渇きから開放されるんだ。

手を突っ込んだバッグの中には、砥石と、クラフトテープと、乾い

た糊のような血がべったりとついた包丁が入っていた。

／

教師、生徒ともにどこかやる気にかけた、ゆったりとした授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

廊下を全速力で走り去っていく音が響き始める。

「これで、授業を終わります。」

教師の言葉と、日直の号令によって、出走のラッパは吹き鳴らされた。

必要以上に強い力で開けられた教室のドアはきしみ、我先にと駆け出すクラスメイト半数以上によって、今にも弾け飛びそうになっていた。

時間は十二時四十三分。

昼休みになってから三分。

たった三分。されど三分。

比較的早く授業を終わらせる教師だったものの、もう食堂は埋まり、購買の人気商品はかなりの品薄になっている時間だ。

恵助はゆっくりとかばんから弁当を取り出し、一度だけ深呼吸をした。

回りでは女の子たちが瞬時に机の配置換えを済ませて、仲良しグループで昼食をとりやすいような陣形と、お互いを牽制するバリケードを作り上げている。

やけに軽く感じるそれをしっかりと手に持ち、ジュースの自販機に行列を尻目に一気に階段を上る。

以前宣言されたとおり。二十重さん達は昼時になってある程度の時間がたつと教室に弁当、パンなどを持って押しかけてくるようになった。

当然、そんなことを繰り返してもらっていると、親戚だということでおさまった二十重さん騒動の炎がやっとくすぶるくらいまでに治まってくれたのに、それじゃあこっちの身が持たないということでいつの間にか恵助は開かずの間で昼食を済ませるようになってしまっていた。

［けーすけー、今日も開かずの間に行くわけー？］

レイコは一瞬俺の左側に移動しかけて、ふわりと右側に移動する。
――まあ。せっかくノブに治めてもらった話をまたややこしくするのはゴメンだし。

［ふーん。前にも話したけれど、あそこ、なんだか嫌な気配がするよ。悪霊に近いような。］
――そうか？俺は感じ取れないな。まああれだけの呪物が転がっていれば禍々しい雰囲気くらいかもし出していて当然かもしれないし。

［ふーん。］
――ふーん、ふーんってどうしたんだよいったい

［べつに～。なんでもありませんけど。］

――じゃあその不機嫌ですって書いてある顔は何なんだよ。

［なんでもないって言ってるでしょ！ほら、着いたからその話は終わり］
――なんなんだよ

小首をかしげながら恵助はかわいい熊のキーホルダーつきの鍵を取り出し、中に入っていった。

慣れとは恐ろしいもので、はじめはあれほど中に入ることに抵抗があったのに今ではそれほどでもない。

山と積まれているものをすり抜けて部室の中心部へと到達すると、部活動のときとは違いちゃんと電気がついていて、さらに初音さん

のパソコンにはコードがつながっていてが昼のニュースが映されていた。

「遅くなりました。」

「あら、そんなことはないですよ～。つい今さっき私たちも来たところです。」

そういえば二十重さんは朝もそんなことを言っていたなぁ、と思って初音さんを見るとどうやら本当にそれほど遅くなかったらしくせっせと弁当を食べられる準備をしていてこっちに突っ込みを入れてくる様子もなかった。

恵助も四角く並べられた机に座り、弁当をおく。

レイコが用意してくれる弁当は三種類。

ひとつは見栄えが異常に悪くて、コケのような色と焦げたような色と炭のような色で構成されていて、見たところ素材がわからない上に味がとんでもないハズレ。

ひとつは見栄えが異常に悪くて、コケのような色と焦げたような色と炭のような色で構成されていて、見たところ素材はわからないが味はいける不思議なアタリ。見栄えが悪いときにはこっちの確率が高い。

また、小さく深呼吸をする。

パカリ、なんて間抜けな音をさせてふたを開けると、今日は白米とキレイに焼き色のついた卵焼き、それに小さなサラダとから揚げや、タコ形ウィンナーが入っているという出来のよさそうな弁当だった。

――キ…キタ――――――――！

きれいな弁当を見て、背中に悪寒が走る。脳内で思わず絶叫してしまう。

［どうどう～今日は特に上出来だと思うのー。食べてみて感想くれると嬉しいな～］

レイコは左右に移動し、俺の肩越しに弁当を覗き込みながらそんなことを言っている。

そして、最後のパターンはとてもキレイに、おいしそうに、上手に出来ていて、一番とんでもない味がする特急ハズレ。

つまり、これだ。

そして、我が家の冷蔵庫内に、昨夜は『鶏肉』はなかった。

じゃあ、この『から揚げのようなもの』は、いったい『何揚げ』なのか。

ぞくりと、背中に悪寒と一滴の冷たい汗が走る。

二週間、週末をさっぴいて十日間のうちで弁当を作ってもらったのは八日間。

この弁当は今日で三回目。

見栄えが悪いほうは五回中一度だけ地雷が埋まっていただけで後はおいしくいただけたが、

『よく出来た。上出来だ。会心の出来だ』

とレイコが評する過去二回、ともにハズレだったのがこのパターンである。

そして、十日間のうちで作ってくれなかった二日間は、このパターンの弁当を食べたときにうまいことリアクションが出来なかったからレイコが次の日は作らないと怒ってしまったからである。

――ありがとな、レイコ。

レイコにお礼を言っておく。というよりも本当にレイコには感謝してる。

朝自分で弁当なんか作れないし、昼食にパンばかりじゃ栄養が偏るからといって弁当を作ってくれるレイコは何気に栄養のバランスも考えてくれているし。

ただし、いったいどうやって作っているのか、その手法に問題があるんだろう。

初音さんはイメージに合わないファンシーなデザインのバスケットの中のサンドイッチをほおばりながら、例によって何を言うでもなく、こっちの様子を見ていた。

小さく咳払いをして、割り箸を割る。

ゆっくりと箸を伸ばして、一番失敗しにくそうなタコ形ウィンナーをつまむ。

［どう？タコさんウィンナー！］

レイコは体を揺らして、俺が弁当を食べる瞬間を見逃さないように凝視している。

レイコが見逃さんとしているんだから、たとえ天地がひっくり返ろうが大地震が起きようがもう逃げ場はない。

出来るだけ自然に目をつぶって、タコさんウィンナーを口の中に放り込んだ。

「うん。……うま……イぃ～！」

ああ、口の中はカタストロフィ土石流。

目をつぶっていたのに、きれいな花がたくさん咲いた川原を垣間見てしまう。

しょっぱくて、えぐくて、苦くて、甘くて、辛くて、甘くて、苦くてえぐい。

ウィンナーの本来の味は口に入れた一瞬だけ。

一瞬、普通においしかったから、まさか後からこんな衝撃的な味が追いかけてくると思わなかったから！

警戒警報が発令されていたのに災害が来なかったと思って家から出たとたん大洪水にさらわれてしまったみたいなうかつさ。

飲み込んだタコさんウィンナーはのどを通った瞬間に毒蛇になって、らせん状に回転しながら食道を下り、胃の中を我が物顔でのた打ち回っている。

正直、敵を殺すのに毒薬はいらぬ。レイコのタコ形ウィンナーさえあればいい。

しかし。しかし、オトコ高柳恵助。

三度目の正直、今度こそレイコに気づかせずに食べきって見せようじゃないか！

弁当を作るうえで、前日に研いでおいてタイマーセットしてある米についてはまずハズレということはない。

一気に三個の卵焼きを口に放り込む。

ざり、と強烈な存在感を主張する卵たち。

かなりの殻が混じっているのか二度咀嚼すれば一度は殻をかんでしまう。そして味のほうは、殻をかじった瞬間に『これは溶け残りの砂糖ではないんでしょうか』といいたくなるほどそれはそれは甘口に作られていた。

このままかんでいるのはきついので口の中のすべてを使って、胃のほうへと送り込む。

自然と箸は白米をつまもうとしていたが、この後から揚げと、残り二体のタコウィンナーをしとめなければならない。

箸の軌道をずらしてサラダを片付けに入る。

そのとき、またこの近辺で起こっている学校の動物を殺して回る男のニュースが流れていた。

「怖いですね。動物たちに罪はないのに。」

「罪がない、抵抗する力もない小動物だからこそこういう下種なことをするんだろう。この手の犯行はエスカレートしやすいから、下手をしたら次は人を襲うかもしれない。まったく食事がまずくなる話だ。」

ニュースには監視カメラの映像が映し出されていた。つなぎのようなものを着た、大柄の男のようだった。

時間が時間なため、服の色や、顔などは良く映っていない。

が、なにか、男には黒い影がまとわりついているように見えた。

「あのカゲは何なんですかね。男に巻きついているように見えますけど…」

「……いったい、何の、話だ」

初音さんはこっちを見て、いつになく歯切れの悪い返事をしながら手ではよどみなくサンドイッチを口に運ぶ。

「監視カメラの映像が全体的に黒っぽいのは夜だからじゃないんですか？」

二十重さんも、あのカゲには気付いていないようだ。

まるで、鎖か蛇のように男に絡み付いて見えるカゲには。

［恵助、あれ、コッチのものじゃない？］

――やっぱりそうか。この学校のほうに近づいてきているし、今日バイトないし、今夜あたり町の散策もかねて少しコッチのほうに来てみるか。

［な、危ないよ恵助。警察も張ってるだろうし、そんなことやめなって。］

――まあ、そうなんだけど、もし幽霊関係だったなら見えない人が近づくのも危ないだろ？もし本当にただの危ない人だったなら警察に任せちゃえばいいだろうし。

［そんなこと……！］

ちくりと、再び悪意の念をぶつけられたような気がして、周囲を見渡してみる。やっぱり、どこからなのかわからなかった。

――どうかしたのか？レイコ。

［ん、なんでもないよ。］

――ならいいんだけど。

「ああ、映像が夜だからですかね。なんだか目が悪くなったみたいで。勘違いだったみたいです。」

恵助は、なはは、なんてあいまいに笑って、顔を青くしたり赤くしたり白くしたりしながら弁当の残りを平らげた。

レイコはそんな俺にところどころ怪訝な顔をしていたものの、ばれることなく何とか弁当を食べきることが出来た。

もっとも、次の時間の体育は、いつもとなんら変わりない内容だったにもかかわらず拷問のようだった。

Criminal meet with heat haze.

太陽が沈んでもう五時間強。

月は出ているが薄曇りのため月明かりはほぼ届いてこない。

「ぐ、うううう」

間接が軋む。

またこの感覚がきた。

脂汗が浮かんできて、まるで千のテグスで縛り上げられているような感覚。

「ぐがぁあああああ」

一人部屋の中でうなり声をあげるものの、声は夜の闇に溶けていくだけでいっこうに苦痛はおさまらない。

何も絡まっていないのに。何も体に巻きついていないのに。

何も、この部屋に俺を縛るものはないって言うのに、指一本動かせない。

痛い。

錆び付いて、およそモノなど切れはしないような包丁で百に刻まれているような

痛い、痛い、痛い、痛い。

千の甲殻虫に体を食まれていく様な

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

息が出来ない。

苦しい。

どれだけ苦しくても、意識が落ちることがない。

苦しい、苦しい、苦しい、苦しい。

血液内の鉄分が凝固して、肺を満たしてしまっているようだ

苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい。

まるで、体は凍り付いているように動かないくせに、ジクジクとゆっくり外側から焼け焦げていくようだ。

［いたいのか？くるしいのか？］

この部屋には誰もいない。俺一人しかいないのに、誰かの声が響いてくる。

「――――、――――――――！」

助けてくれと叫んでみたが、もう、うなり声も出ない。

助けてほしい。

誰でも良いから、何でもするからこんなに苦しいのはいやだ。

［助けてほしいのか？］

「――――――――――――！」

助けてくれ！

［それじゃあお前は俺に貸してくれるのか？］

何でもいい。何でもいいからこの痛みを何とかしてくれ。

［わかったわかった。お前は誰だ］

俺は、俺は、高田…明正だ

［そうか。それなら仕方がない。仕方がないよなぁ～。これで契約が完了しちまったんだからなぁ］

ふわりと、頭の上に黒い塊が浮いた気がした。

塊は陽炎のようにゆれたかとおもうと、影には弓のような穴が三つ開いた。

それはまるで自分の欲しかったものをやっと奪い取った時に浮べるような、品のない厭らしい笑顔のようだった。

／

夜。

十二時を回ってしばらくたっていた。

恵助は引越しのときの荷物の残りから、鬼姉こと撫子に、いざというとき用に買わされた『対悪性霊便利グッズ七点セット』というのが入ったポーチを取り出した。

［恵助、これは何なの？］

「ああ、これは悪性概念しか持たなくなった霊が出たとき、それをあるべきところに強制的に送り返すっていうことが出来る道具らしい。」

［悪性概念って何なの？］

「簡単に言うと、霊になるってことは何か強い心残り、もしくは現世に強い欲望があるときだろ？それで、生きているときに愉快犯的に人を殺したり、動物を殺したりしていると、死んだときにそれのみ欲求する悪性の霊になることがあるんだよ。レイコみたいに話が通じなくなって、動物や人を殺すことを第一最優先事項として、殺すためだけに、殺すために何かをする、みたいに概念化してしちゃうってわけだ。当然、普通の人には見ることも出来ないし、下手をすれば憑依されてしまったりすることもある。」

「なるほろ、じゃあ今日見たあの犯人は、それに憑依されている可能性があるわけね」

「そういうこと。実際に憑依されていたら周囲も憑依された本人も大変なことになるし、そもそも多くの霊は早い段階で概念化して和解が成立しにくいから多少無理やりにでもあっちの世界への船に乗せて、海に出させるってことかな。」

そんなことをいいながら、一度も振り返らずに恵助はポーチの中身を確認しだした。

――つまりそれは。

レイコは、ふわりと浮かんで一歩分だけ恵助から離れた。

――もし私がいつか概念化してしまって。

自分の体を抱いて、うつむいた。

――誰かを傷つけたりしてしまったときには。

私が、

――もし、恵助を認識できないくらいになってしまったときには。

恵助は、

――私が恵助を傷つけてしまったときには。

私のことも、浄霊しようと思うのだろうか。

「うっわ！」

もう一度だけ、後ろに下がろうとした瞬間、恵助は急に変な声を張り上げた。

［ひゃっ］

心中を読み取られた気がして思わずコッチまで変な声を出してしまった。

そう、そんなことないんだから、馬鹿なこと考えるのはよそう。

［な～によ、恵助急にへんな声出して～！びっくりしたじゃない。］

よし。

いつもの私だ。

「だってこれ見ろよ、このセット姉貴に…撫子っていうんだけど、結構高値で『買わされた』んだけど、七点セットうたっていて中に入ってるのはこれだけなんだから」

恵助の肩越しにポーチの中を覗き込むと、そこに入っていたのはうっすら青く見えるほど白い一本のハリセンと、一枚の手紙だけだった。

「え～と、『恵助みたいな未熟者に七点セット全部与えたら調子に乗って何しでかすかわからないから、危ない霊に挑まないようにハリセンだけ入れておくから。ていうか、今このポーチの中を見ているってことは図星でしょう馬鹿！やめなさい馬鹿！危ないでしょ馬鹿！そんなことしたら後でどうなるかわかっているでしょうね♪後の六つは気が向いたら…もとい、恵助が上達したら売ってあげないでもないわよ～。ひとつあたり今回と同じ二万円で。ちなみに値上げはあっても値下げはなしよ。じゃあ、馬鹿なことしないでお風呂に入って早く寝なさいね。風邪ひかないように。』だってさ。」

恵助はひらりと手紙をポーチの中に投げ入れた。

一言でいうなら、恵助の姉さんはすごい人だ。
恵助がこのポーチを開くときがどんなときなのかちゃんと知っているし、この手紙の書きくち。
下手をしたら『パンがなければその辺りに生えている草にマヨネーズをかけて食べればいいんじゃない？』とかいいそうなかんじ。

［すごいね。なんか、なぜか気が合いそうな気がする。］
私の言葉はまったくの予想外だったのか、陸に上がった鯉みたいに、面白い顔で空気をまぐまぐと食べた後、恵助は［絶対に二人は会わせられないな。いろんな意味で。］なんて苦笑いの奥で考えていたけれど、丸聴こえだった。

［で、高柳恵助君。姉上さんの高柳撫子さんがこのように言ってらっしゃるんだけど、危ないから本当にやめる気はないの？］
「確かに危ないけど、でもさ、気付いちゃっただろ。もしかしたら、霊に取り憑かれちゃっているかもしれないってさ。それならやらなきゃな。だって犯人が被害者かもしれないって気付いたのは俺たちだけなんだしさ。」
［はいはーい！ケースケー、俺たちって、私も入ってるんですカー？霊体同士は干渉できて、私も正直危ないには違いないんですケド…］

「じゃあ、たとえば、これから行く先はもしかしたら危ないかもしれない。だからここで待っていてくれって頼んだら、レイコは待っていてくれるのかい？」

ぴんと指を立てて、なんて返事をするのかわかりきった笑顔で、ケースケのやつはそんなことをいってきた。

［この…っ！意地悪ね。たとえば、私が危ないなら行くのをやめるわ。気をつけて一人で行ってらっしゃいといったら怖くて足とかが震えだして、行くのをやめるって言い出すくせに。］

「ばれたか。でも、レイコがどんなやつなのかもう知っているつもりだし、これでも女の子一人暴漢から守るくらいは出来るつもりだよ。」

なんて、恥ずかしげもなく臭いセリフをはいてきた。

まぶしいものを見るように、少しだけ、レイコは目を細めた。

ただだ。

恵助はまた、私のことを『そう』呼んだ。

ばかみたい。

本当に、ばか、みたい。

まったく、何回言ってもぜんぜんわかっていないじゃない。

まったく、霊の怖さも知らないでのんきな事を言って。

だから、私も待っていることなんて出来ないじゃない。

この馬鹿でお人よしの、それで大馬鹿で後先考えないお人よしの、そのうえ愚直としか言いようのない馬鹿正直のお人よしを一人で行かせるなんて。

「何を妙な顔してるんだよ」

恵助はすぐ近くまで顔を寄せ、覗き込むように見上げてきた。

［別に。あんまり臭いセリフをはくもんだから呆れ果てていただけ。］

くるくると旋回しながらレイコは浮かび上がり。

［こんなむさい部屋に待ちぼうけ食らうくらいなら、多少危険でもスパイシーな冒険についていってあげようじゃない。これでも、暴漢からお人よしの男の子一人くらいなら守ってあげられるしね～］

レイコは恵助がしたように指をピンと伸ばして、しかし意地悪な笑みを浮べた。

［言ってくれる。］

［早いところ済ませて明日はオカピを観に、もとい、記憶を探しに動物園へ行かなきゃなんだから］

「まあ、それはそれでいいか。」

［ほー、その約束、破ったらひどいからね～］

「あー、普通に悪性霊よりこわいし」

［馬鹿ね。］

恵助はハリセンを学生鞄に詰め、しっかりと背負い込んだ。玄関を開けるとフィルターがかかったように暗かった風景に月明かりがカーテンのように下りてきていた。

「じゃあ、行こうか。」

［うん］

静まり返った闇に階段を駆け下りる軽い金属音が響く。
しかしそれは決して重たいものではなかった。

／

二十重が指を鳴らすと、『通信』は途切れた。

「二十重。」

「な～に？初音」

「わかっているだろうが」

「なんのことかしら」

「さすがにやりすぎな気がしないか、といっているんだ。」

「ううん、なにが『やりすぎ』なのかしら～」

『通信機』を前にして二十重はピクリとも動かず、心中を察することが出来ない微笑を浮べ続けている。

「ふう、まあいい。本当に二十重が言ったとおりになったな」

信じたくは無い。

「やっぱりね。むしろ初音が恵助君の様子がおかしかったことに気付かなかったのが不思議なくらいなんだけれど」

「…私だって、そういうときくらいある。ところで本当に行くのか？」

いや、本当は気付いていた。

「ええ、恵助君『たち』が行くといっているんだから、どうあっても行くしかないでしょ」

初めて雪が降った朝を迎えた子供のように無邪気に微笑む二十重を尻目に初音はわずかに強くパソコンを抱きしめ、目を泳がせた。

「これから会うかもしれない霊が悪性かもしれないと聞いて尚？」

かもしれないではなく、悪性の霊はいるのだ。

「もちろん。」

もう一度二十重が指を鳴らすと、二十重の部屋の中に何人かの男たちが入ってきて、『通信機』を持ち、髭を蓄えた一番体格のいい男一人を残して部屋を後にした。

「ありがとうございました。では、橘はいざという時に備えていてください。私は初音と一緒に先に行っていますから。」

「かしこまりましたお嬢様。では、タイミングはお嬢様にお任せしますので、危険を感じたときには迷わず直ぐにお呼びください。」

「わかりました。」

橘と呼ばれた髭男が一礼して部屋を出た後、二十重は引き出しから

ひとつのメガネと、真っ黒なリボンを取り出し、ジャケットの裏にしまいこんだ。

「…仮に、私が行かないといってもか？」

あの時、気のせいだと思っていたけれど、見えてしまったから。

「もちろん。」

二十重のまったく迷いが無い強い光をともした双眸は初めて会ったときのそれのようだ。

その眼をしているときはどれだけ説得しても折れないことは、もう、思い知っている。

「それなら私も一緒に行こう。ただし、二十重が危なくなったときには直ぐに橘さんに連絡をすることが条件だ。」

そして、それを高柳は見えたといっていた。私と同じ、まるで囚人を拘束する鎖のように巻きついた影を。

「違うよ。初音と恵助君が危なくなったときも直ぐに連絡するの。」

目を細めた初音は軽くかぶりを振った。

「わくわくして浮き足立った二十重と、あまり武道の心得がなさそうな高柳が不覚を取ることはあっても、今日の私がたかだか包丁を数本持った程度の暴漢一人くらいに不覚を取ることはない。彼の言

葉を借りるなら、『暴漢十人程度からなら二十重を守りきることくらい出来る』さ」

霊などと信じていないし、仮に、それこそ仮にいたところでそんなものは精神世界にのみ存在する神や悪魔のようなものにしか過ぎない。

馬鹿らしい。

私は今まで自分の力をそんな非科学的な精神論のようなものに劣ると思ったことは一度だってない。

そんなものが、この私がついていくというのに二十重に危害を加えられるはずが無い。

気高い黒豹のように凛と鋭く、そのくせ、霧を払うすがすがしい朝日が映りこんだ泉のように澄んだ迷いの無い初音の瞳。

「よかった気のせいみたいね。」

「いったいなんのことだ？早く行かないと高柳に先を越されてしまう。」

「そうね。いきましょうか」

時刻は深夜零時四十一分。

二十重は軽い足取りで、初音はしっかりとやや二十重の右後ろの位置をキープして。二人は松下邸を後にした。

同化

最近の動物虐殺事件のせいか、小日向小学校の校門にはしっかりと鍵がかけられていた。

明正はぐるりと小学校を一周した後、再び校門前に移動し、錆び付いた包丁で薙いだ。

轟、というすさまじい音とともに、校門はひしゃげ、頼りない軋みとともに人一人通れるほどの隙間が出来上がる。

「か、かかかか、かかかかかかかかっ」

閉まりのない口の端から漏れる生ぬるい吐息と共に、地獄の軍団長のように禍々しい笑い声がこぼれた。

体の調子はいい。

シンクロの具合もいい。

ふらふらと校門の隙間を通り抜けようとしたとき、明正はひしゃげた鉄棒に足を引っ掛けて勢いよく倒れこんだ。

「かかかかかかかか」

じゃり、と口に入った砂をかじり、転んだことなど歯牙にもかけずひとしきり笑い転げて顔を上げると、紺色の飼育網に囲まれたウサギと、仕切りを立てた隣に丸くなっている鶏たちがいた。

鶏は鳥目だから逃げてくれない。
少しつまらないから前菜代わりだ。ウサギは後だ。

錠前に衝撃波を飛ばして吹き飛ばす。
音に驚いたのかウサギたちは飼育小屋の隅のほうへ移動してまるで大きな雪団子のようになっていた。

「ひゅ、」

鶏どもを薙ぐ。

噴水のように血を吹き上げ、はじめに頭を切り落とした鶏は飼育箱内を走り回り、痙攣して倒れた。
見えはしないだろうに、危険を察知したほかの鶏たちも大きく羽ばたいたり走り回り始める。

「や、っとと、おお、おおおもしろろくなて、きききた。」

羽をむしる。
突く。
薙ぐ。
えぐる。
殴る。

蹴る。
耳を切り落とす。
撥ねて逃げようとした足を切り落とし、勢いあまって転ぶ姿を、わが子が自転車に乗りこなせなくて転ぶ姿を見るようにいとおしげに見る。
気分がいい。
白い毛皮はその瞳よりも赤黒く染まる。
今、こいつらの生殺与奪は俺の気分しだい。
その小刻みに揺らした鼻はもう敵を察知するためではなく、土に転がりシミを作るためだけに存在し。
俺は今、確かにこいつらの絶対の神なのだから。
その赤瞳は砂を満遍なくまぶしながら、何も見えなくなった自分の足で転がすために存在する。

「ひゅ。」

すべての鶏たちをただの肉塊に変え。
すべてのウサギたちをただのたんぱく質のオブジェに変え。
あるものはつるし、あるものはそのままに、あるウサギだったものはうまく皮をはいで、鶏だった肉塊にかぶせてみたりした。

流れ出た大量の血で、今までの血で錆び付きかけた包丁を研ぐ。
ひとしきり子供たちの憩いの園を、恐怖の、狂気の園に変化させた。
「かか、かカカカカカカかっかかかかッカカかかかかか」
手に、服に、顔に、体に、赤黒い液体を満遍なく浴びて。明正は高らかに笑った。
程なく、まるでスポンジが吸い上げていくように、明正の体に付いた血は体に吸い込まれていき、包丁にべったりと付いた血以外はどこにも、綺麗さっぱりなくなってしまった。

［おい、そろそろ行こうぜ。ここにはもう何も無いんだからよぉ。］

「あああわかかってるる」
背骨が体の中心から体の端に寄ってしまったように体をくねらせ、たたらを踏みながら明正は破壊した小日向小学校の校門を後にし、道一本挟んで向かい合っている、小日向高校校庭につながる裏門を切り裂いて破壊した。

［ああ、昔は学校なんて存在がうざったかったが…今は、いい気分だ。薄い緑のライトに照らし出される宝箱みてぇなもんだからなぁ。本当に、いい気分だ。］

「ああ、アあアア、渇くククく」

［あせんなって。今ここでお前が『使いすぎ』でダウンしちまったら元も子もねーんだ。そろそろ節約して行けや］

「ああ、うあ」

担いでいる作業用かばんからクラフトテープを取り出し、校舎、特別棟の窓に無造作に貼り付け、ガラスを殴り割り、音を出さずにテープをはがして鍵を開けた。

常春の夜。

昼間の名残の酷く優しい暖かさは、墓石のように凍てついた校舎にあいた暗い穴に吸い込まれていく。

転がり込むように窓から侵入する。

あと少し。

あと少しで同化できる。

再び、黒い炎のような影が明正の背後に浮かび上がる。

影から伸びる糸のようなものは明正の四肢に深く絡みつき、まるで、傀儡師と傀儡人形のようだった。

／

恵助たちは小日向高校の裏門側にたどり着いた。
そこは、見慣れた通学路とは大きくかけ離れたものだった。

隣にある小日向小学校の校門が、そして高校の裏門が何か圧倒的な力で切り裂かれている。

霊気が、線のように小日向高校の裏門からここまでつながっている。
もし高校に行ってからここに進入したとすれば、今まだここにいるのかもしれない。

つまり容易に惨状を想像できる。

今まで、小学校が襲われたときには必ず小動物が殺されているんだから。

学生かばんからハリセンを取り出す。

「レイコ、ここで後ろから誰かこないかしっかり見ていてくれ。コッチには来なくていいからな」

もしかしたら目の前にウサギや鶏の死体があるかもしれないんだから女の子に見せるわけにはいかない。

しっかりと強めの口調で念を押すと、レイコはコクリと頷いた。

不意に霊障を受けないようにゆっくりと息を吸い込んで、霊感を鈍化させる。

今度はゆっくりと息を吐き出して、緊張を無理やりねじ伏せる。

ちょうど人一人分ほどの校門を抜けると直ぐ、散々暴力の限りを尽くした後がしっかりと残されていた。

「う…あ」

わかっていたけれどそれはとてつもない光景だった。

月明かりが曇ってくれたおかげでしっかりと見えなかったことがせめてもの救いか、鶏だったもの、ウサギだったものは見せ付けるようにつるされていたり、切り裂かれていたりするのだ。

空気は、饐えたような、生臭い鉄のにおいに満たされ、その濃厚で重い空気はひとたび吸い込んだ瞬間に、食道に附着し、塞いでしまうのではないかというほどである。

胸にどす黒い泥の渦巻きのようなものが生まれる。駆け上がってきそうになるそれを、口を押さえてなんとかこらえる。

もう一度、ゆっくりと息を吸い込んで、周りを見渡してみてもここは事後現場らしく、誰かがいそうな気配はまったく無かった。

［恵助～あのね、日本では来るなっていうのは来ても良いよってことなんだよ～だ。ジュワッ］

校門の外で一人待つのが退屈になったのか、レイコはそんなことを言いながら門の上を跳び越してコッチに来た。

「バカッ！来るな！」

［馬鹿とはなによ馬鹿とは！世間的には馬鹿って言ったほうが馬鹿とされてるんだから］

そんな場違いなことを言っているレイコの前に手を伸ばして視界をふさぐ。

［何をやってるの？何かあったりするわけ？］

レイコは体を傾けて向こうを覗こうとする。

恵助もそれに合わせて体を傾けて、また視界をふさぐ。

「何も無いし、ここには誰もいないみたいだから小日向高校のほうを見に行くぞ」

［それはそれでいいんだけど、ここに何があるのかだけ見せてよ］

「何も無いって言ってるだろ！少なくとも、ここに女の子が見るべきものは何も無いつーの！」

［そう、なんだ。ふーん……ところで、恵助くぅん。］

口元に人差し指を当てて、急にレイコは上目遣いになり、熱のこもったような声を上げて体をもじもじと揺らし始めた。

「何だよ急に。ダメなものはダメだって。早いところいかないと何が起こるかわからないだろ！」

［けぇ～すけ～、うぅ～ん］

軽く口をすぼめて、目をつぶって、レイコは顔を恵助に寄せた。

「おい！って、え？何だよ急に？あ、あああって、レイコってば」

［ん～～］

どんどん顔が近づいてくる。

二十センチ、
十五センチ、
十センチ。

「まてまてまて～！訳がわからないぞ」

［女の子に恥をかかせるつもりなの？］

七センチ。

「そんなことといったって」

五センチ。
すぐそこに、レイコの唇が来ている。

「あー！わかったよ。」

恵助も目をつぶったとき、レイコはすっと恵助の体をすり抜けた。

「ああ、おい！待っ……」

［まったく初心なんだから。さーて、いったい何が……きゃあああああああああああ］

恵助がレイコの目をふさぐよりも早く、この惨状を目撃したレイコは恵助の肩につかまり、頭を恵助の胸に押し付けて小刻みに震えて

いた。

「悪い。……はじめからはっきりといっておくべきだったな。」

恵助はそのままレイコの頭をなでて、静かに眼を閉じた。

そうだった。自分で言っていたくせに、まったくわかっていなかったんだから。

レイコがいったとおり俺は大馬鹿だった。本当にどうしようもない。

残った手で、顔を押さえて空を見上げた。家を出たときに出ていたように思った月は、厚く大きな雲に隠れて今は見えもしない。

「レイコ……やっぱりお前帰れ。」

小さく、低い声でゆっくりと。その声には苦渋の響きが含まれていたが、まったくの無表情で恵助は言い放った。

「え？……けい、すけ？」

見上げてきたレイコの瞳が揺れた。声も少しだけ裏返っている。

「帰れって言ったんだ。こんなただの動物の死体を見ただけで参っちまうようなら邪魔になるだけだって言ってんだよ」

きゅっ、と少しだけ強くレイコの指が肩に食い込んだ。

「聞こえなかったのか？何度だって言ってやる。邪魔だからすぐに帰って待ってろって言ったんだ！」

自分でもそんなつもりは無かったのに、これじゃただレイコに怒鳴っているみたいだ。

初めて俺が大きな声を出したからなのか、レイコは体を大きく痙攣させて、肩に捕まっていた手を離した。

［恵助…本気で言ってるの？］

「あったりまえだろ！だいたいただでさえ悪性霊なんて厄介なのに、お前みたいな邪魔者までいたらホントに俺がこの動物みたいに殺されちまうってんだ！」

レイコは世界のすべてから孤立してしまったみたいに像が薄くなって、二、三歩分後ろに下がっていった。

レイコの様子を見ていられない。

この事件に首をつっこんだのも、ここまでレイコを引っ張ってきたのも、ましてレイコがこの状況を見てしまったのも俺が、俺がすべて悪いって言うのに。

追い討ちみたいなことを言ってさらにレイコを悲しませているんだから。

恵助はレイコに背を向けた。

「じゃーな」

俺が悪いことなんてわかってる。でも、今だけはこれが正しいんだって自分を無理やり納得させる。

［何…よ！なによ！ついて来てくれっていったかと思ったら、邪魔だから帰れですって？ふざけないでよ！いったい何様のつもりなのよ！言われなくたって帰るわよ。一人だったから殺されちゃいましたなんてことにならないように、せいぜい気をつけることね］

背中に浴びせかけられるレイコの言葉に足も止めずに恵助は校門を抜け、いっきに霊気をたどって高校の校舎へと走っていった。

［恵助の大馬鹿ヤロー！］

手を突っ張って、小さくなって見えなくなった恵助に思いっきり怒鳴りつける。

はぁはぁと肩で息をして、少し呼吸が落ち着いてきたころ、レイコは一気に空に浮かび上がり、アパートの部屋とは真逆の方向へと目を向けた。

つまり、小日向高校の方向にである。

［知らない。あいつがそう来るなら私だって好きなようにさせても

らうからいいもんねーだ！誰が言われたとおりになんてなるもんですか！」

空中で一人地団駄を踏んでから、校門側へ回り込んでみると、そこには見覚えのある二人がいた。

［あれは……］

やや不機嫌ながら、意地悪な笑みを浮べてその場で二回転半旋回する。

［あいつが必要ないって言ったって、霊感が無い二人に私がついていくのは私の勝手だもんね］

レイコは高度を落とし、鍵を開けて正門、職員玄関から校舎内に入ろうとしている二十重と初音のすぐ後ろにくっついた。

／

「うわー…なんでまた、人間は夜の校舎を緑色のライトで照らそうと考えたかな」

特別棟へと霊気を追いかけてくると、ひとつの窓が破られているところを見つけた。

昼間の、あるものは高い志を持って勉強しに、あるものは嫌々ながら仕方なく学校のシステムへの怨嗟を飲み込んで勉強しに、あるものは内に秘めた想いを想い人に告げに、もしくは告げられずに葛藤に流されながらすごす、良くも悪くも我らが学び舎は、色気の無い地獄の釜のそこのように禍々しい雰囲気で満たされている。

「不気味ッたらない」

窓に飛びついて校舎に侵入する。

もし普通にガラスを割って進入してくれたなら警報装置に引っ掛かったりガラスが割れる音を聞きつけた近所の人に通報されたりしただろうに、中途半端に気が利くというか…前科もちの霊なのかもしれない。

特別棟二階へとつながっている霊気を確認してから改めて霊感のスイッチを鈍化へと入れなおす。

ハリセンを二、三度振って、使えることを確認する。

姉貴曰く。

このハリセンは人間にはただのボケ担当への突っ込み用アイテムで、霊体には一発で、『余地』のあるものにはすばらしき慈悲の神の導き手のようにアッチ側への扉を開き、そのものを縛る鎖を解き放つ力を持ち、そうでないものは現世にとどまろうとしがみつく腕を切り裂き、踏ん張る足を砕き折り、杭を引っこ抜き、強制的に叩き堕とす、アッチ側への強制連行片道切符だという。

さらに、タイミングさえ合えば敵の悪意の塊を飛ばされたときにそれを防いだりも出来るということらしい。

「要は最高のタイミングで霊体の方をブッ叩けって事、だよな」

ひとつ半深呼吸をして一気に階段を駆け上がる。

階段を駆け上がったとき、正面の渡り廊下に見えたのは薄暗闇に、まるで傀儡のようにふわふわゆれながら渡り廊下を進む繋ぎを着た一人の男だった。

／

［おいおいおいおい。ここまできて後ろにいるやつはいったい何なんだ？もうあんまり力が残って無いって言うのによぉ］

ちょうど明正が立っているところは渡り廊下を渡りきるところだった。

「な、ナななにがが、どういい、イウコッこっととと」

頭を小刻みに振りながら、緩慢な体の動きでやっと振り向くと、そこには一見華奢に見えるハリセンを持った青年が立っていた。

「どうすスレスればばいいあああ」

［お前が手に持っているものは何だ？］

手元を見てみるともう、柄の部分の木から根が伸び、手に食い込んで体の一部になってしまっているように一体感のある血塗られた包丁があった。

「ほう、ちう」

［そうだ。包丁だぜ？じゃあそれはいったい何のためにあるか知ってるか？］

「りょ、りょううううりいぃ」

［違う。もっと簡単なことだ］

「あぐぅう？」

［切るためだ。斬るためだ。つまり、殺すためにあるんだゼェ］

「う、うううううぶうううう？ころ、コロスゥ？」

影の言葉に反応して、めちゃくちゃに明正は包丁を振るった。当然、まだまだ十メートルほど先にいる恵助にあたるわけが無い。

［おい、落ち着け！……やっぱりいい加減やべぇか。］

明正の背後に浮かぶ影には定期的にノイズのようなゆれが起こっていた。

「あああぁぐうううああぁ」

［やべぇ！血が、切れる！］

明正が、ひときわ大きく体を痙攣させて崩れ落ちた。

脳がセーブする力を影が取っ払っているために、体を起こそうと体をよじる筋肉の力だけで背骨が軋む。

「アアアアあああああああああアアあああアアアアあ」

包丁を持つ右手を突っ張って、無駄に空を切り裂き、左手は体を掻き毟り、指を体に食い込ませていたずらに血を流し始める。

「拒絶反応、か？ここしかない！」

恵助は一瞬気おされていたが、霊と男のシンクロに乱れが出たのを見逃さずに一気にハリセンを振り上げて駆け寄った。

振り上げられたハリセンは薄ぼんやりと光を放ち、暗い闇に軌跡を残している。

［なんだ？あれは……やべぇ！ただのハリセンじゃねぇぞ］

「や、ばいイイぃいい」

［おい明正、思いっきり包丁を振りやがれぇ！今すぐにだ］

「あ、うぉあああああ」

無理やり影は明正の腕に自分を食い込ませ、大振りで一薙ぎ。

薙いだ包丁からは校門などを切り裂いたときよりずっと小さな衝撃波が飛んだ。

体制が悪かったので、衝撃波を放った明正自身も激しく回転しながら渡り廊下の先へと吹き飛ばされ、勢いあまって左腕が掃除用具の入ったロッカーにぶつかり、吹き飛ばされた勢いは殺したものの鈍い音を立てた。

「アガ、おお、折れ、オレ、折れたアアあ」

［うるせぇよ！今は痛くねぇだろーが！俺様に貸して少し黙りやがれ］

そんなやり取りしている影と明正。

一方恵助に向かうは、空気を切り裂く耳鳴りを伴う轟音と衝撃波。

見えない、視ることが出来ないそれだったが、進むと同時に振動で渡り廊下のガラスを次々に割っていたためにタイミングを合わせ、恵助はハリセンの一撃でそれを弾き飛ばした。

［なにぃいいいいいい！］

明正のダメージで『明正自身』が弱まったのか、『アキマサ』はずるずると体を引きずりながら起き上がることができた。

しかし、衝撃波を弾き飛ばした痺れが解ける数秒の間だけの静止で再び恵助は明正へと走り出す。

［やべぇ！やべぇやべぇやべぇやべぇ！どうするどうするどうする？あと少しだって言うのによぉ］

立ち上がろうと左手を突いて起き上がろうとしたが、力なく腕は折れ曲がりまた転がって仰向けになってしまった。

［アアあああああああああああああああ！］

仰向けに倒れたまま上を見ると、すぐそこにハリセンを持ったガキ

は近づいてきている。

もう衝撃波を放つほどの支配力は残っていない。
次にさっきと同じくらいの力を出しちまったら、支配が解けて俺様自身の維持も難しい。

何か、この状況を何とかできるものはないか周囲を見渡す。
転がっているのはロッカーからぶちまけて転がっているほうきとモップ。手も届かない上に使えもしない。

足音が近づいてくる。

後数秒で送られちまいそうだ。

「いつまでもしがみついてないで、早いところあるべきところに還れ！」

頭の上でガキのそんな声が聞こえた。

クソッ！クソックソッ！こんなところで！ここまで来て邪魔されてだめになるなんてクッソヤローがぁぁ！

声のしたほうを身のうちにある総ての恨みをこめて睨み付ける。

と、唐突に状況を打破するものが見えた。

［アアアアアアアアアアアアアア！あっったぜぇ！神様とやらがいたならまだ俺様の味方だったみたいだぜぇ！］

まっすぐ上、渡り廊下と校舎側のちょうど間のところに、収束した微弱な念動力を放つ。

そこには地震や大規模な火事などが起こったときに被害の拡大などを防ぐために設置されているシャッターがある。

イメージする。

巨大な手のひらでシャッターをつかみ、引き摺り下ろしてふたを閉じる。

空間を分断する。

あの、存在の危機を、恐怖を遠ざける。

［っらあああああああ！閉まれぇコラァ！］

ガリガリとコンクリートと鉄がこすれる音が、危機が接近する音を掻き消した。

眼を見開いて『敵』が見えなくなるさまを凝視する。

予想外の出来事に眼を見開いて、敵はさらに走るスピードを上げようとしていたみたいだったが、直ぐに顔が見えなくなる。

間に合うわけがねーだろうが。自然と口元が緩む。

腰まで隠れ、シャッターが閉まりきった直後、その向こう側に敵がぶつかった音がした。

「くそっ！上の渡り廊下から回るしかないか！」

一度シャッターを殴りつけ、恵助は直ぐにきびすを返して走り出した。

［くはっ、ぐかはははっ］

ぶるぶると体中を揺らし、何とか体を起こす。どうやら『明正自身』は限りなく弱まったらしい。今の影が操る『アキマサ』でも動くことができるようだ。

地面を這いずる足のもげた羽蟻のように、転がるモップへと近づき、柄をへし折って破ったつなぎで腕に縛りつけ固定する。

［あのヤロー、クソッ！俺様をここまで苦労させやがって！ブッ殺

す！必ず殺す！苦しめて苦しめて地獄の底まで苦しめて然る後に殺してミンチにして霊魂引っ剥がしてまた殺してやるぅぅ」

壁に体を押し付け、何とか立ち上がる。

後は階段をひとつ上がるだけだ。そうすれば、アレがある。それさえ手に入れちまえば。

体を揺らしながらやっと階段を上りきった。転びそうになって何とか開かずの間の扉にぶつかって倒れこまずにすんだ。

また、念動力を絞って錠前を破壊する。

わかる。

直ぐそこで俺様を呼んでいる。

くそ狭い道を、導かれるように抜け。

山のように積み上げられているガラクタをどかして小さな箱を掘り起こす。

箱を開くと、薄ぼんやりと目標の小瓶が光を放っていた。

「ついに、ついに見つけたぁっ。」

座り込んだまま天井を仰いでオオとも、ゴオとも聞こえる雄たけびを上げてから、アキマサは二つある瑠璃色をした小瓶の片方の中身

を飲み干した。

アキマサは三度ほど、大きく体を痙攣させる。

痙攣させるたびに、まるで、皮膚の下を虫か何かが這いずり回っているように血管や肉がうねり、体が一回り大きくなっていく。

そしてまるで、アキマサの眼窩がなくなっているように見えるほど瞳孔が開き、白目がなくなっていった。

［はぁあああああああああああ］

ノーモーションで浮かび、立ち上がる。

［気分がいい。やっとひとつになれたんだからなぁ。］

［で、俺様をてこずらせたやつを殺すんだろ？］

［そうだな。でも、その前にこの学校内に進入したやつらがいる。］

［そうか。そいつらを殺して血をすってから、全力でブチ殺すんだな？］

［ああ。そうしよう。］

［俺様もそうするつもりだぁ］

ぶつぶつと自分同士でそんなことを言った後、アキマサは開かずの間を飛び出した。

死活問題

一階の職員玄関の鍵を開け、いやに冷たい空気の校舎内に入ると、自分たちの存在がこの空間に拒絶されているような、ここにいてはいけないようなささやかな違和感を覚えた。

「二十重、ここはなにか、おかしくないか？」

初音はいぶかしげに、念入りに周囲を見渡してみた。
しかし、これといって昼間と異なるところは見当たらない。

「もう、夜の学校って言ったら幽霊の聖地！何か出そうな雰囲気がして当たり前じゃない～」

まるで、歌っているようにひとつトーンの高い返事が返ってきた。
初音は、夜の学校だという点において起こった、自分のその非科学的な精神のゆれを否定すべくかぶりを振る。

「否。もとは、幽霊や神、悪魔という概念は未知のものに恐怖し、知らぬということを恐怖する人間が、未知への恐怖でなく既知の対象への恐怖にしようとした、つまりかりそめの言葉を作ってそれをあがめ、もしくは恐怖の対象として作り上げたものだと推測する。自然の災害を神の怒りとたとえたり、突発的な不慮の事故によって若くして亡くなってしまう様を死神に連れて行かれてしまったのだと考えたりするようにだ。」

まくし立てる様に放たれた、やや熱の入った初音の言葉は、渡り廊下の先の先、図書館のほうまで響き渡っているだろう。

一呼吸おいて小さく息を吸い込み、闇に浮かび上がる白い指でメガネをズリ上げ、ゆっくりと息を吐き出す。

そんな初音の様子を、嬉しそうに目を細めて見つめた後、二十重はゆっくりと階段を上り始めた。

特に理由はなかったが、とりあえず夜の小日向高校において、幽霊を目撃するために真っ先に向かうべき場所は、その卓越した『直感』により、馴染み深い『開かずの間』をおいて他に無い気がしたためである。

「そうかもしれないわね。でも、たとえば一般的に有名な気功師などは眼に見えない気をもってして治療を行うでしょ？暗示なのではないかという人もいるけれど、まだ生後間もない赤ん坊の手足を気功によって持ち上げたりする様を見ると、それは確かに其処に在るように見える…」

「それはっ！サーモグラフィーなどで科学的に分析できる部分があり……」

珍しく、二十重の言葉にかぶせて初音は言葉を繰り出した。

二十重は小さく頷いて、初音の言葉が切れたのを確認してゆっくりと再び口を開いた。

「そう。針治療などにおいては、その技能習得過程で陰陽道にかじる知識、気の知識を学ぶことが一般的なの。つまり認められている

ってことよね、その、ある意味非科学的な精神論が。それと、二十一グラム。人が死んだとされる時に、肉体がそれだけ軽くなるんだって聞いたことがあるでしょ？」

「ああ。」

会話が進む間の二十重の足取りは酷く軽い。

対して、初音はこれ以上階段を上ることを本能的に拒絶し、そしてその自分の第六感を信じてしまいたくなる今の精神状態こそ、今まで経験したことのない異常に思える。

「体に、その瞬間に欠損はなくても、確かに二十一グラム減っている。さて、何が減っているのかしら？いろいろあるかもしれないけれど、一般的には魂魄だと想像できるわね。」

もはや、ただただ二十重の言葉を聞くことしかできない。

何か、否定できない理由がこの空間には在る気がする。

「体から出た『それ』が、空気中において霧散するのか、別の形態をとるのか、もしくは何か、新しく出来上がった生命体の器に入るのか、天に向かうのか、地の底に行くのか。それはわからないし、また、世界はそれを完璧に知ろうとしないかもしれない。知ったとしても、世界の均衡を、既存の『常識』を、『宗教』を、『人間自身』を、そして『人権』を守るために事実を黙殺するかもしれない。」

四階の開かずの間まであと少し。
二十重は三階と四階の間の渡り廊下でやや後ろをついてきている初音のほうへ、軽いステップで振り向く。
「だからこそ、知りたいと思うじゃない！私は、『世界』ではなくて、『松下二十重』なんだから！」

少しだけ、雲の合間から月が出たらしい。
渡り廊下の窓からわずかばかり差し込んできた青い光の中、手を広げてそういいきった二十重の姿は、『世界』を顕現したようにひどく遠く、限りなく大きく見えた気がした。
「……怖いな。」
口の中だけで初音はつぶやいた。
「なに？」
二十重にはどうやら聞こえなかったらしい。
その表情は、今更ながら、少し自分の言ったことが恥ずかしかったのか、照れ隠しのようなはにかんだ笑みを浮かべている。
「それなら、早く行かなきゃならないだろう、と言ったんだ。」
初音は初めて、二十重を追い越して階段を上りきった。ついて来る二十重を見つめて、ふと開かずの間へと視線を泳がせたとき、そこには、いつか見た、つなぎを来た『何か』が立っていた。

息が詰まる。
一気に冷たい汗が浮かんでくる。

『何か』が、手に持っているのは血塗られている包丁一本のみ。

しかし、相手は人間では、ない。

同じ月の光を浴びているにもかかわらず、先ほどの二十重とはまったくの別物だ。

手からノートパソコンを取り落としてしまった。
軽い金属とコンクリートがぶつかり合う音が、酷く場違いで滑稽に聞こえた。

全身全霊の嫌な直感は、こいつとの遭遇を知らせていたのだ。この、絶対的な人外との対峙を。

「あらあら〜、どなた様？」

二十重はたまに出る大ボケをかまし、当然のごとくアレは見えていないようだ。

［そこの長い黒髪のほう。気に入ったぜぇ。まずお前から喰おう。］

鼓膜を介さず直接脳に叩き込まれるような声。

ベースは確かに人間の形をしている。
しかし、その全身は囚人のように頚城をはめられているように影に巻きつかれ、影が肉体に食い込み、その頚城を、別の影が鋏のように、肉体へとさらに縫いとめているように見える。

影は薄ぼんやりと背後に伸びていて、それはまるで醜悪な笑みを浮かべるように裂け、たまに端から伸びる『余りモノ』は、蛇のように地面を這いずり、やがて消えた。

影からは、どうしようもない腐臭と血の匂いが濃厚に立ち上っているように感じられ、たとえるなら今の自分たちは空腹の蛇を前にした尻尾の取れぬ蛙。
もしくは荒れ狂う大海原に浮べられた一枚の葉の上にいる蟻のようなものだ。

頼りない。
私には、何もない。

この化け物を相手に二十重を守る術なんて、何一つもちあわせていない。

ただただ対峙するだけで自分自身を削り取られていく感覚。
気を抜いただけで失神してしまいそうなほどだ。

と、急に影が伸びて二十重に触れそうになった。

「二十重！後で理由は話すからとにかく逃げるぞ！」

影に触れられる前に二十重を突き飛ばして、初音は一気に怪物に駆け寄った。

「あああああああああっ」

頼りない自分の咆哮で、わずかばかり戦意を鼓舞して。

相手の体はやや、左に傾いている。

どうやら折れているらしい左腕に添え木のようなことをしているため、無意識に体が傾いているのか。

体を低く保ち、振り上げられた包丁をかいくぐり、その重心が乗った左足に一撃蹴りを入れる。

怪物の体のバランスを崩し、スピードが落ちた包丁を持つ右腕をつかみ、体を回して体を低くする。

崩された体はそのまま引き摺り下ろされるように落ちてくる。

それを背負い込み、体を持ち上げるように縦に反動をつけ、一気に腕を巻き込む。

朽木のように頼りなく、ソイツは地面に叩きつけられた。

「今のうちだ！いくぞ！」

二十重に駆け寄り手をつかむ。

「あっ」

それを強く引こうとした瞬間、後ろを見ていた二十重は小さくあえいだ。

振り向くと、そこには平然と立ち尽くす化け物がいた。

「馬鹿な！あの勢いでコンクリートに叩きつけられて…平然と立ち上がるなどっ」

言って、自分でそれが愚問なのだと思った。アレは、ただの人間ではないのだから。

と、思考が退避からわずかに逸れたその瞬間、化け物は手を上げていた。

いつ、化け物が手を上げたのかわからなかった。

しっかりと凝視していたにもかかわらず、だ。

その手のひらをこちらに向けて、カクンと首をもたげたとき、そこから何かが発射されているのだと気がついた。

逃げなきゃならない。

逃げないとまずい。

アレは、危険だ。

警告が頭に響く。

頭ではどうすべきかわかりきっている。

しかし、足はもう、震えてしまって動こうとしてくれない。

［まったく、早く逃げればいいのにっ！これだからあなたみたいな頭でっかちは嫌いなのよ］

先ほど脳に叩き込まれた邪悪なそれではない、涼やかな声が響いた。

直ぐ後ろからどこか儚げな雰囲気をかもし出している栗毛の、同世代の女の子が飛び出してきた。

［アレが、見えているんだったらね！］

ざわりと彼女の髪が揺れた。それと同時に、まっすぐに発射されていた衝撃波のようなものが弾き飛ばされていた。

「レイコ、なのか？」

［そのとおり。やっと認める気になったのかしら？］

なぜか、初めて視るにもかかわらず、すでにこの像は知っている気

がする。

［ったりまえじゃない！あなた、ずっと私のこと視えていたくせに見ようとしていなかったんだから！まあいいわ。私に任せて。そろそろ恵助が来るだろうから早いところ逃げなさい！こいつは、そんなに抑えていられそうにないわ］

肩越しに頼もしいのか、頼もしくないのか良くわからないことを口走って、レイコは微笑んだ。

月明かりが差し込む狭い廊下に、それとは異なる超常的な力場のぶつかり合いによる、火花が咲く。

二十重には、その火花と、正面に立ち尽くす奇妙な男しか視認できない。

が、たしかに、見たいと望んでいた光景はそこにあった。

それはわずかな間拮抗しているように見えたが、すぐさま力関係は傾き始めた。

［お前、邪魔だ！］

アキマサは眼球が飛び出そうなほど眼を見開いて、また、視認出来ない手の動きをした。

レイコの真横に急のうまれた力場によって、レイコは激しく壁に叩きつけられた。
壁は円形に激しく陥没し、レイコの形だけ陥没せずに原型が残る。

［かはっ］

痛い。
恵助に初めて会って、缶をぶつけられるまでは忘れていた感覚。
本来痛覚は、存在の危険をその体に伝えるために存在している。
つまり、当然痛いことを続けていけば体は崩壊していくし、霊体といえどもその例に漏れない。
それに今の状況は人間同士が殴り合いをするように、霊体同士のぶつかりあいである。
吹き飛ばされた勢いで、壁を貫通し、中庭側の校舎外壁まで抜いて外に出てしまった。
アレは、本当に一個霊体レベルの力だというのか。
顔をしかめて、分の悪い戦闘に一度深呼吸をしてから一気に壁をすり抜けた。
そこでは、月明かりが災いして、薄暗闇の中に出来た影を、『余りモノ』の影蛇がしっかりと縫いつけて、結局逃げることが出来ていない二人が立ち尽くしていた。

悪性霊は二人に気を取られているのか、壁を抜いて戻ってきたレイコにはまったく気付いていない。

［ああっ！もう恵助はこんなときに何をしてるのよ！］

イメージする。

巨大な弾丸を目の前に形成させる。

それが檄鉄によってはじかれ、火薬を爆発させて高速回転しながらまっすぐに射出されたさまを。一メートル口径のリボルバーで、あの凶悪な悪性霊を撃ち抜く様を。

ざわりと、髪が、身にまとうワンピースが揺れる。

イメージする。
後はトリガーを引き絞って、発射するだけ。

［いけ～！］

力を使って、決定打を撃ったつもりだったのに、発射したはずの衝撃波は敵にダメージを与えるどころか届きもせずに霧散してしまった。
そしてそれだけにとどまらず、小さく、レイコの像にノイズが走る。

［あ、れ？］

少しだけ目の前がぼやけた。
まずい。
なんだか、酷く、痛い。
体が揺れたとき、今更階段を駆け上がってくる恵助が見えた。
「バカッ！何でアレだけいったのに来てるんだよ！この馬鹿レイコ！よりによって二十重さんたちまでいるしさ！」
恵助は階段を上りきるなりハリセンで二十重と初音の影をひっぱたいた。
二人を縛っていた影蛇が霧散する。
その勢いのまま一気に悪性霊に取り憑かれているアキマサにも一閃。
間の抜けた、そのくせどこか頼もしい音が響き渡ると同時に、勢いよく倒れこんだアキマサに絡みついていた鎖はゆっくりとはがれ、飛んでいこうとしていた。
［来るのが遅いのよ……バカ、けーすけ。］
沸いた安堵が痛みをかき消した。なんだか張り詰めていた意識が、恵助の間抜けな顔を見たら一気に緩んでしまった。
「なんだと？危ないから一人で浄霊して済ませようと思ってたのに首突っ込んできて挙句にそれか！」
［なんですって！？私がいなかったら二人ともどうなってたと思っ

ているわけ？」

「たしかにそうだけど、って！何で二十重さんたちまでここにいるんですか！」

振り向くと、こともなく、二人が立っていた。

「あらあら～、偶然とは怖いですよね～」

「……ねー」

一瞬沈黙した後、なぜか初音さんまで『偶然』だというセンに乗っかりだす始末。

「二十重さん！偶然ですむことじゃないですよ！もしかして俺の部屋に何か仕込んでいたりしてませんよね。たとえば盗聴器とか、監視カメラとか、盗聴器とか、監視カメラとか、そのほか俺が知る由もないような、とんでもハイテクマシーンとか！」

「なんですか？そのとんでもハイテクマシーンって」

くすくすと二十重は笑っていた。

そして何より恐ろしいのは、二十重さんは、ただ、笑っているだけだということだ。

「ちょっと待ってください！まずちゃんと否定してくださいよ！あっ、そもそもプルートの件だって…」

「おい、その辺にしてそろそろ帰らないと警報装置を作動するぞ」

「あらあら～それは大変ですね。じゃあ、早く帰りましょうか。あとは警察のかたがたにお任せするということで。」

「ええ？まってくださいよ！警報装置『を』作動するって何ですか！今までは作動させていなかったんですか？それじゃ二人とも、どう考えても確信犯じゃないですか！」

初音はメガネを摺り上げ、廊下に落としたノートパソコンをゆっくりと拾うと、直ぐ目の前まで近づいてきて、

「確信犯に決まっているだろう。」

曇りひとつない名刀で、三千世界において一番の居合いの達人が、空気の壁を乗り越え音速を超えた速度で恵助を一刀両断にしてしまい痛みすら覚えないような。

「あ……」

そんな言い切りに、恵助は思わず反論できなくなってしまった。

「なんて、冗談だ。せいぜい高柳の様子がおかしいから玄関付近を何人かにはらせていたくらいのもので、二十重はそこまでしないと思うぞ」

初めて、初音さんの言葉にあいまいなニュアンスが含まれた。

この人は、こと二十重さんの名前を出して『思う』なんて不確定な言葉を使う人じゃない。

「でも…」

「たとえばだ。高柳。そうだと思って普通に暮らすのと、そうではないかもしれないという疑問と不安を抱えて暮らすのはどっちが楽しい？」

そりゃあ、何も知らないから幸せだってこともある。

何もない大草原だと思って走り回っていても、そこには動物を捕獲するための凶悪なトラップがいくつも設置されていて、むやみに歩き回ると大怪我すると知った後はその場から一歩だって動けなくなってしまう。

「そうだ。それに最近の監視カメラ、盗聴器、とんでもハイテクマシーンの類は非常によく出来ている。小指の爪の半分ほどの大きさのものまであるんだからな。仮にそれをプロが仕掛けたとして、素人にそれが見つけられると思うか？通信を感知する機械もあるが、それすらごまかす機能を備えたものまで在る。」

初音の言葉には淡々としていて、それでいて脅迫のような響きが含まれている。

まして、大概の場合、人を説得、ないし脅迫するときというのは大声を張り上げて何度も熱心に、時に罵声を上げてするよりも、低く、ゆっくりと、落ち着いて話し込まれる場合のほうが恐ろしいのだ。

「私は、『二十重はそこまでしないと思うぞ』といったんだ。この言葉を信じるか、否かは高柳の考え方ひとつだが、まあ、言葉一つ

で破綻する日常というのも、ある意味面白いかもしれないな。」

初音は、最初から最後まで、微塵も視線を揺らさなかった。

ありえる。

十分に、仕込まれた可能性はある。

ただ、認めるわけにはいかないし、何よりも後悔すべき失敗があったとするならば、この人たちにうまいこと霊感を隠しとおせなかった俺の未熟さが原因だったわけだ。

――ああ、女性恐怖症になりそう。

［だーかーら前に言ったじゃない。女は怖いのよって…ああ、あの時は聞こえてなかったんだっけ？］

――聞いてないって、そんなの

「うむ。女は怖いのだ」

初音さんは小さく頷いた。

――あ、れ？初音さん完璧にレイコのこと気づいてないか？

［残念。それも失敗のひとつね］

――そうか～

恵助はげんなりしてうな垂れた。

「もういいです。わかりました。早いところ帰りましょうか。」

［あきらめなさい。なっちゃったものはしょうがないしね～］

「そうしましょう。」

「正しい選択だ。」

階段に差し掛かったとき、うなじのところに嫌な感覚が走った。

なんとはなく振り向くと、浄霊したはずの黒い鎖が再び男に巻きつこうとしていて、巨大な衝撃波を今にも発射しようとしていた。

「みんな逃げろ！」

恵助のとっさの言葉が終わるより前に、目の前にいるアキマサの体が歪んだ。

教室側の壁は陥没し、窓はすべて割れ、壁は外側に押し出される。

四角の廊下が、真円に変形して、崩壊していく。

横を見ると二十重さんとレイコは階段のほうへと移動しているから、目下のところ俺と初音さんを何とか出来ればいい。

が、現在位置は階段まで四メートルほどある廊下の真ん中。初音さんを押し倒しても階段の安全圏まで飛ばすのは無理だ。

「初音さん、ぴったり俺の後ろについてください。」

「わ、わかった。」

せめてもの救いは、初音が平均よりも小柄だったことくらいか。平均して大柄ではない恵助の後ろにすっぽりと初音は隠れることが出来た。

壁が、床が、天井が歪む。さっき渡り廊下でそうしたようにタイミングを合わせ、最上段に構え、垂直にハリセンを振り下ろす。

力場がハリセンと衝突する。

「がっ！」

腕、肩、続いて肋骨。

一瞬にして粉々になったんじゃないかという衝撃が走る。

超大質量のエネルギーだ。いくらこのハリセンでも一瞬で完璧に消滅させきることは出来ないようだ。

削れ、消えさりつつ、尚残った衝撃が恵助を襲う。

「あああああああああっ」

吹き飛ばされる！
そう認識した瞬間、とっさにハリセンを手放して後ろの初音さんを抱きかかえた。

弾けるような音がして二人は階段を通り越して七メートルほど吹き飛ばされた。
初音の頭を抱えるようにして体を回して地面側に回り込み、何とか恵助の背中から落下することが出来た。

［恵助！］

レイコは直ぐそばにアキマサがいることも忘れ、飛び出そうとする。

「来るな！」

［カカカッさっきは恐ろしかったが、もうなんと言うことはないぜぇ］

［あたりまえだろう。俺様が同化してやったんだからな］

［違うだろうがよぉ、これが俺様本来の力だぜ］

アキマサはずたずたになって原形をとどめていないハリセンだったものを踏みつけ、鼻で笑った後恵助のところまで蹴り飛ばした。
交互に神木から作った紙を折って形を成していたハリセンは風を受けて解け、とても元通りには出来ないような穴だらけの一枚の紙に

なってしまった。

［さっき言ったとおり、俺様を嘗めたお前は最後だ。ちょっと待ってろ］

口の片方だけ吊り上げるような厭らしい笑みを浮かべて恵助を一瞥し、階段の二十重とレイコに迫る。

「逃げろ！直ぐに行くからとにかく走れ！レイコ、それまで二十重さんを頼む！」

どこか呆然としていた二十重とレイコは、恵助の言葉で正気に戻り、一気に階段を駆け下りていった。

［まるで狭い檻の中を必死で逃げ回るウサギみたいだぜ。面白い。面白くなってきたぜぇ］

［直ぐに行くから〜か。じゃあ、がんばって追いかけてくれよ。ウサギ共が刻まれる前にナ］

アキマサは階段を下りながら、手を掲げた。

すると階段と廊下の境のシャッターが下りて、再び道がふさがれる。

「初音さん、大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫…だ。」

「くっそ！完璧に当てたのに何で浄霊出来なかったんだよ」

動かすたびに体に亀裂が入るような痛みが走る。腕は問題なく動いてくれるから、どうやら骨に異常はなさそうだ。

何とか体を起こして、壁に寄りかかりながらやっと立ち上がる。少しこのまま慣らさないと一歩踏み出しただけで倒れこんでしまいそうだ。

少し、対策を考えておかなきゃならないかもしれない。

さっき会ったとき、あの霊は宿主自体と会話していたようだったのに、今は宿主の念が感じ取れなかった。

いったいどういうことなのかさっぱりわからない。

ましてアレは、さっきまでと同一の霊体の力とはとても思えない。

「高柳。」

背中に、やけに疲れたような声が飛んできた。

「なんですか？やっぱりどこか怪我を？」

振り向くと、初音はぺたんと冷たい廊下に座り込み、小さく体を揺らしていた。

「ダメだ。あの化け物には勝てない。勝てるわけがない。お前が使える絶対の武装が破れた一枚の紙でしかなくなっている。それに、レイコの力は到底あの化け物には及ばない。まして私と二十重は、限りなく無力だ。」

小柄な体をさらに丸めて小さくなった初音は搾り出すようにやっとそれだけ言った。

「あはは、あのハリセン高かったんですけど、あまり役に立ちませんでしたね。たしか、前開かずの間であのハリセンと同じものを見かけたんでそれは役に立ってくれることを願うしかないですよ。」

「見ただろう？ハリセンはあいつに効かないんだ。」

「次は効くかもしれませんよ。あのハリセンは本来、一発で浄霊できるって代物なんです。何かしらあの霊に秘密があって今回は効かなかったのかもしれないし、当たり方が浅かったのかもしれない。なによりも、このままじゃ二人が危ないじゃないですか。俺がこの霊にかかわろうとした結果こうなったんです。俺が真っ先にあきらめて、直ぐに追いつくって約束を破るわけにはいかないんです。初音さんは開かずの間で待っていてください。」

「私も…行く」

消え入りそうな初音さんの決意。

しかし、それがどういうことかわかっているとは思えない。

「ダメです。」

「二十重達がアレに追われているんだ。私だけが待っているなんてできない」

初音は恵助を上目遣いでにらみつけるようにしながら声を張り上げた。

「でも、次は衝撃波を防ぎきれないかもしれません。そうしたら吹き飛ばされるくらいじゃすまないんですよ？」

「二十重にアレは視えていないんだ！お前があの霊を何とかしている間二十重は何が起こっているかもわからず立ち尽くすことしか出来ないだろうが！それなら私は二十重を導きに行く。たとえ吹き飛ばされようが、体を持っていかれようが、だ！私を置いていくなら私は高柳からそのハリセンを奪ってでも行くぞ」

そこまでまくし立てて、また小さく体を丸める初音。

「あの、悪霊を、二十重は見ていないんだから。」

今まで信じ切れなかった霊の存在を半ば無理やり認識することになってしまったためか、どこか夢をみているように眼を泳がせている。

「待ってください初音さん！あの霊を見たんですか？」

初音はさも意外と言う怪訝な顔で、恵助を見やった。

「高柳は私より鮮明に見えたんだろう？」

「いえ、俺が見たのはあそこまで強力になる前、言うならば不完全な、それこそ一発で浄霊できるような状態です。最終形のあの霊は一瞬しか見てないからよくわからないんです。もしかしたら違いがわかれば浄霊するきっかけが掴めるかもしれません。」

「そうか。わかった。高柳が見た像はどんなものだったんだ？」

「俺が見たのは不安定に揺れながら鎖のような影が男に巻きついて、まるで頚城をはめられた囚人のような姿でした。なにかが加わっていたり、形が変わっていたりしていましたか？」

恵助の言葉であの男が悪霊に取り憑かれている様子を克明に思い出して戦慄したのか、再び初音さんは頭を垂れた。

「鋏、だ。」

「かすがいって…子は鋏って使われるあのかすがい、ですか？」

「ああ。その、男に巻きついている鎖をさらに男に縛り付けるように、それとは別の独立した鋏のような影がついていた。」

「独立した影…開かずの間で何かを見つけたのか、もしくはそれが目的でここに進入したのか、ですか。」

「おそらく後者だ。」

「それが、あの霊を浄霊するための手がかり。」
「なんとか、なりそうか？」
「何とかして見せますよ。じゃあ、早いところ開かずの間へ移動しましょう。やっと足のほうが動いてくれそうです。」

「高柳。」
「何ですか？やっぱり足に何か怪我でも？」
「いや……腰が抜けたようだ。」
「マジですか？」
「ああ。大マジだ。」
「やっぱり…」
「待たないからな。」
「じゃあどうしろと？」
「それは簡単だ。高柳は私一人背負っても問題はないだろう？」
「マジですか？」
「だから、大マジだといっているだろうが！そうこうしている間にも貴重な時間は最悪の展開に向けてながれているのだ。早くしろ！」

初音さんは妙なところが強情だ。
もう少し肩の力を抜けばいいのに。
まあ、そんな状況じゃないのは確かだけれど。

「わかりました。わかりましたよ。俺の体も万全じゃないんで多少乗り心地が悪いでしょうが、そこに文句は言わせませんからね」

「まあ、そこは譲歩しよう。」

「よいしょっと」

初音の手を取り、一気に背負う。

思った以上に体は回復してくれたのか、軽い初音さんを背負うくらいなら何とかなってくれそうだ。

「りゃっ」

開かずの間へと早足で歩き出す。

「さっきから、その掛け声はアレか？私の体が重たいといいたいのか？つまり、ことが済んでこの体が完治したら完膚なきまでに『相手』をして欲しいということか？」

「え？いや、そういうわけではないんですけど…」

足元に気をつけないと転んでしまいそうだ。言葉を区切って慎重に開かずの間へと踏み込んでいく。

「けど、なんだ？そうか。そんなに相手をして欲しいか。よろしい。それはそれで楽しげだ。覚悟してもらおうじゃないか。」

「まってくださいよ。この暗闇でこの足場。言葉を区切ったり掛け声をかけたりするのは自然なことじゃないですか！」

「なるほど、それは自然ないいわけだ。だから許すというわけではないが。」

少しだけ初音さんは調子を取り戻してきたようだ。

ただ、何が出るかわからない初音さんのことだからその相手とやらをしたら恐ろしく強いに決まっている。

ハリセンを探して話をごまかそうと教室内を見渡してみる。

「ああっ、あそこにハリセンありましたよ！」

うず高く積み上げられた呪物の間に、薄ぼんやりと光を放つハリセンを見つけ出した。

「高柳。もう大丈夫だ、降ろせ。早くそれを持って二十重達を追うぞ！」

「わかりまし…ん？」

足に、絡みつくような感覚が走る。恵助は言葉を区切って足元に眼を落とした。

そこには瑠璃色をした瓶が二つ、小さな箱に入っていた。

きつく閉められている瓶の口の隙間からはかすかに霊気が漏れている。

「その瓶がどうかしたのか？」

「は、ははははっそうか。そうだったのか！」

「おい、高柳？いったい何を言っているんだ」

「それはですね…」

恵助は説明しながらハリセンを握り締め、二、三度振った。

時刻は二時十四分、まさにこれから霊が最も力を増す丑三つ時を迎えようとしているところだった。

／

階段を二段飛ばしで駆け下りる。
今いるところは一般棟三階ほぼ東端。
このまま階段を駆け下りれば職員玄関までは直ぐである。
まして、さっき見た衝撃波はまっすぐにしか飛ばないようだった。
逃げ切れる確立は非常に高い。

でも。

ほんの二秒、立ち止まって思考する。

背後にある階段から自分を追う悪霊が迫っているというのに消費するには永すぎるといっていい時間だ。

小さく頷くと二十重は階段を駆け下りずに三階の渡り廊下を走りぬけた。向かった先は特別棟のほうである。

――なぜすぐ逃げなかったの。

一歩進んでいくたびに空気中にびっしりと張られた透明な紐のような何かが体に巻きついていく錯覚を覚える。
平らな廊下にもかかわらず転んでしまいそうだ。

――初音、恵助君、怪我は大丈夫だったのだろうか。

おそらく、自分のしている行動がどれだけ危険なのか理解しているから、そしてそれが下手をしたら残った二人の思いをどれだけ無駄にしてしまうか分かっているからだ。

でも、だからこそ二十重は特別棟へと走った。

――私はいったいなにをしているのか。まっすぐな渡り廊下では格好の的になってしまっている。

一般棟四階へは校外に密着させて設置されている螺旋状の避難階段と東西の校舎内に設置されている階段のみ。

さきほど開かずの間近辺の壁は崩れ果ててしまったので事実上使うことが出来る階段は西端の階段一本のみ。

「っ！」

二十重は直感的にいやな予感がして左に飛んだ。

その刹那、つい今しがた立っていた場所が大きく陥没した。

そのまま転がるように特別等の廊下へと移動して、体勢を立て直しすぐさま走り出す。

理想としてはこっち側の階段を下りたかった。おそらくそれを察しての攻撃なのだろう。

――もし、今振り向いていたらかわしきれなかったかもしれない。

よかった。

「ふっ」

小さく、細く、一気に息を吸い込んだ。

――まさに、渇望していた『霊』との出会いでいきなり大ピンチだ。
でも、なぜか心細さはない。

私が真っすぐに階段を下りて校舎外に逃げたら、締め切られた袋小路の中に二十重と恵助君を残すことになる。

私が逃げるために二人をそんな危険な状態に出来るわけがない。

ゴッ、

ゴッ、

ゴッ、

ゴッ、

ゴッ、

ゴッ…

真後ろからやや左にかけてどんどん近づいてくる床が爆ぜる音。
よけるようにどんどん壁へと追い詰められる。
階段まで走っていくのには間に合わないだろうし、だからってこの攻撃をかわして渡り廊下へと移動して、また衝撃波をかわして渡りきるなんて出来ない。
駆け抜けていく教室は鍵が閉まっていて入ることが出来ない。
見事にチェックメイトだ。

直ぐ後ろに爆発音が近づいたとき、二十重は壁に腕を擦り付けそうになりながら階段四メートルほど手前の女子トイレに飛び込んだ。

一瞬、トイレのドア直ぐに立って入ってきた瞬間に掃除モップなどを使ってひるませて逃げようかとも思ったが、初音の背負いでもまいらない霊がモップ程度でどうこうできるとも思えない。

二十重は一番奥の個室に入り、ドアを閉めた。

同時に、トイレの入り口のドアが衝撃波によってはじけ飛ぶ音と、そのドアが今いるトイレのすぐ外の窓を突き破って外に落ちていく音がした。

決着・その後

――なんだろう。この感じは、どういうことなんだろう。

男が入ってくる音がする。

はじめに掃除用具ロッカーを開く音がして、小さく

［ここにはいない。］

という声が響いてきた。

――なんとも、霊関係のテレビにありそうな使い古されたシチュエーションだ。

トイレの個室は五つ。

そうこうしているうちに一番手前のトイレが開かれた。

また、

［ここでもない。］

と聞こえる。

――なんで、こんなに冷静でいられるんだろう。

またひとつ。

後三つしかない。

二十重は、さっき初音をかばった恵助のことを思い出した。
ああ、なるほど。さっき彼はこう言っていたのだ。
『逃げろ！直ぐに行くからとにかく走れ！レイコ、それまで二十重さんを頼む！』
うん。そうだ。
恵助君は、必ず来る。
だって、ここにはもう、レイコさんがいるんだもの。
ジャケットからグリグリの瓶底メガネと漆黒のリボンを取り出す。
またひとつ個室が確認された。つまり、次のドアをあの男が見た瞬間に、ここに隠れていることがばれてしまう。
メガネをかけて、黒いリボンで乱雑に髪を結い上げる。笑みを浮かべて、二十重は小声でつぶやくように『レイコに』話しかけた。
「そうなのね。だから、こんな状況でも心強かったのね。レイコさん、あなたがここにいてくれていたから。」
「へぇ、感じが変わったわね。そのほうが、生き生きしているというか…似合っているみたい。とはいっても、聞こえも見えもしないんでしょうけど…」
「そうですか？そう、かもしれないですね。メガネをかけると世間からレンズ一枚分遠ざかれる気がするんですもの。それより…本当にレイコさんが見えないのは残念です。」

［へ、見えないのは？］

「聞こえてますよ。しっかりと。」

［へぇ～、恵助に影響されたのかしら。］

「そうみたいです。やっと『気付けた』みたいです。」

［じゃあ、改めてひとつよろしくね二十重さん、でいいかしら？私はレイコでいいわよ］

「あらあら。こんなところで自己紹介なんて…よろしくお願いしますね、レイコさん。」

［ここでもない。］

ついに、すぐ隣の個室が開かれた音がした。とたんに、このトイレ内からすべての気配が消える。

［なるほど、これで、安心して気を抜いたら……っていうのがテレビのオチだけど］

「私たちはオチを見るわけにはいかないですね。」

［じゃあ、］

「個室を上から覗くようなはしたないことをされる前に、」

［こっちからいっちゃいましょうか。］

「そうさせてもらいましょう。」

二十重とレイコは、ともに意地悪な笑みを浮かべた。

レイコは髪を揺らして力を収束する。

二十重は息を深く吸い込んで、軽く右足を引いて、半身に構えた。

「たぁー！」

［いけー！］

二十重は体をひねり全体重を乗せた回し蹴りを。

レイコは収束した衝撃波を。

まったく同時に、二人はドアへとぶちかました。一瞬だけ個室のドアは抵抗したものの、あっという間に弾けとびトイレの前に無防備に立ち尽くしていたアキマサを吹き飛ばした。

［行くわよ！］

「ええ。」

二十重たちはトイレを飛び出して階段を駆け下りた。

［やってくれるぜ。あのメス豚共…かか、かかかかかかかか］

［抵抗してくれればそれだけ食うのが楽しみってもんだぜぇ！くっくっくっ…］

アキマサはぶつぶつと呟き、頭を振りながら真っ二つに折れたトイレのドアをどかして、ゆっくりとトイレを後にした。

階段を駆け下りる。

多少難はあったものの当初の理想どおり一階まで一気に降りてくることが出来た。

まだ、アキマサは階段を下りきっていない。一般棟へとつながっている廊下を駆け抜ける。

「レイコさん、ちゃんとついてきていますか？」

［う～ん。正直な話、二十重さんが遅くてどうしようか考えてるところよ。］

「走るのはあまり得意じゃないんです」

二十重はレイコに話すつもりで左側を向いて話している。

［といいつつ、何気に恵助よりは速いみたい。］

しかし、レイコは初音に以前指摘されてから意識的に人の右側に飛ぶようにしていた。

「だから、あまり、得意じゃないんですよ。」

当然、見えていない二十重はそんなことお構いなしにレイコの後頭部を見せながら話しかけてきていた。

［ほ～言いますねぇ。］

なるほど、恵助が言ったとおり、神様がいたなら、天は二物どころかいろんなものを与えすぎちゃってこんちくしょうめって話みたい。

レイコが苦笑いして二十重の左側に回りこんだとき、渡り廊下がシャッターで閉められて完全に袋小路になってしまった。

「まあまあ。どうしたものでしょう。」

キラリと二十重のメガネが光る。

［それは、コッチのセリフだぜぇ。］

［そうそう。これからお前たちをどうやって食おうかって話だからなぁ。］

逃げ場がないという余裕からか、アキマサは二人から十メートルほど、階段から五メートルほどの位置にぼんやりと立って、一人で自分と話し合いを展開している。

［私は恵助と契約しているのよ？それがどういうことか分からない幽霊（あなた）じゃないでしょうに。］

肩をすくめてレイコは呆れたような、取るに足らないものを見るような眼をアキマサへと向けた。

［アア、何だって？それがどうしたってんだよ］

［ああ、そんなことはたいしたことないだろうが。俺たちと明正と同じってことだろ。］

アキマサは機械のように緩慢な動きと俊敏な動きを繰り返している。

「俺たち。ですか。やっぱりそうみたいですね、レイコさん。」

［ええ。ビンゴ！］

［ああっ？テメエらなに生意気なこと言ってんだよ。ぶっ殺すぞ］

［オウ、食うぞコラ］

どうやら自分だけが理解できていないことが酷く不愉快らしい。

アキマサは漫画であるように本当に顔に血管が浮き出している。

「あらあら。まあまあ。高血圧。」

［冷静な挑発なんだか、大ボケなんだか分からないわよ？それ。］

「どうでしょう。」

［まあいいわ。あなた『たち』みたいな対の霊は珍しいわねぇ。一体がメインとしての肉体完全支配。そしてもう一体がその肉体と相棒の『定着』と『繋ぎ止め』を担当するなんて、効率もいいし、単発の浄霊は通用しないし。なにより、我が強い霊が協力しているなんて誰も想像できないし、ホントにいい考えだわ。でも、そういうスタイルだからこそ契約者とのテレパシーには疎かったみたいね。］

「さしずめ、最初に開かずの間に行ったときに、対となっている存在の霊を体に取り込もうとしていたんでしょう。恵助君たちが開かずの間で、あなたたちが入っていたらしき瑠璃色の瓶を見つけ出したみたいですよ。まぁ……私の霊具を探し当てる直感って、素敵。」

［なにぃ？］

若干うろたえた様な揺れが声に混じる。

［は、はははっ。だからどうしたってんだ。そんなこと知ったって、ただの冥土の土産だろうが。］

［やっすいセリフねぇ～。もっとズシッと来る、聞いただけで絶望のどん底のズンドコで打ちひしがれて、涙の海で溺れる様な渋くておもた～い言葉はないの？］

「あらあら。まあまあ。レイコさん無理みたいです。何度もシャッターを閉める同じ手を講じるなんて。浅慮なようですし…」

レイコは片眼をつぶり、手で電話のような形を作り出した。

［まあ、つまりはこの位置も。この狙い済まして作り出させた状況

も。あんた達を浄霊する算段も。とうに恵助と相談済みってわけよ。階段を駆け下りるだけの時間で二十重さんにも打ち合わせ済み。簡単に言うなら、あんたらは一人じゃ何も出来ない無能な半端霊の寄せ集めだったって、ただそれだけの話。もしも～しってね。］

［何…だとッこのアマッ！］

［無能かどうか…ヒィヒィ言わせてわからせてやるぜぇ！］

空間が歪む。

空気が振動して気圧が変わり耳鳴りがし、校内にもかかわらず微妙に風が吹いている。

［芸がないわねぇ。そんなこと私にも出来るっていうのよ］

イメージする。

こと、霊体の力はより鮮明に、より強固な意志で、より具体的な何かを創造することに因り生まれ出る。

肉体が存在しない分、干渉力にはイメージが、意思が、つまり気持ちの強さが反映される。

眼に見えるほど鮮明にイメージした小型拳銃を撃てば、あいまいに

創造したミサイルのイメージの念を容易に貫通する。

その点、相手が二体なのは好都合だ。

衝撃波を放つ際それぞれのイメージには必ず相違がある。

その分、力をロスしているのだからだ。むろんその一発に籠められている力は強い。

しかし、揺らぎは大きい。

いびつな砲台に、必要以上の火薬を押し込んで発射しているようなものだ。

だから、私にも勝機はある。

だから、私はイメージする。

私がイメージするのはただの弓。そして矢。

レイコは体を半身にして弓を番えるようなポーズをとった。

私は、この弓に、私に気付いてくれた二十重、初音、そして、恵助を生きて帰したい気持ちを乗せる。

［ははっなんだそりゃ。このミサイルのイメージには何もかなわねぇゼ］

［謝るなら今の内だぜぇ？まあ、許してやらねぇケドよ～］

アキマサが手をレイコたちに向けたとき、悪意の念が発射された。

レイコはそれに合わせて矢のイメージをその中心へと打ち出した。

一瞬間があって、両者の中心辺りでそれらはぶつかり、鬩ぎ合いをはじめる。

「レイコッ」

恵助がアキマサの向こうに見えた。

［なにぃ？］

［邪魔させてたまるかぁッ！］

アキマサは残りの腕を上げて恵助たちを牽制する。

先ほど防ぎきれなかったほどではないにしても、恵助はハリセンでそれを防ぎながら初音を背負って、その場で立ち尽くすことしか出来ない。

念が揺らぐ。恵助にも力を割いているのでピントがずれかけている

のだろう。

［まったくいつも遅いのよっ］

さらに力を籠める。焦点を絞り込む。

ビリ、と空間が破れるような音がして、均衡が崩れかけた。

矢に、ミサイルのイメージは押され始めていた。

［げぇえええ？なんだとぉ］

［て、テメエ、もっと力出しゃぁがれ］

［テメエこそサボって出し惜しみしてんじゃねぇ！］

［なんでもいい！行くぜっ］

［おがあああああああああああっ］

アキマサの雄叫び。ただの雄叫びなのにガラスにひびが入った。

ズキン

［くぁっ］

ガラスとともに体にひびが入るような痛み。

それに、さっき開かずの間の前に恵助が来て忘れていた眩暈が再びレイコに襲い掛かってきた。

体が砂袋だとしたとき、まるで、砂がどんどん抜けていってしまうような痛み。

今度は矢のイメージが押され始める。

じりじりと押し込まれる。

レイコは顔をしかめながら、恵助へと視線を向けた。

今は念のピントが多少ぼやけることよりそうしたくて。

そう、することが必要な気がして。

向けた視線は、恵助が真っすぐに見つめる視線とぶつかった。

そして刹那。

そして、すべて分かってしまった。

これから、恵助が言う意地悪な言葉が。

「レイコ！もうへばったのかよ。もしかして長い間アパートにいたせいで年を取りすぎちゃったんじゃないのか？」

やっぱり。

わかっていても、レイコはカッとなって顔を赤く染めた。

怒りと、羞恥と、こんな状況で心が通じた奇妙な安堵を込めて。

［なんですってぇ〜！］

勢いよく拳を振り上げる。するとさらに、レイコの念には力が上乗せされた。

瞬間。相手の取るに足らない衝撃波など吹き飛んでしまっていた。

アキマサの衝撃波を吹き飛ばし、レイコの衝撃波はアキマサをすっぽりと包み込むほど巨大になって直撃していた。

［ぐおおおおおおおおおおお］

明正の体から、弾け飛ぶようにアキマサが離れていく。

黒い鎖が上空に舞った。

「高柳今だ！」

「恵助君今です！」

［恵助今よ！］

と。

初音さん、二十重さん、そしてレイコの三人の声が重なる。

「おうっ！」

恵助はアキマサがひるんだ拍子に衝撃波を完全に弾き飛ばしアキマサに駆け寄り、吹き飛んだ鎖の一番端、未だにしつこく影鎖を明正へとつなぎ止めている鋏のような影にハリセンを叩き込んだ。

［おごおおおおおおおっ消えるキエルきえる奇ヱ留ぅう！］

「いい迷惑だ。今まで殺した動物たちに必死に謝りながらとっとと逝けよ。ただし、行き先は天国ほど、甘くはないだろうケドね」

明正の体へとしがみついていた霊は、空中に完璧に排出され、次第に細かい霧になって消え去った。

「こんどこそ、浄霊完了！もう二度と戻ってくるなよ～」

ハリセンで二度ほど肩を叩く。

明正はゆっくりと力なくその場に倒れこみ、すうすうと寝息を立て始めた。

「よし。生きているな。」

初音は脈、怪我の確認、写真、指紋採取、髪の毛の採取をして、データはパソコンに、明正の髪の毛は厳重に袋にしまいこんだ。

「これで、こいつが最初の動物殺しを悔やんで自首すればよし、しないなら全部ひっくるめて警察に引き渡せばよしだ。」

「まあまあ、それなら万全ね。じゃあ、帰りましょうか。教員玄関の鍵が開いていますからそっちへ行きましょう。」

「そうですね。」

［けーすけ！］

三人が一歩だけ踏み出したとき、レイコが口を開いた。

どこか少しだけあせったような響きがある。

「わかってるって。早く帰って寝ないとオカピもおちおち観に行かれないってんだろ？」

振り向くと、さっき小日向小学校で俺が声を荒げたときのように、レイコの像は酷く薄くなっていた。

「レイコ？それどうしたん…」

［恵助！聞いて。］

問答の時間も惜しいのかレイコは恵助の言葉にかぶせてやや声を強くした。

「あ、ああ。なんだ？」

［私、途中で日にちを数えるのをやめちゃったから、実際にはどれくらいだったのか分からないんだけど、あのアパートに閉じ込められて永遠に、もう死ぬこともできないし、独りで、時に化け物だとか、お化けだとか罵られて、それでずっと、アパートがなくなるまで独りきりなんだって、そうなんだって諦めてた。］

月明かりが差し込む一階の渡り廊下。

壁に囲まれて、高い校舎に挟まれた間から差し込む月光と、初めて会ったアパートの、隣との狭い屋根の隙間から差し込む弱々しいほ

どの優しい光。

大きな窓に、どこか、古ぼけて、寂れた空間。

孤独を痛感する、少し冷たい空気。

どこか、似ている。

［まったく、恵助ったらいきなり缶を投げつけて来るんだもん。しかも、あたらないと思っていたらあたって痛かったし、コッチのほうが驚いたわよ。］

「レイコ？」

［そしたら霊感があることを隠してただなんていいだすし、それに一緒に暮らすようになったらなったでなんだかボーっとしてたり、頼りなかったり、間抜けだったり、何気に女好きだったり、どうしようもないなって思った。］

「なんだよそれ。どうせ、レイコが言うんならその通りなんだろうけどさ…」

［まあ、でも、その、あれよ。記憶の欠片は見つけられなかったけれど、恵助、ずっと私を『女の子』としてみてくれていたし、今日だって、私のことを心配して、無理にひどいこと言ってみたり、あんなに強力な霊に一歩も引かなかったりして、ホントに嬉しかった

し、なんだか頼りがいがあったよ。」

気のせいじゃない。

どんどんレイコは薄くなっている。

「おい、見つけられなかったってなんだよ。これから見つければいいだろ？俺にも、レイコにも、時間はあるんだし。それにほら、二十重さんも初音さんも、レイコのことわかるようになったしさ…」

「ひとつだけ、謝らなきゃいけないことがあるんだけど、実は勝手に恵助が寝ている間に憑依してお弁当作っていたんだ。夢見がすっごく悪かったでしょ。それと、残念だけど今日はオカピ観にいけそうにない。」

小さく浮かべた微笑には、自嘲の色が混じっている。

「ば～か。じゃあ、明日でもいいし、明後日でもいいだろ。中国とかそこらへんの国に行っちゃったら、お金貯めていつか観に行ってもいい。」

言葉が切れたら、レイコは消えてしまいそうな気がした。

だから、延々喋り続けてやろうと思った。

「それにな、お前憑依しただけじゃなくて、何か弁当に、普通使わないような何かを入れていただろ。鶏肉が冷蔵庫にない日に、鳥のから揚げのようなものだとか。まあ、味は悪くなかったけどさ。まあ、憑依されたり、そんなことくらいじゃ怒ったりしないって。むしろ感謝してるくらいだし。朝遅刻しなくてすんでるのも、家に帰ってなんとなく寂しい思いしなくて済んでんのも、一緒にテレビ見て笑ったりするようななんでもない些細なことにだって。うん。感謝してる。」

［わたしも、満足してるよ。久しぶりの外は新鮮な気がしたし、恵助は人がいいからね。楽しかったよ。ただ、ひとつ心配なのは…］

言葉を区切って、レイコはこっちに来た。

すぐ近くに来ているのにさっきよりもさらに像が薄くなって、感覚を鋭敏化させても向こう側が完璧に透けて見えている。

［すぐに自分のせいだと思い込むのが、怖いくらいかな。今回のことも、私が、二十重さんが、初音さんが、自分でここに来たんだから、恵助が思い悩んだり、悔やんだりする理由はまったくないよ。］

レイコは顔を恵助に寄せた。

「え？」

レイコの、柔らかい唇が恵助の額に触れた。

［どこかの外国流の挨拶～なんて。じゃあね、恵助。少し疲れちゃっただけ。気にしないで。自分のせいだと思わないでいいからね。ありがとう。本当に、私は満足してるよ。］

ニッと満面の笑みを浮かべて、レイコはすっと、あっけなく消え去ってしまった。

「レイ…コ？冗談だろ？」

レイコは、冗談だよ～なんてまた出てくることはなかった。

「なんだよ！無理して、霊の相手して、もう一回死んじゃってるのに、成仏するわけでも、浄霊されたわけでもなく、また死んじまうなんて、そんなの…そんなのないだろ！」

熱くなった恵助の声が響き渡った。

ただ、それは、冷たい校舎の中の空気を温めることすらなく、ただ、響き渡っただけだった。

たっぷりの沈黙の時間を破ったのは二十重だった。

「帰りましょう。恵助君。」

「聞いただろう。レイコは満足してるといったんだ。ここで高柳が必要以上に悲しんだら、それこそレイコは素直に満足できないだろうが。」

「わかっています。じゃあ、帰りましょうか。」

「高柳……。」

「歯切れが悪いですよ、初音さん。帰って、少ししたら相手をしてもらうことになってるんですから、相手をさせていただくときに死なないように帰って寝ます。」

「そうですよ。初音は強いんですよ～。だって、一度は霊に取り憑かれているアキマサさんを投げ飛ばしているんですから。」

「ごめんなさい。勘弁してください。俺、それじゃあ死んじゃうじゃないですか。」

ははは、なんて、思わず笑っていた。

「大丈夫だ。畳張りの道場でやるなら死にはしないさ。」

「無理です。死にます。」

足は、勝手に外に向けて歩き出していた。

「柔道はお手の物だろう？」

「それでも、俺はあの状態の人間を投げ飛ばすなど出来ません。」

「柔道は、鍛えれば致命傷を与えることも出来るし、そうさせないように投げ飛ばすことも出来るスポーツだろう？」

校門をくぐって、帰り道を行く。

「ああ、じゃあ、寝技を…」

「あらあら。まあまあ。恵助君ったら…」

「ほう、それは、どういうことだ？赤黒い、その胸の内にある炎を開放しようという魂胆か？」

「え？いや、そういうわけじゃないですって。何でそう解釈するんですか初音さんは！圧倒的な力差で投げ飛ばされるのがいやだって話じゃないですか。」

「絞め技、関節ありありの寝技でいいんだな？」

「だからなんで致命的なダメージを与えられるようなルールを選び出してるんですか！」

「理由はいろいろだが、聞きたいか？」

「あらあら、恵助君、どうします？」

幽霊話のときなみに二十重さんは嬉しそうだ。

「聞きたいのか？」

そして、なんだか、初音さんも。

「いえ、結構でーす。」

「うむ。」

なぜか、やたらと初音さんは満足げだった。

「そういえば、二十重さんはめがねをかけるとずいぶん印象が変わりますね」

「あらあら、そうですか？」
「そうだな。確かに初めて見たときは私もびっくりした。」
まったく同じタイミングで二十重と恵助は初音を見つめた。
「……初音さんでも『びっくりすること』があるんですね」
初音は平生の表情から比べ、やや目を細めた。
「私も人間だからな。当然だろう？」
「イヤ、そうなんですけど、初めて会ったときはこう、完璧人間ってイメージで正直怖かったんで」
「怖い？私が怖い、だと？」
初音さんの口元がかすかに歪む。
よく見るとそれは笑っている、ように、見える。
「あ、いえ、そういう意味じゃなくってですね……今は怖いとかではなくってですね……」
何か、危機を察知して後ずさりしながら効果的な訂正を考える。
でも、
「あらあら。」

「ほぅ、じゃあ、今は一体どうなんだい？高柳。恵助。君。」

「あ、家に着いちゃいましたね。じゃあこの辺で失礼します。おやすみなさい。」

「はい、おやすみなさい。」

「晩くまで起きすぎた。体のペースを戻しておけよ。おやすみ。」

「分かりました。月曜は遅刻しないようにしますよ」

アパートのわきの道をぬけ、階段を上る。

時間が三時近くなので、出来るだけ静かに上る。

鍵を開け、見慣れたドアを開けた。

「ただいま～！」

いつものように声をあげて家の中に入る。

いつものような返事は、当然返ってこなかった。

「……バカ、ヤロー……」

雲はほとんどなくなり、月明かりがカーテンを照らしてうすぼんやり部屋は明るかった。

今日は、晴れに間違いないだろう。

まったく、起きてから予定はないって言うのに、何かイベントがあるときに晴れはとっておいてもらいたい。

風呂に入って着替えて布団に入った。

部屋の電気を消すと同時に、恵助は霊感の完全鈍化のスイッチを入れ、眼を閉じた。

エピローグ

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリ…！

ったくなんだ？　ジリジリ星人のジリジリ語なんてわかんないって

ピッピピピッピピピッピピッピピピピピッピピピピッピピピピッピピ

ピピピピピピピ…！

なんでここで、ピッピ星人まで騒ぎ出すかな。
まったく、寝ている人の横で騒ぐなんてこの星のルールをまったく分かってないじゃないか。

ＨＡＨＡＨＡ！　いつまで倒れているつもりだ！　そんなことじゃ強くはなれないぞ！　たて、たつのだ～！　ＨＡＨＡＨＡ！　いつまで倒れているつもりだ！　そんなことじゃ強くはなれないぞ！　たて、たつのだ～！

なんで、家にある陽気なアメリカ軍人を模した目覚まし時計まで会話に加わって……ん？

何とか、片目だけ開けてみる。

そこは、見慣れた自分の部屋で、宇宙人が襲来していたと思ったら、それらはすべてセットしてある目覚まし時計の音だった。

「あ～朝か。」

体を起こしてすべての目覚まし時計を止める。

アメリカ軍人の目覚まし時計は止めると、『ダダダダッ、ぐう、やられちまったみたいだ。…弾が残っちまったよ。お前はもう立派な漢だ。俺の残弾も…使ってくれ。後は…まかせ……た』なんて、少なくとも気持ちよく起きることなんて到底出来はしないフェードアウトをした。

「ハハハ…朝っぱらから託された側は、責任重いよな」

布団の上で、額に手を当てて少しだけうなだれる。

テレビをつける。

天気予報では今日は完全に晴れ。

かけてある制服にブラッシングして着替える。

あの夜から三日。

今日は週の始まり月曜日だ。

ニュースでは、小学校の動物虐殺の犯人が自首したと報道されていた。

「そっか。自首したのか」

時刻はいつも起きる時間より十分弱遅い。

霊に取り憑かれていた男の名前が出る前にテレビを消して、荷物を掴む。

早く行かないと二十重さんと初音さんがご立腹だろう。

「行ってきます！」

くつを突っかけ鍵を閉めて、一気に階段を駆け下りる。

アパートの間から道路に出ると、なぜかノブと、二十重さんと初音さんが待ち構えていて、案の定初音さんは怒っているようだった。

「すいません。ちょっと寝坊しました」

「いえ、つい今さっき来たところですよ」

「高柳。二十重はこういっているが、いつもの平均値より八分二十六秒。金曜より八分五十八秒遅いぞ。こうして坂本まで来ているくらいだというのに、ちょっと、だと？そう思わないか？」

「すいません。気をつけます。」

「高柳？」

初音は上目遣いで、怪訝な様子で恵助を見やる。

「へ？なんですか？」

初音さんはすい、と眼をそらせて、珍しく困ったような顔をした後、淡々と一言。

「いや、別に…なんでもない。」

「そうだぜ恵助。こんな美人をこんなに待たせるなんてなんてうら……悪いやつだ！あっはっはっはっ」

「何だよまったく朝っぱらから。大体なんでノブがここにいるんだよ」

「そりゃあお前、恵助の家の前でぼんやりと会長と副会長が待ちぼうけしてるのを見た日には黙って通り過ぎるわけにはいかないだろう」

「あー、はいはい。そうですか。そうですね。いやー、久々にノブに正論で攻められた気がするよ…あはははは……」

「何だよつれないぜ、お前。顔色はしばらくぶりにいい癖に虫の居所は悪いのかよ」

「何言ってるんだよ。俺のどこがおかしいって？こんなに元気だって。それにそろそろ学校行かなきゃ遅刻しちゃうよ。二十重さんた

ちも、行きましょう」

「はい。」

恵助は笑いながら歩き出した。
信行は訝しげにその背中を見やる。

「……会長さん、恵助のやつに何か、この休み中にあったんですか？あんなにへこんでいるのは久しぶりに見ますが。」

「まあまあ、あらあら。なにかあったのですかね。」

「そうですか。…何か知っているんですか。俺は何も知らないから力になることが出来ないかもしれないですけど、必要になったら言ってください。」

「そんなことはないだろう。高柳は元気さ。」

初音は小さく口元を緩め、二十重は小さく微かに頷いた。

「そういえば二十重さん、この連休中にこの間借りた全部のしっかりとＤＶＤ見ましたよ。」

「『しっかりと』か。そうか、そうか。では、『幽霊新書』二枚目、四十二分三十五秒の時何が流れていたか分かるか？」

初音は歩きながら、ノートパソコンを開いてパタパタとキーをハイ

スピードで叩く。

「ええ～？そんな時間、それも秒単位まで暗記してないですよ。」

「フン、そんなことじゃまだまだだ。二十重、そのときは何が映ってるんだ？」

「それは、下弦の月が薄曇りに隠れかけていて、その雲の形がひそかに髑髏の形をしているってシーンね。これはＣＧじゃなくて本当に偶然こう見える夜に撮影したって言うレアものなんですよ～」

「またまた…二十重さんも冗談が…」

「正解だ。」

ノートパソコンにその時間の『幽霊新書』の映像が流される。まさに、二十重の言ったとおりのシーンだった。

「うそっ」

「本当だ。高柳もこれくらいになってから出直して来い。」

「ぜひそうなってもらいたいですね。」

「マジですか？」

「二十重は大マジだ。」

初音はかちりとノートパソコンを閉じる。

それを後ろで見て、信行は恵助に耳打ちをする。

「なあ、会長さんたちは結構不思議な世界の人たちなのか？」

「まあ、そんなところだね。」

「そうか～。恵助、がんばれよ」

ノブはバシッと、恵助の肩をひっぱたいた。

「っって～ノブッ！いつもより強烈だぞ。少し考えてくれよ」

「まあ、久しぶりに顔色がいいもんだからな。」

そんなやりとりをしているうちに学校についてしまった。

散々霊によって破壊された校舎は傍から見たらとても安全に生活できる様子ではなかったものの、イヤに逞しい校長の方針により土曜日にすべての活動があった部活、職員総出で掃除をして、あとはガラスを張り替えただけで休校にはならないとのことだった。

もっとも、とうぜん損壊がひどい、開かずの間近辺などは立ち入り禁止となっていた。

世間的にはどこかの不良が進入して荒らしまわっただの、地盤沈下による効果だの、地中深くで亀裂が生まれて出来た力場が原因だのと専門家が騒いでいた。

そういえば今年の夏ごろ発売の心霊特集に載せるとかで日曜日にどこかの雑誌のインタビューを受けた学生もいたらしい。

雑誌の体のいいネタ作りだったのだろうが本当に霊による損壊だと知ったらインタビューアーも驚くに違いない。

今日も、塀の外にインタビュー狙いの記者のような影があったことと、心の片隅にここまで騒ぎになってしまったことに申し訳なさがあった以外は普通の学校生活だった。

それと、たまに食べると学校の購買のパンは、酷くうまいことが分かった。

昼食後も普通の、退屈で、少し難しい苦手な数学をこなして。

学校が何事もなく終わり、開かずの間が使えないため柔道場で少し初音さんにひねられた後今日は解散になった。

恵助は家にも帰らず制服のままで夕飯の食材を買いに街に繰り出し、そのついでに街角をじっくりと練り歩いた。

とくに、歩き回っても傷むようなものを持っていなかったので街の南端を越えて聖地公園がある小さい山を登って、公園の端のベンチに座った。

冬が影も形もなくなって昼間はもう暖かいって言うのに、夜になると風は時々冷たかった。

独り。
すこしだけ、ぼんやりとして。

独り。
すこしだけ、ため息をついた。

日が沈んできて、公園端の方まで暗いカーテンが引かれるころ、恵助は重い腰を上げ、少しだけ遠回りして家路についた。

未だにスイッチは最鈍化。

スイッチを鋭敏化させて何もみえなかったらと思うと、どうも最鈍化のスイッチを切りたくなかった。

街に出て、無駄に道を曲がりながら、後一キロほどで家に着くというところの遮断機さえない小さな線路で、何か引っ掛かった。

何か、いる気がした。

これは霊感によるところではなく、単なる直感で、だ。

イヤだったけれど、スイッチを鋭敏化にシフトさせる。
すると、線路の中心でうずくまってシクシク泣いている、まだ小学校に上がるか、あがらないか位の男の子がいた。

「どうしたんだ？こんなところで泣いていたら危ないだろ？」
恵助は隣にしゃがみこんで男の子を観察した。

［お母さん。お母さんはどこなの？］
頭を振って、男の子は恵助の制服の端を掴んだ。

さらに視ると、どうやらこの子はここで線路にくつを挟んでしまった母親と一緒に電車に引かれて死んでしまったらしい。
母親は角度的に息子が生き延びたように見えていたらしく、もう成仏できたらしい。
だからこそこの子はここに一人取り残され、縛られているってわけだ。

「ボク、上を見れるかい？」
［うん。］

「じゃあ、あそこでお母さんが呼んでるのは分かるかい？」

空では、きれいな星が瞬いていた。

［ああっ、ほんとだぁ。］

「そう。じゃあ、お母さんのところにいけるね。」

［でも、ボク…］

また、男の子は下を向いた。

恵助がそこを覗き込むと、枕木がまるで手のようになって少年の足を掴み、同化しかけていてとてもこのままでは上にはいけそうにない。

これが、この子が母親を待ちながら、会えるまで待ち続けるため、ここにとどまり続けるために力を使ってしまったツケ。

ここに自分を押さえつけるイメージだ。

「大丈夫。ボク、名前は？」

［カズユキだよ］

「そっか、カズユキ君。これからこの木を何とかしてあげるから、もう迷わないでまっすぐお母さんの声がするほうにいくんだよ。」

［お兄ちゃんこれ何とかできるの？］

「こう見えて、お兄ちゃんはすごいんだ」

力こぶをつくる様なしぐさの後、恵助は買い物袋をとりあえず置いて、学生かばんから浄霊ハリセンを取り出した。

二、三度振ってから、変形した枕木のイメージをひっぱたく。

まるで、少年の足に高圧電流が流れたように急に枕木の手は弾かれて脚から手を離し、元のただの枕木へと形を戻していった。

「これで大丈夫。」

少年の霊は開放された足を何度か踏みしめて光を放つようなまぶしい笑顔を浮かべて、

［ありがとうお兄ちゃん！］

というなりふわりと浮かび上がった。

「声がするほうに真っ直ぐだよ。もう迷っちゃだめだからな～」

［うん！バイバイッ］

手を振って男の子は真っ直ぐに上に昇っていった。見えなくなるころ、周囲を見渡さずに再び、すぐに恵助は最鈍化のスイッチを入れた。

ハリセンをしまって、買い物袋を拾って家に帰る。

カンカンと寂しい音をさせて家に入り、夕飯を作って余りを冷凍にしてしまった。

「つまらない、な。」

カーテンを開けて窓を全部開けた。

空にはまったく雲がなくて、冬の放射冷却の夜のように星がきれいだった。

「はあ。」

また、少しぼんやりして、ため息をついてしまった。

なんだよ。俺はいつからこんなに暗くなったんだ。

「あ～、月が、星がきれいだなぁっと」

一人でそんなことをいったとき、窓がからりと半分閉まった。

「まったく、立て付けが悪いのかな」

すべてまた開け放つ。

が、また、窓は半分閉まった。

「え……あれ？これ、は？」

振り向けなかった。

その代わりに、窓をまた全開にしてみた。

フレームがカタカタとゆれて、今度は勢い良く全部しまった。

そして、服の裾が引っ張られる。

振り向く前に、恵助は霊感の最鈍化スイッチを切る。
ゆっくり、ゆっくりと振り向くと、そこには照れたように笑うレイコがいた。

「レイコ……」

［あなた、私が見えているの？］

恵助の言葉を受けて演技がかった様子で、レイコは初めて会ったときみたいに言ってきた。

「はは、まあね。」

［私はレイコ。苗字は忘れちゃったから、ただのレイコよ。記憶のかけらを探しているんだけど、あなたがよかったら、協力してくれないかしら。］

「こんな俺で役に立てるなら。」

［あなたの名前は？］

「高柳…恵助だ」

［契約、完了だね。恵助］

レイコは首をやや傾けながら、俺の顔を覗き込むようにそういった。

「レイコ。……お帰り。」

よかった。

何でレイコは戻ってこれたのか、とか、あの時は本当に消滅してしまったみたいに感知できなかったのに、とか、そんな陳腐な言葉じゃなくて、とっさに出た言葉がお帰りだったことに恵助は嬉しくなった。

恵助の言葉を受けて、レイコも嬉しそうに微笑んで。

「ただいま。っていうか、この間日曜には復活してたんだけど、あなたぜんぜん気付かなかったんですもの。今日だって朝初音さんは気付いてくれたのに気付いてくれなかったし。だから気付いてくれるまで何もしないで待ってようと思ったんだけど、恵助、一人でつまらないなんていうんだもん。わたしもいつまでもこのままじゃつまらないなあって。」

肩をすくめて見せた。

「それなら、すぐにいってくれればよかったのに。」

［まあ、その代わり、面白いものを見れたからよかったけどね～］

「……まて、面白いものって…？」

［ん～、日曜には復活してたのよ？私は。］

「日曜……ああっ、ってことはつまり？」

［いや～、いいのよ。だって恵助は男の子だもんねぇ。そりゃあ、プルートがどんなものなのかばらされそうになったら霊感の有無なんて簡単に白状しちゃうってもんよね～。納得、納得。］

「ちょ、待てよ！」

ぎゃいぎゃいと、下の階の迷惑も忘れて騒いだ。

こんなことなら、やっぱりレイコと契約しなきゃ良かったかも、と思った。でも。

どちらからともなく、二人は壁に寄りかかるように座り込んだ。

「レイコ…」

［ケースケ…］

二人は同時に名前を呼び合い一瞬困った顔を見合わせて笑った。

「これからもよろしく。レイコ。」

手を差し出すとレイコは軽く光るその細い手で、優しく握り返してきた。

あの、楽しい日々はもう少し続いてくれそうだ。

「うん。よろしくね、恵助。」

栗色のレイコの髪は頷いた拍子に揺れ、月光が当たってまるで純金で出来ているように、綺麗だった。

――――――――第一章終幕

エピローグ（後書き）

第一章、完結です。
第二章は今構想を練っているところなので、同じ世界観の親戚作品（小日向一年後の世界）をアップしていきます。
これは某所で初めて区切りまで完結させたカキモノです。今見直すとうぉこれやべぇですよ。となってしまいます。
でも、思い入れはすごいです。
あなたが、よんでいる間少しでも、退屈ではない時間を過ごせたなら、うれしいです。
では、また他の作品でお会いできるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5274b/

幽霊は同居人？

2010年10月12日02時48分発行